

# 本高円ノ前遺跡

中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004. 3

財団法人 鳥取市文化財団

# 本高円ノ前遺跡

中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2004. 3

財団法人 鳥取市文化財団

## 序 文

鳥取市は、鳥取県の県庁所在地として、また、山陰地方の中核都市として発展してきた、人口15万人あまりを擁する地方都市です。

鳥取市内には、鳥取平野をはじめその周辺丘陵に、数多くの遺跡が存在しています。これらの埋蔵文化財は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では、開発と文化財の共存をはかるべく、各関係機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めています。

さて、今回実施した本高円ノ前遺跡の調査は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る発掘調査として、平成14年度から調査を行ってきました。調査の結果、弥生時代と中世を中心とした時期の貴重な遺構、遺物が検出され、当地域の古代文化の一端を明らかにする資料を提供することができました。ささやかな冊子ではありますが、市民各位ならびに関係各位の埋蔵文化財の理解に供していただければ幸いです。

おわりに、今回の発掘調査にあたり、ご理解とご協力をいただきました地元の皆様をはじめ関係各位の方々に、心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 鳥取市文化財団  
理 事 長 石 谷 雅 文

## 例 言

1. 本書は、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業の事前調査として実施した本高円ノ前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、財団法人 鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが、平成14年度に現地調査を実施し、15年度に報告書を作成した。
3. 発掘調査を実施した遺跡の所在地は、鳥取市本高 宇円ノ前である。
4. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、鳥取市教育委員会に保管されている。
5. 現地実測、図面の作成は、調査員、補助員を中心に調査参加者全員の協力のもとに行い、出土遺物の整理および遺物実測は、下多 みゆきを中心として、濱橋 博子、中村 真樹子がこれを補佐した。
6. 本書の執筆、編集は、藤本 隆之が行い、水田 りん太郎、井上 初恵がこれを補佐した。
7. 現地調査から報告書作成にいたるまで、以下に列記している多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただき、厚く感謝いたします。

鳥取県土木部道路課、姫路鳥取線用地事務所、財団法人 鳥取開発公社、鳥取市建設部土木建設課  
久保 智康、藤澤 良祐、穴澤 義功、古川 登、八幡 輿、杉谷 美恵子、森下 佐智枝

(順不同、敬称略)

## 凡 例

1. 本報告書における方位はすべて磁北を示し、レベルは海拔標高である。
2. 本書に使用した遺構等の略号等は次のとおりである。  
SB：掘立柱建物、SK：土坑、SD：溝状遺構、P：柱穴・ピット  
KR：擾乱坑、TR：トレンチ、：石、：木
3. 今回の調査によって出土した遺物は、遺跡名、調査年度、遺構番号、取上げ順による遺物番号(遺物台帳登録番号)、取上げ年月日を基本的に注記している。写真や図面などの記録類も同様である。
4. 現地調査時の旧遺構番号と本書に使用した正式遺構番号との対応は以下のとおりである。

新旧遺構番号対応表

新	旧
SK-34	P-23
SK-35	P-26
SK-36	P-28
SK-37	P-29

新	旧
SK-38	P-80
SK-39	P-145
SK-40	P-155
SK-41	P-600

新	旧
—	SD-18
SK-23	SD-23

# 本文目次

序文

例言 凡例

第1章 発掘調査の経緯

　1. 発掘調査に至る経緯 ..... 1

　2. 発掘調査の経過 ..... 1

　3. 調査の組織・体制 ..... 2

第2章 遺跡の位置と歴史的環境 ..... 3

第3章 調査の結果

　第1節 本高円ノ前遺跡の立地と基本層序 ..... 8

　第2節 弥生時代の遺構・遺物 ..... 11

　　1. 土坑 ..... 12

　　2. 溝状遺構 ..... 12

　第3節 中世期の遺構・遺物 ..... 15

　　1. 掘立柱建物 ..... 15

　　2. 土坑 ..... 36

　　3. 溝状遺構 ..... 62

　　4. 遺構外遺物 ..... 67

　第4節 まとめにかえて ..... 70

　　掘立柱建物調査一覧表 ..... 74

　　出土遺物観察表 ..... 75

写真図版

報告書抄録

## 挿 図 目 次

第1図 本高円ノ前遺跡周辺遺跡分布図	7	第30図 SK-02 出土遺物実測図	37
第2図 調査位置図	8	第31図 SK-04 実測図	37
第3図 調査地断面図	9・10	第32図 SK-05 実測図	38
第4図 SK-31 実測図	11	第33図 SK-05 出土遺物実測図	38
第5図 SK-32 実測図	11	第34図 SK-06 実測図	39
第6図 SK-31 出土遺物実測図	12	第35図 SK-06 出土遺物実測図	40
第7図 SK-32 出土遺物実測図	12	第36図 SK-07 実測図	40
第8図 SD-34 実測図	13・14	第37図 SK-08 実測図	41
第9図 SD-35 実測図	13・14	第38図 SK-08 出土遺物実測図	41
第10図 SD-32 出土遺物実測図	15	第39図 SK-09 出土遺物実測図	42
第11図 SD-34 出土遺物実測図(1)	16	第40図 SK-09 実測図	43・44
第12図 SD-34 出土遺物実測図(2)	17	第41図 SK-10 実測図	45
第13図 SD-35 出土遺物実測図	18	第42図 SK-11 実測図	45
第14図 SB-01 実測図	19・20	第43図 SK-10 出土遺物実測図(1)	46
第15図 SB-02 実測図	21	第44図 SK-12 実測図	46
第16図 SB-03 実測図	22	第45図 SK-10 出土遺物実測図(2)	47
第17図 SB-04 出土遺物実測図	22	第46図 SK-11 出土遺物実測図	48
第18図 SB-04 実測図	23・24	第47図 SK-13 実測図	48
第19図 SB-05 実測図	25・26	第48図 SK-14 実測図	48
第20図 SB-06 実測図	27	第49図 SK-12 出土遺物実測図	49
第21図 SB-08 実測図	28	第50図 SK-13 出土遺物実測図	50
第22図 SB-07 実測図	29・30	第51図 SK-14 出土遺物実測図	50
第23図 SB-09 実測図	31	第52図 SK-15 実測図	50
第24図 SB-10 実測図	32	第53図 SK-16 実測図	50
第25図 SB-10 出土遺物実測図	33	第54図 SK-17 実測図	51
第26図 SK-01 実測図	34	第55図 SK-18 実測図	51
第27図 SK-02 実測図	35	第56図 SK-19 実測図	51
第28図 SK-01 出土遺物実測図	36	第57図 SK-21 実測図	51
第29図 SK-03 実測図	36	第58図 SK-22 実測図	51

第59図	SK-23	実測図	51	第86図	SK-40	出土遺物実測図	61
第60図	SK-17	出土遺物実測図	52	第87図	SK-40	実測図	62
第61図	SK-24	実測図	52	第88図	SK-41	実測図	62
第62図	SK-25	実測図	52	第89図	SD-01~07	断面実測図	63
第63図	SK-18	出土遺物実測図	53	第90図	SD-03	出土遺物実測図	64
第64図	SK-20	出土遺物実測図	54	第91図	SD-06	出土遺物実測図	64
第65図	SK-23	出土遺物実測図	54	第92図	SD-07	出土遺物実測図	64
第66図	SK-19	出土遺物実測図	54	第93図	SD-08	出土遺物実測図	64
第67図	SK-24	出土遺物実測図	54	第94図	SD-13	出土遺物実測図	64
第68図	SK-26	実測図	55	第95図	SD-21	出土遺物実測図	64
第69図	SK-26	出土遺物実測図(1)	55	第96図	SD-08~10・12~17・19・20		
第70図	SK-26	出土遺物実測図(2)	56			断面実測図	65
第71図	SK-26	出土錢貨拓影	56	第97図	SD-17	出土遺物実測図	65
第72図	SK-27	実測図	57	第98図	SD-21・22・24・25・32		
第73図	SK-28	実測図	57			断面実測図	66
第74図	SK-29	実測図	57	第99図	SD-22	出土遺物実測図	67
第75図	SK-29	出土遺物実測図	58	第100図	SD-25	出土遺物実測図	67
第76図	SK-33	実測図	58	第101図	SD-39	出土遺物実測図	67
第77図	SK-34	実測図	58	第102図	SD-54	出土遺物実測図	67
第78図	SK-30	実測図	59	第103図	ピット内出土遺物実測図(1)	68	
第79図	SK-35	実測図	59	第104図	ピット内出土遺物実測図(2)	69	
第80図	SK-36	実測図	59	第105図	遺構外出土遺物実測図(1)	70	
第81図	SK-30	出土遺物実測図	60	第106図	遺構外出土遺物実測図(2)	71	
第82図	SK-35	出土遺物実測図	61	第107図	遺構外出土遺物実測図(3)	72	
第83図	SK-37	実測図	61	第108図	遺構外出土遺物実測図(4)	73	
第84図	SK-38	実測図	61	第109図	遺構外出土遺物実測図(5)	74	
第85図	SK-39	実測図	61				

# 図版目次

## 図版1

調査地南北全景(俯瞰)  
調査地北半全景(東から)

## 図版2

南北中央断面①(北から)  
南北中央断面②(北から)  
南北中央断面③(北から)

## 図版3

五筋鉈

甕瓶

SK-12 出土遺物(1)

## 図版4

SK-02 出土遺物(1)  
SK-06 出土遺物(1)  
SK-09 出土遺物(1)

## 図版5

SK-12 出土遺物(2)  
SK-13 出土遺物(1)  
SK-26 出土遺物(1)  
SD-06 出土遺物

## 図版6

SD-13 出土遺物(2)  
SD-21 出土遺物  
SD-22 出土遺物

## 図版7

P-510 出土遺物  
P-1469 出土遺物  
SK-02 出土遺物(2)  
SK-09 出土遺物(2)  
SK-09 出土遺物(3)  
SK-26 出土遺物(2)

## 図版8

調査前(北西から)  
SK-01 完掘状況(北東から)

## 図版9

SK-02 完掘状況(北から)  
SK-03 断面(北東から)

SK-03 完掘状況(北東から)

## 図版10

SK-04 検出状況(北東から)  
SK-05 断面(南から)  
SK-05 完掘状況(西から)

## 図版11

SK-06 断面(南から)  
SK-06 完掘状況(南から)  
SK-07 断面(南東から)

## 図版12

SK-08 完掘状況(北東から)  
SK-09 断面(西から)  
SK-09 完掘状況(西から)

## 図版13

SK-10 断面(南から)  
SK-10 完掘状況(南から)  
SK-11 断面(北東から)

## 図版14

SK-11 完掘状況(南西から)  
SK-12 断面(北西から)  
SK-12 検出状況(西から)

## 図版15

SK-13 断面(北西から)  
SK-13 完掘状況(北西から)  
SK-16 断面(北から)

## 図版16

SK-17 断面(北から)  
SK-18 断面(北東から)  
SK-19 断面(東から)

## 図版17

SK-19 検出状況(西から)  
SK-21 断面(南西から)  
SK-21 完掘状況(北西から)  
図版18

SK-23 断面(東から)  
SK-23 完掘状況(南東から)  
SK-24 検出状況(西から)

## 図版19

SK-25 断面(南東から)  
SK-25 完掘状況(北東から)  
SK-26 断面(南西から)

## 図版20

SK-26 完掘状況(南東から)  
SK-26 遺物出土状況(北西から)  
SK-27 断面(北東から)

## 図版21

SK-29 完掘状況(北東から)  
SK-30 断面(北東から)  
SK-30 検出状況(南東から)

## 図版22

SD-01 断面(東から)  
SD-03 断面(南西から)  
SD-06 断面(西から)

## 図版23

SD-10 (南から)  
SD-15・16・17 断面(南東から)  
SD-21 断面(南西から)

## 図版24

SD-23 断面(南西から)  
SD-25 断面(南東から)  
SD-34 断面①(北から)

## 図版25

SD-34 断面②(南から)  
SD-34 断面③(北から)  
SD-34 検出状況(北から)

## 図版26

SD-34 検出状況(北から)  
SD-34 遺物出土状況(南東から)  
SD-34 完掘状況(北から)

## 図版27

SD-35 検出状況(西から)  
SD-35 断面①(西から)

## 図版28

SD-35 完掘状況(西から)  
SD-35 断面②(西から)

## 図版29

SD-35 遺物出土状況(南から)  
P-1031 検出状況(北から)  
P-1397 断面(南東から)

## 図版30

P-1405 検出状況(北東から)  
P-1555 検出状況(南東から)  
P-1557 断面(東から)

## 図版31

P-1558 断面(北から)

P-1634 断面(北から)

整地層断面(南から)

## 図版32

北半ピット群(北東上空から)  
南半ピット群(北から)  
南半中央ベルト下遺物出土状況  
(北東から)

## 図版33

SK-01 出土遺物  
SK-02 出土遺物(2)  
SK-06 出土遺物(3)  
SK-08 出土遺物

## 図版34

SK-09 出土遺物(4)  
SK-10 出土遺物(1)

## 図版35

SK-10 出土遺物(2)  
SK-11 出土遺物  
SK-12 出土遺物(3)  
SK-14 出土遺物  
SK-17 出土遺物

## 図版36

SK-18 出土遺物  
SK-26 出土遺物(3)  
SK-29 出土遺物  
SK-30 出土遺物(1)

## 図版37

SK-30 出土遺物(2)  
SK-31 出土遺物(1)  
SK-31 出土遺物(2)  
SK-32 出土遺物(1)

## 図版38

SK-35 出土遺物(1)  
SD-03 出土遺物

## 図版39

SD-07 出土遺物

SD-08 出土遺物

SD-21 出土遺物

SD-32 出土遺物

SD-34 出土遺物(4)

## 図版40

SD-34 出土遺物(2)

SD-35 出土遺物(1)

## 図版41

SD-35 出土遺物(2)

SD-39 出土遺物

SD-54 出土遺物

P-018 出土遺物

## 図版42

P-437 出土遺物

P-534 出土遺物

P-796 出土遺物

P-1078 出土遺物

P-1269 出土遺物

P-906 杖根

P-1405 杖根

## 図版43

遺構外出土遺物(1)

## 図版44

遺構外出土遺物(2)

# 第1章 発掘調査の経緯

## 1. 発掘調査に至る経過

本高円ノ前遺跡は、鳥取市本高地内の独立丘陵裾の微高地上、標高約8～10mに立地する。過去の分布調査などにより遺物の散布が確認されており、集落遺跡などの可能性が指摘されていた。また、昭和44年(1969年)、丘陵と服部集落との間の水田から圃場整備工事によって弥生時代中～後期の土器とともに田下駄、大足が出土している。古来、丘陵の北東側に広がる菖蒲集落を中心とする平野部一帯は、律令体制下では因幡国高草郡に含まれ、白鳳時代の菖蒲庵寺の建立や、都衙の推定地など歴史ある地域として知られている。本格的な発掘調査例としては、昭和62年に北村恵儀谷遺跡、平成3年に鈎山古墳群、平成4年に古海古墳群、翌5年に菖蒲遺跡、平成6・7年度に山ヶ鼻遺跡、平成11・12年度には服部墳墓群などがあり、古くは绳文時代後期から人の足跡がたどれる地域となってきた。

今回の発掘調査の契機となった中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業は、服部墳墓群が所在する丘陵と丘陵裾に建設予定地が計画されているものである。服部墳墓群については平成11・12年度に本格的な発掘調査を終えている。工事範囲内の丘陵縁辺の微高地では遺物散布地が含まれていることから、鳥取市教育委員会が平成11～13年度に試掘調査を実施した。調査の結果、今回の調査予定地には弥生時代と中世期を主とした遺構、遺物が確認された。鳥取市教育委員会はこれらの試掘結果をもとに、関係機関との路線変更等を含め種々の協議を行ったが、現状での保護、保存は難しく、記録保存で対応することとなった。

## 2. 発掘調査の経過

本高円ノ前遺跡の発掘調査は、財團法人鳥取市開発公社の委託を受け鳥取市文化財課 鳥取市埋蔵文化財調査センターが調査を実施した。

平成14年度は、資材搬入などの調査準備の後、平成14年10月から開始した。調査地内には用水路が機能しており、この水路を境に調査地を南北に二分し、調査は南側(A区)から着手して、北側(B区)を残土置き場として利用した。A区の調査が終了した後、残土を反転してB区の調査を行った。表土除去については重機を用いた。測量杭の設置は任意のライン(A—I)を基準として、直交する基準杭を遺構の密度に応じて適宜設置した。降雨や積雪の際、調査地の冠水、水没を防止するため排水溝を設置して常時排水を可能にした。調査期間の短縮を計り、A区については遺構の検出と並行して業務委託にて遺構測量を実施した。北側B区については調査面積が狭小のため、担当調査員、補助員で測量を行った。A区についてはラジコンヘリコプター、B区は高所作業車にて全体の写真撮影を行った。全ての調査が終了した後、調査地の埋め戻しを行い、業務委託にて再度地籍測量を実施し、主な畦畔や排水路の復元を行った。遺構は弥生時代と中世期を中心に大きく2時期が存在するが全て同一面において検出している。検出した遺構は総数1,368を数え、最終的な調査面積は3,236m<sup>2</sup>である。

こうして、年度末3月下旬で現地調査を完了した。検出した各遺構、遺物については適宜写真撮影や実測を行った。出土した遺物と写真や図面などの記録類の整理は現地調査と並行して進め、遺物については、水洗い、バインダー処理等の後、注記、復元作業を行なった。また、本格的な報告書作成は平成15年度に行った。

### 3. 調査の組織・体制

発掘調査の組織、体制は以下のとおりである。

平成14年度 調査主体 財団法人 鳥取市文化財団  
理事長 竹内 功（鳥取市長）  
副理事長 福田 泰昌  
中川俊隆（鳥取市教育長）  
常務理事 小谷 庄太郎（事務局長兼務）  
調査指導 鳥取市教育委員会事務局 文化課  
事務局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
所長 前田 均  
主幹 山田 真宏  
調査事務 秋田 澄世  
白岩 千足  
水戸口 直美  
調査担当 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
調査員 藤本 隆之  
調査補助員 小杉 雄貴  
永田 りん太郎  
井上 初恵

平成15年度 調査主体 財団法人 鳥取市文化財団  
理事長 石谷 雅文（鳥取市副市長）  
副理事長 中川俊隆（鳥取市教育長）  
三田 三香子  
常務理事 小谷 庄太郎  
調査指導 鳥取市教育委員会事務局 庶務課 文化財室  
事務局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
所長 前田 均  
主幹 山田 真宏  
調査事務 秋田 澄世  
白石 千足  
調査担当 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター  
調査員 藤本 隆之  
調査補助員 永田 りん太郎  
下多みゆき  
濱橋 博子

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

鳥取市は県東部に位置し、面積237.25㎢、人口15万人余りを擁する県庁所在地である。市域の三方は山に囲まれ、北は日本海を臨む鳥取砂丘が広がる。市の中央には中国山地を源とする千代川が流れ、この下流域に広がる鳥取平野は、縄文時代前期の縄文海進時には複雑に入り組んだ内湾状を呈していたとみられ、海退に伴う湖沼化と海岸部の砂洲の発達、千代川が運ぶ膨大な土砂の堆積によって形成された沖積平野である。

今回調査した本高円ノ前遺跡は、鳥取市本高地内に所在する標高8~9mの丘陵裾に立地する。JR鳥取駅から直線にして南西約3kmの位置である。この丘陵は東に千代川を望みながら中国山地から鳥取平野へと延びる丘陵の、標高294mの八町山を頂として更に北東へと延びる丘陵北端部に位置し、最北端は有富川を隔てた釣山(標高105m)である。1985年(昭和60年)の鳥取国体を一つの契機として、国道29号線(旧国道53号線鳥取南バイパス)が菖蒲と服部集落の間を通って南吉成へと開通し、その沿線に店舗や各種事業所が進出するなど調査地以北では開発が著しい地帯となっている。ただ、南側の丘陵縁辺部においては、どのかな田園風景が広がる地域もあるが、今後の開発によってその様相は一変するものと思われる。

### 縄文時代

鳥取平野において最初に人の足跡がたどるのは、千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採集された黒曜石製の有舌尖頭器である。詳細は不明ながら旧石器時代まで遡る可能性をもつ遺物である。続く縄文時代前期の遺跡として、砂丘後背地の低湿地に立地する福部村栗谷遺跡が中期から始まる直浪遺跡とともに、後・晩期まで続く遺跡として知られている。やや遅れ、前期末の大歳山式土器が千代川東岸の丘陵上に立地する美和古墳群下層遺跡から微量ながら出土している。また、調査地から北西へ3.5km、湖山池南東岸の低湿地に立地する桂見遺跡は現在のところ前期末を初源とし、東桂見遺跡、布勢第1遺跡とともに後期を中心とした湖山池南東岸の低湿地遺跡群として知られる。桂見遺跡ではこれまで數度にわたる調査が行われているが、平成6、7年度に全長7.2、6.4mの丸木舟が相次いで出土し話題となつた。桂見遺跡の東側に位置する布勢第1遺跡では木組みを有する水路や塗造で木製の広口壺や腕輪が出土し、高度な漆技術が示された。また、湖山池に浮かぶ青島遺跡では、磨消縄文の浅鉢など多くの遺物が出土している。中期の遺跡としては砂丘地に立地する柄木山遺跡、追後遺跡、天神山遺跡があげられるが、中期の断片的な土器の出土にとどまる。今回、調査範囲に該当しなかつたが平成11年度の試掘調査において隣接地から晩期の突堤文土器が出土している。また、そのままに北側、釣山の北東に広がる山ヶ鼻遺跡で、縄文時代後期後葉から晩期前葉に比定される土器群が出土している。さらに千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡では突堤文土器の良好な資料が出土しており、中期から晩期へかけて遺跡の立地場所が推移していく状況が窺える。布勢第1遺跡では晩期後半になると平野中心部の微高地に遺跡が進出するようになる。このように後期も後半を過ぎると遺跡は自然堤防上へ進出するようになり、晩期後半になると平野中心部の微高地へ進出するようになる。また、千代川左岸では、岩本第2遺跡、帆城遺跡、湖山第2遺跡、岩吉遺跡、大橋遺跡、里仁遺跡(仮称)等で少量の土器片が出土している。千代川東岸では、平野部に位置する大路川遺跡でトチ・アラカシなどの堅果類の詰まった貯蔵穴5基、土製耳飾、後期~晩期前半の土器等が検出され、この他晩期の土器が断片的ながら、西大路土居遺跡、古市遺跡などで出土している。

### 弥生時代

弥生時代に入り、縄文時代晩期からの遺跡が引き続き営まれるが、前期の遺物を断片的に出土するだけで中期へ継続しない傾向がみられ、前期の実態は不透明な部分が多い。前期の遺物を出土する遺跡として、青島遺跡、湖山第1・2遺跡、布勢第1遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、天神山遺跡、身干山遺跡な

どが挙げられる。そんな中、鳥取平野の拠点集落と考えられている岩吉遺跡では、千代水平野の自然堤防上の砂州を中心とした微高地に立地し、これまで数度の調査が行われている。遺跡の範囲は南北1,300m、東西800mに及び、鳥取平野で最初に稻作を導入した遺跡と考えられる。ただ前期の資料は数少なく、中期の遺物も今のところ断片的な出土にとどまり、昭和63~平成2年度の調査では、弥生中期中葉から後期にかけて掘立柱建物、土坑、溝状造構等の遺構が検出されている。この他、千代川東岸では西大路土居遺跡、富安遺跡が前期の遺物を出土する遺跡として知られる。中期中葉には自然堤防上に出現する古海、菖蒲、山ヶ鼻、服部、秋里遺跡などがある。中期後葉になると段丘状の微高地に立地する遺跡が日立ち始め、帆城、湖山第2、布勢第2、大柄、北村恵儀谷遺跡などがその例である。こうして後期に入ると松原谷田、桂見遺跡をはじめ数は飛躍的に増加するとともに遺跡内の住居も増加傾向がみられ、それぞれ古墳時代へと営まれていく。

この地域の弥生集落の一特徴として、玉作り関連の遺物が帆城、岩吉、秋里遺跡で出土している他、布勢第2遺跡で玉作り工房とみられる竪穴住居が検出されている。この他に、祭祀遺跡として湖山池に浮かぶ青島遺跡、湧泉に展開した寒ノ谷遺跡、弥生中期を初現とした秋里遺跡があり、高住字宮ノ谷では、扁平鉢式の流水文銅鐸が出土している。

周辺の弥生時代の遺跡としては、千代川水系の氾濫原にあたる平野部にあたり、服部集落西側の標高7~8m程度の微高地に服部遺跡が内包している。昭和44年、圃場整備に伴う工事によって弥生時代後期の土器とともに田下駄、大足などの木製品が出土している他、服部遺跡出土とされる弥生時代中期の土器が鳥取県立博物館で所蔵されている。また、調査地より西側1.3kmの丘陵裾部の微高地には北村恵儀谷遺跡が位置しており、後期を主体とする竪穴住居や土坑、掘立柱建物などが検出されている。また、北側の独立丘陵の釣山では、弥生時代後期の住居跡が検出されている。調査地から0.8~1.5km北の自然堤防上の微高地には、山ヶ鼻遺跡、菖蒲遺跡が位置しており、中期中葉~後期の土坑や重複する溝状造構が検出されている他、山ヶ鼻丘陵では、中期の竪穴住居、貯藏穴が調査されている。

こうして弥生時代も後期に入ると、諸集団の統合がすすみ、千代川東岸の南部地域の勢力に対するかのように地域勢力として目覚ましい台頭がみられる。その構造を具体的に示すものとして挙げられるのが、布勢鶴指奥1号墓、第1土壙墓を中心とした桂見土壙墓群である。これらは、湖山池を望む丘陵上に突如造営され、この中最も古い布勢鶴指奥1号墳丘墓は後期中葉の造営で、次の時期となる西桂見墳丘墓は四隅突出型墳丘墓と考えられており、突出部を含め一辺64×高さ5mと傑出した規模である。続く桂見土壙墓群では調査前重機の削平・擾乱を受けていた後の調査であったが、丘陵頂部に位置し、石列と地山の浅い掘削によって12mの方形状に墓域を区画し、中心主体とみられる第1土壙墓でのガラス製勾玉、水銀朱の出土などから墳丘墓であった可能性があるとされる。この他に、千代川東岸では、桂見周辺の勢力に対峙すると考えられている郡家町下坂1号墓、紙子谷遺跡門上谷1・2号墓がある。このうち1号墓は長辺24mの規模で26基の埋葬施設をもち、ガラス製管玉や鉄刀などが出土している。この他、これまで調査事例の少なかった弥生時代の墳墓は、後期前葉に位置付けられる滝山狼懸平2号墓をはじめ、土壙墓については古墳築造以前の造構として検出される例(六部山古墳群など)もあり、弥生時代の墳墓の調査例は今後増加していくものとみられる。

#### 古墳時代

古墳時代になると、平野周辺部の丘陵上に大小さまざまな古墳が造られるようになる。引き続き千代川西岸では湖山池南東岸の桂見古墳群、倉見古墳群などを中心として展開されるが、これらは弥生時代からの系譜を引く方墳である。桂見1号墳は長辺22m×高さ2.5m、統いて作られた2号墳は長辺28m×高さ4.5mの規模で長大な木棺から舶載鏡を出土している。これらに統く主体部や副葬品等卓越した内容の古墳は今のところ明らかになっていない。10m前後の小規模古墳として倉見2~7号墳、桂見10・16号墳が調査されており、前期後半~中期初頭とやや遅れて丘陵上に造営されている。土器転用枕

や弥生時代からの系譜とみられる湾曲する小口を有する木棺、舟形木棺の採用が特徴的であり但馬から丹後地方との同期の交流を窺う上で興味深い。周辺では、これまでに判明しているものでは、釣山24号墳(長辺22m、方墳)、銅鏡を出土した古海40号墳を含め古海古墳群、徳尾古墳群が前期古墳として知られている。また、調査地に隣接する服部墳墓群では平成11・12年度に調査が行われ、弥生時代の墳墓が3基、前期古墳が3基、後期古墳が4基確認されており、前期古墳である服部18号墳から撰文鏡が出土している。中期になって前方後円墳としてそれぞれ未調査のため内容は不明瞭ながら、里仁29号墳(全長85m)が、やや遅れて柿岡1号墳(全長92m)、前方後方墳では古海36号墳(全長67m)などが点在する。調査例としては方墳で構成される里仁古墳群があり、畿内地方の影響を強く受けた鱗付円筒埴輪が出土している。また、最近調査された下味野古墳群では箱式石棺より鉄鋒が出土している。後期に入って小規模古墳は墳丘規模が全体的に小型化する傾向があり、支稜線上にも造られるようになる。前方後円墳として布勢1号墳(全長59m)、大熊段1号墳(全長46.5m)があり、三浦1号墳(全長36m)、桂見6号墳(全長24.5m)、釣山2号墳(全長26.4m)等のように小規模な前方後円墳の築造もみられるようになる。このように小規模な前方後円墳を比較的多く有する古墳群として良田古墳群、松原古墳群などが挙げられる。桂見古墳群では湾曲した小口穴をもつ木棺が再び採用されるなど木棺墓が主流であり、千代川右岸に比べて箱式石棺の事例が少ないようである。千代川左岸では古墳の内部構造については右岸に比較して調査例が少なく特に湖山池周辺の横穴式石室については6世紀中葉の葦岡長者古墳(吉岡1号墳)、後葉の倉見9号墳、時期不明の石場山5号墳、高住12号墳が確認されているだけである。石材の豊富な東岸と比べて全体的に横穴式石室の造営が数少なく東岸でよく見られる所謂「中高式天井石室」とは異なる石室形態をとるようである。ただ、野坂川右岸の丘陵東側斜面に立地する山ヶ鼻古墳(古海13号墳)は巨石を削り抜いた石棺式石室で7世紀中頃の築造でありその特徴的石室構造とともに数少ない後期~終末期古墳として、7世紀後半に創建されたと考えられている菖蒲庵寺につながる貴重な存在である。

古墳時代の集落の調査例は比較的少ないものの、現在のところ古墳の立地する丘陵の後背地微高地に、現集落と重なって営まれたものと推察されている。弥生時代から続く遺跡として、布勢第2遺跡、桂見遺跡、帆城遺跡、潤山第1、潤山第2遺跡、天神山遺跡等がある。いずれも大集落とはいわず微高地に住居跡が点在するといった状況で、西桂見遺跡の調査から、弥生時代丘陵上にみられた住居も古墳築造期になると丘陵斜面へ下りていくとされる。この他に千代川左岸では、岩吉、菖蒲、山ヶ鼻、大柄遺跡等がある。菖蒲遺跡では釣山掘の微高地に焼失住居が検出されている。しかし菖蒲・服部の平野部周辺では中期になると溝状遺構を除いて明確に古墳時代中後期に比定される遺構は7世紀に入るまでみられなくなるようである。また、この時期の特徴的な遺跡として、秋里、塞ノ谷遺跡を挙げることができる。前者は古墳時代を中心として弥生後期・奈良・平安時代と祭祀色が濃く、特に多量の土師器とともに各種模造土・石製品が出土する土器群、土器縫合遺構が特徴的である。後者は湧泉を中心に弥生~古墳時代と継続して展開され、分銅形土製品や、舟、刀等各種木製模造品が注目される。

### 3. 菖蒲庵寺

7世紀に入つてからは、白鳳後期創建とされる菖蒲庵寺に象徴されるように菖蒲村周辺は古代山陰道の通過地点とともに駅町、郡家の推定地でもあり、律令期に入つて鳥取平野西岸の中心的地域であつたとされる。現在でも菖蒲集落の西に菖蒲庵寺の塔の心礎とみられる礎石があり、この付近で土師百井式軒丸瓦が出土している。またその250m西の山ヶ鼻遺跡では、菖蒲庵寺の時期と重なる7世紀の掘立柱建物群、溝状遺構、土坑等が検出されている。千代川対岸の古市遺跡では7世紀後半から平安時代にかけての掘立柱建物と奈良三彩小壺、墨書き器などが出土している。また、律令体制下のこの地域は、天平勝宝7年(755年)、「東大寺東南院文書」「東大寺領因幡國高草郡高庭庄坪付注進状案」から南北10条にわたり条里制が施行されていたことが明らかとなっている。この時期、菖蒲遺跡では釣山沿いの微高地に8世紀後半の総柱建物が検出されている。しかし高庭庄の經營はうまくいかず、その後延暦20年(801

年)、延暦22年(803年)東大寺から庄域の多くが藤原綱主、藤原藤嗣へ売却され、残りの散在する5町8反余りを中心として開発を行ったが、その後10世紀後半には完全に没落し、長保6年(1004年)を最後に史料に見られなくなる。10世紀初頭から国衙領体制が成立していく中で国衙領として再編されたものと考えられ、中世には一部を高草郡の郡領寺である薬師寺(後の座光寺)が有していたと『因幡民談記』に記されている。その間の遺構として、山ヶ鼻遺跡のそれぞれ墨書き土器などが出土した9世紀後半の井戸や13世紀に至る多量の遺物が出土した大形土坑があり、菖蒲遺跡では9世紀後半の墨書き土器が出土している。また、岩吉遺跡では8~10世紀にかけて溜り状遺構や自然流路から567点にもおよぶ多量の墨書き土器、人形、「天長二年(825年)税帳」と記された題簽軸を含む木簡等が出土し、桂見遺跡堤谷地区では8世紀後半、9世紀後半の掘立柱建物が検出され、いずれも公の機関の存在を示唆する報告がなされている。山ヶ鼻遺跡では輸入陶器類が土坑や井戸から出土しており、菖蒲遺跡では、京都、近江産の綠釉陶器片とともに、白磁片、青磁片が多数出土していることなどから、高庭庄没落後も中世にかけて何らかの統治機関的なものがあったと考えられている。

貞治3年(1364年)、因幡守護に山名氏が任じられる。山名氏は15世紀に入って守護所を布施に移して布施天神山城を築き、鳥取城へ移るまでの100年程の間、因幡支配の拠点とした。『大幅絵図』『因幡民談記』所載の17世紀後半の古絵図には、天神城周辺の様子が描かれており、一部調査されて内堀や土塁、井戸、焼け落ちた建物跡等が検出されている。また、「葬地」と記された丘陵である布勢鶴指與墳墓群、桂見墳墓群で中世墓が検出され、この他に西桂見遺跡、大熊段遺跡、三浦遺跡、里仁古墳群、徳尾古墳群や、中世の埋葬施設とみられる集石遺構が鈎山古墳群で検出されている。また、中世の倉庫跡が布勢第2遺跡で、長さ45m以上の土壘状遺構が西桂見遺跡で検出されている。

慶長5年(1600年)関ヶ原の合戦後鹿野城主となった亀井茲矩は、慶長年間(1596~1614年)によって行われた亀井堤と呼ばれる大規模な堤防や河原を取水口とする大井出用水を開削した。古海、菖蒲、服部地区を含む千代川西岸下流域一帯は安定した用水を確保できるようになった。

#### 引用・主要参考文献

鳥取市新修鳥取市史 第1巻 古代・中世編1983年  
平凡社「日本歴史地名大系第32巻 烏取県の地名」1992年

#### 第1図 遺跡名称

1. 大熊段古墳群	25. 空山古墳群	O. 山ヶ鼻遺跡
2. 三浦古墳群	26. 六部山古墳群	P. 菖蒲遺跡
3. 桂見墳墓群	27. 舟木古墳群	Q. 本高円ノ前遺跡
4. 布勢鶴指與墳墓群	28. 大路山古墳群	R. 服部遺跡
5. 里仁古墳群	29. 面影山古墳群	S. 古市遺跡
6. 桐間古墳群	30. 扇金山古墳群	T. 宮長竹ヶ鼻遺跡
7. 徳尾古墳群	31. 円鏡寺古墳群	U. 楠木道跡
8. 古海古墳群	32. 地窪谷古墳群	V. 越路御澤出土地
9. 本高古墳群	33. 深山古墳群	W. 七谷須恵脇跡群
10. 宮谷古墳群		X. 久末・古郡家・大路川遺跡
11. 小森山古墳群	A. 秋里道路	Y. 西大路上野道跡
12. 鈎山古墳群	B. 岩吉遺跡	Z. 道後遺跡
13. 服部河原古墳群	C. 潤山第2遺跡	a. 西桂見墳丘墓
14. 下味井古墳群	D. 天神山道路	b. 桐間1号墳
15. 錦田古墳群	E. 西桂見遺跡	c. 古海35号墳
16. 横枕古墳群	F. 桂見遺跡	d. 服部23号墳
17. 王洋古墳群	G. 東杜見遺跡	e. 下味井23号墳
18. 長谷寺古墳群	H. 布勢第1遺跡	f. 横枕5号墳
19. 八坂古墳群	I. 布勢第2遺跡	g. 横枕13号墳
20. 織本古墳群	J. 里仁遺跡	h. 古郡家1号墳
21. 美和古墳群	K. 大鶴遺跡	i. 六郎山3号墳
22. 古郡家古墳群	L. 小森山道路	
23. 園原古墳群	M. 北村忠義谷遺跡	
24. 越路古墳群	N. 古海道路	

#### 一凡例一

○ 集落遺跡・遺物散布地

○ 墳墓群・古墳群

■ 主要古墳

▲ 横穴

■ 城跡



第1図 本高円ノ前遺跡周辺遺跡分布図



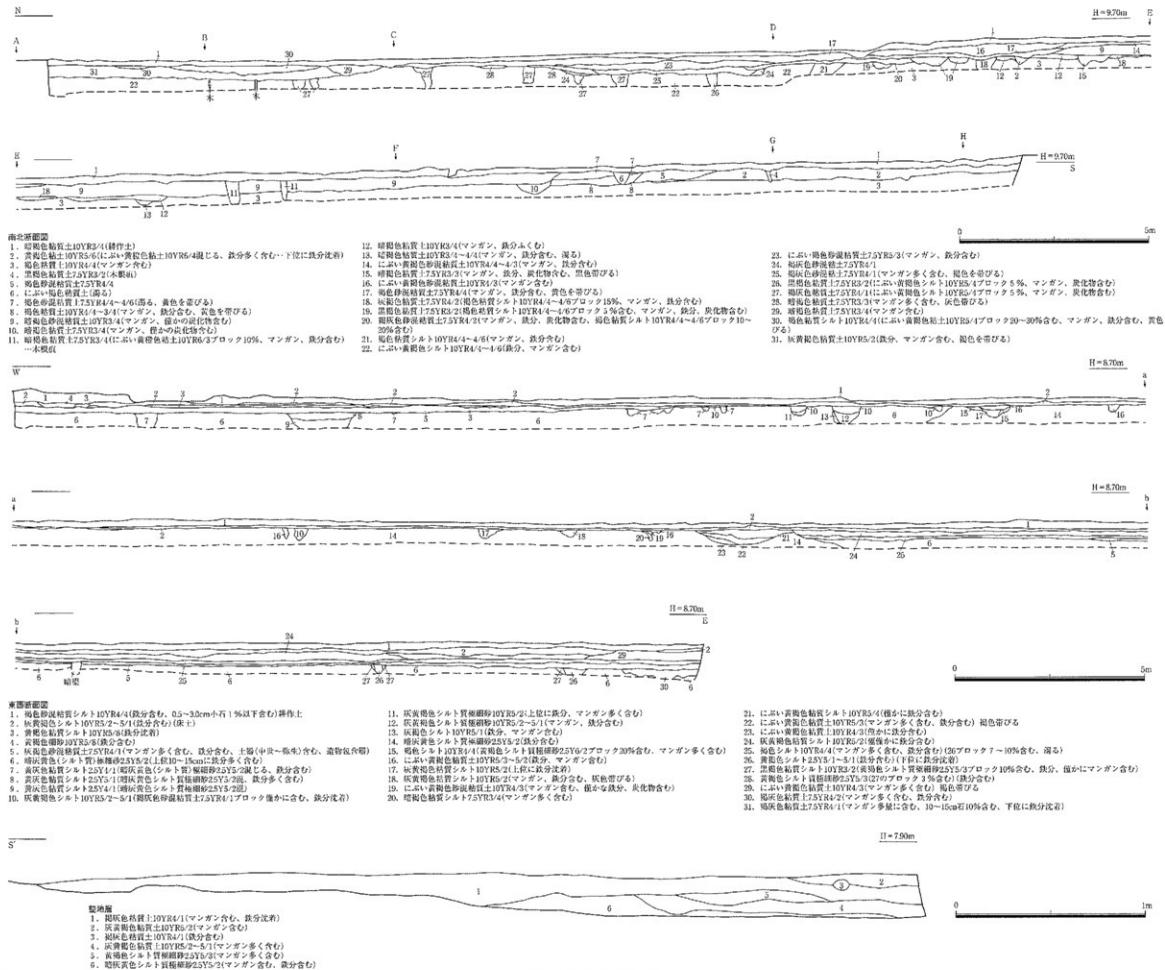
第2図 調査位置図

### 第3章 調査の結果

#### 第1節 本高円ノ前遺跡の立地と基本層序（第2・3図）

鳥取市本高地内の独立丘陵裾の微高地上、標高約8~10mに立地する。丘陵上には弥生時代の墳墓を含め50基の古墳が確認されている。大井出川を挟んで東側、服部集落までの田圃からは昭和44年(1969年)の圃場整備工事によって弥生時代中後期の土器、木製品が出土している。また、有富川を挟んで北東側、0.8~1.5kmには菖蒲遺跡、山ヶ鼻遺跡が位置しており、弥生時代と古代から中世期を主とした集落である。当地は以前から土器などの遺物の散布地として周知されていたが、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進事業において建設予定地に該当するため平成11年度から13年度にかけて、遺跡の範囲、遺構、遺物の有無と埋蔵状況、遺跡の性格等の資料を得ることを目的とした試掘調査が実施された。その結果、隣接する段木には顕著な遺構は確認されず、字円ノ前のみが調査対象地となった。これに伴い仮称であった遺跡名「本高段木遺跡」を「本高円ノ前遺跡」と正式に改めた。

調査地は丘陵裾に位置するため、北側を流れる有富川へ向かって南北に緩やかに傾斜する。調査前の標高は南端で9.9m、北端で8.1mである。比高差は1.8mを測る。地表から10~20cmは耕作土(褐色系10 YR4/4~3/4の粘質土または粘質シルト)が堆積する。北半は田圃として利用されていたため、耕作土下には床土である灰黄褐色シルト10YR5/1~5/2が10cm程度堆積している。北半では標高9.2m前後の遺構検出面である褐色粘質土10YR4/4まで黄褐色粘土10YR5/6、褐色系砂混粘質土7.5YR4/4、10YR3/4が堆積する。北半は田圃として利用するため、削平を受けていると考えられるが、標高7.7m前後の遺構

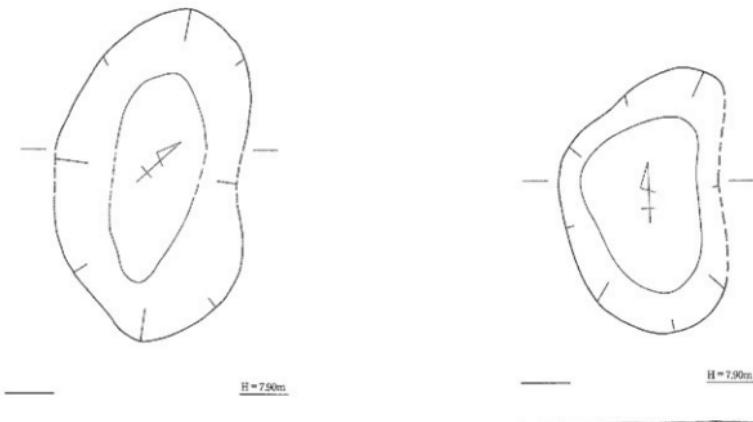


第3図 調査地断面図

検出面は東半と西半で段階的に若干異なり、東側は褐色シルト10YR4/4、西側は暗灰黄色シルト質極細砂2.5Y5/2である。検出面の上位には10cm弱の遺物包含層である褐灰色砂混粘質土7.5YR4/1が堆積しており、弥生時代から中世までの土器類を含む。標高7.7~9.2mの暗灰黄色シルト質極細砂、褐色シルト、褐色粘質土が遺構検出面となる。遺構は弥生時代と中世期の大きく2時期が存在するが全て同一面で検出している。

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は北半西側から土坑2基(SK-31・32)、溝状遺構3条(SD-32・34・35)のみを検出した。北半東側、南半からは明確に当時期に該当する遺構は検出されなかった。このことは、当該期の遺跡の中心は今回の調査地から外れるものと考えられ、北側を流れる有富川方向へ広がるものと考えられる。



1. 暗灰黄色砂混粘質シルト2.5Y5/2~4/2(褐色色シルト質細砂2.5Y4/1ロツリ1%、マンガン、鉄分含む)
2. 褐灰色砂混粘質シルト2.5Y4/2(マンガン、僅かに鉄分含む)
3. オリーブ褐色シルト質細砂2.5Y4/4~4/6(僅かにマンガン、鉄分含む)
4. 黄褐色シルト質細砂2.5Y3/4(鉄分、僅かにマンガン含む)
5. オリーブ褐色シルト質細砂2.5Y4/3~5/3(鉄分含む)

第4図 SK-31実測図

1. 暗灰黄色シルト2.5Y5/2(マンガン、鉄分含む)

0 50cm

第5図 SK-32実測図

## 1. 土坑

### SK-31(第4・6図)

北半の西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈す。長さ2.74m、幅1.66m、深さ50cmを測る。主軸はN=40°-Wにとる。遺物は縄文土器(1)、壺頸部の口縁部(2)などが出土している。

(1)は鉢の口縁部、所謂「突帯文土器」。口縁部は直立し、端部突帯を外方につまみ出す。突帯には刻み目を有する。内外面には工具による条痕が観察される。(2)は所謂「縁上げ口縁」。口縁端面に3条の凹線を有する。

### SK-32(第5・7図)

北半の北側、SK-31の北側に位置する。平面形は不整楕円形を呈す。長さ1.03m、幅0.79m、深さ11cmを測る。主軸はN=17°-Wにとる。遺物は壺(1)が出土している。

(1)の口縁部は短く外傾し、端部で肥厚して面を有する。外面、ハケ目後下半へラ磨き。内面頸部以下ハケ目。



第6図 SK-31出土遺物実測図

## 2. 溝状造構

### SD-32(第7・10図)

主軸を概ねN=43°-Eにとるが緩やかに蛇行する。両端は調査地外へと延びる。溝幅は60cm前後を測り、深さは検出面から15cm程度、底面の標高は7.64~7.70mである。遺物は土器が数点出土している。

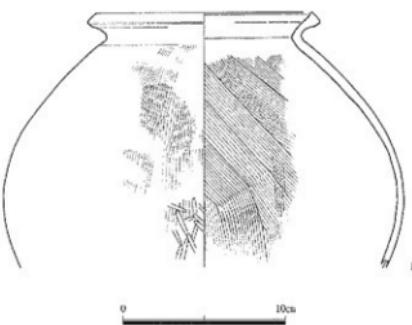
(1・2)は壺の口縁部。共に所謂「縁上げ口縁」と称される端部が下方に肥厚して面を有するものである。共に端面に3条の凹線を有する。

### SD-34(第8・11・12図)

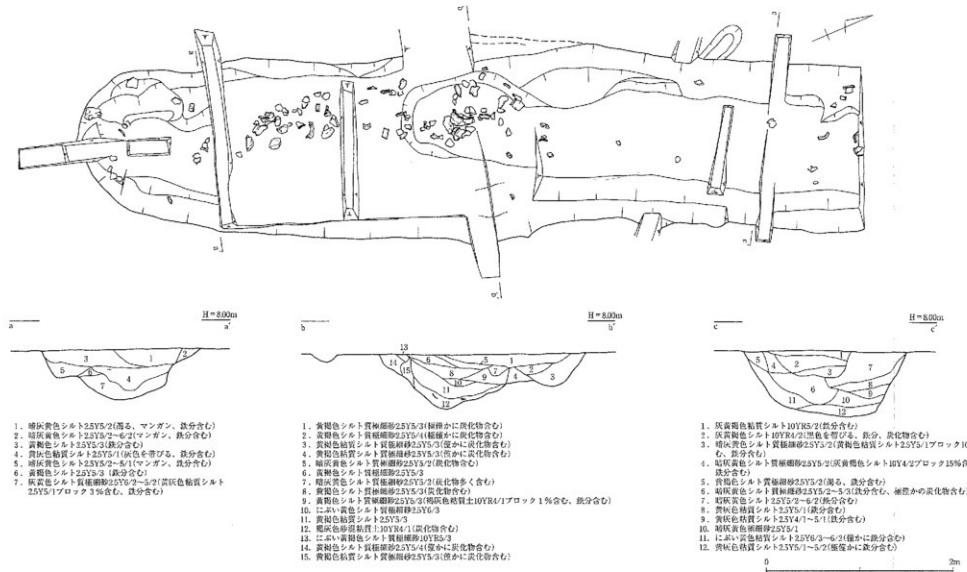
主軸をN=21°-Eにとる。南端は終息する

が北端は調査地外へと延びる。長大な土坑の可能性もある。検出長は9.14m、溝幅は169~219cmを測り、深さは検出面から55~70cm、底面の標高は7.0~7.16cmである。部分的に平坦面を有する。断面観察から大きく3回程度の埋没回数が窺える。遺物は埋土下半より平均的に出土するが南端から中央にかけて集中する傾向がある。

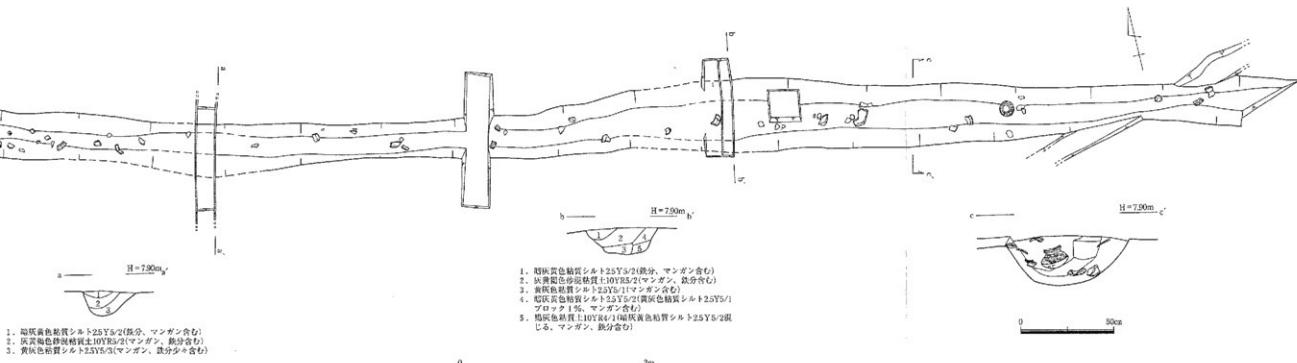
(1~5)は壺、(6~12)は壺。(1)を除き口縁部は全て「縁上げ口縁」を有し、端部には2~4条の凹線が周回する。(1)は内湾して上方へ立ち上がり、端部は肥厚して面を有する。口径は(2)が23.6cmと若干大きくなるが、他は11~16cm程度である。調整は外面にラ磨き(1・3・5・6・8~10・12)、内面にラ磨き(1・3・10・12)を有するものがある。内面は(1・2)を除き、基本的には頸部以下にラ削りを有する。(5)には竹管文を2ヶ所に有する。(13~15)は比較的扁平であり、脚台部を欠失す



第7図 SK-32出土遺物実測図



第8図 SD-34実測図



第9図 SD-35実測図



第10図 SD-32出土遺物実測図

るが台付鉢と考えられる。(13・15)は「線上げ口縁」。端部に(13)は1条、(15)は3条の凹線を有する。(14)の口縁部は内湾し、端部は外方に肥厚する。推定口径は(13)が13.4cm、(14・15)は概ね16.0cmとなる。(16~18)は脚台部、脚部は「ハ」字状に開き、端部で肥厚して端面を有する。(18)は大きく開く。(16・17)は端面に2条の凹線を有する。(19)は手捏ね土器。口径5.7~6.2cm、器高4.0cm、底径4.1cmを測る。

#### SD-35(第9・13図)

主軸をN-78°-Wにとる。概ね直線的で両端共に調査地外へ延びる。検出長は17.0m、溝幅は37~81cm測り、深さは検出面から15~29cm、底面の標高は7.42~7.59mで、東から西に向かって微妙に傾斜する。その比高差は17cmである。遺物は全体的に散在する。埋土下位からの出土が多い。

(1・2)は壺。(1)は「線上げ口縁」、端面に4条の凹線を有す。(2)の口縁部は外反して端部に面を有す。推定口径は11.6cmとなる。(3)は台付壺。複合口縁、複合台部を有し、体部は算盤玉状に中位が突き出す。口縁端面にはヘラ状工具による5条の沈線を有す。体部中位には工具による円弧状の刺突文を「ハ」字状に施し、3条、1条の沈線で区画する。また、2重圓スタンプ文を2段施す。脚端面にはヘラ状工具による5条の沈線を有す。頸部に円孔2ヶ1対を内側から穿孔、2方に施す。(4~9)は甕の口縁部。(4)は「く」の字状口縁、口縁部は短く外傾して端部は丸く納める。(5~7)は「線上げ口縁」、端面に2・3条の凹線を有す。(8・9)は複合口縁、共に端面には4条の沈線を有す。口径は概ね17cm程度であるが、(6)は12.8cmと小さく、(7)は19.8cmと大きい。(10)は平底の底部。

### 第3節 中世期の遺構・遺物

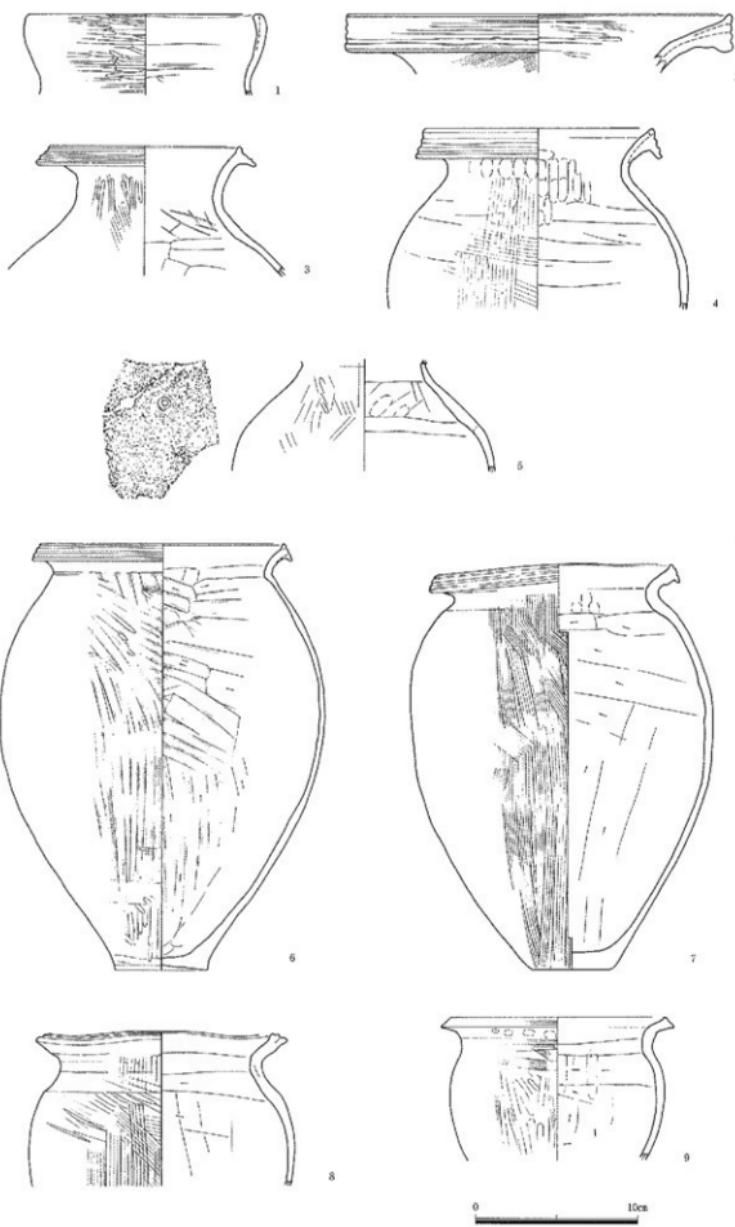
中世期の遺構は調査地のほぼ全域から検出されるが北端付近と南半西側は希薄である。当遺跡の中心的な時代が当時期に該当する為、明確に時期を特定できない遺構もこの時代に含めている。検出した遺構は掘立柱建物10棟、土坑39基、溝状遺構60条、柱穴1,269基、総数1,368を数える。時間と紙数の制約により本書においては、図や一覧表の多くを割愛せざるを得なかった。また、遺物を伴い時期を特定できるものや性格を想定できるものなどの特徴的な遺構についてのみ簡単に説明することとした。

#### 1. 掘立柱建物

##### SB-01(第14図)

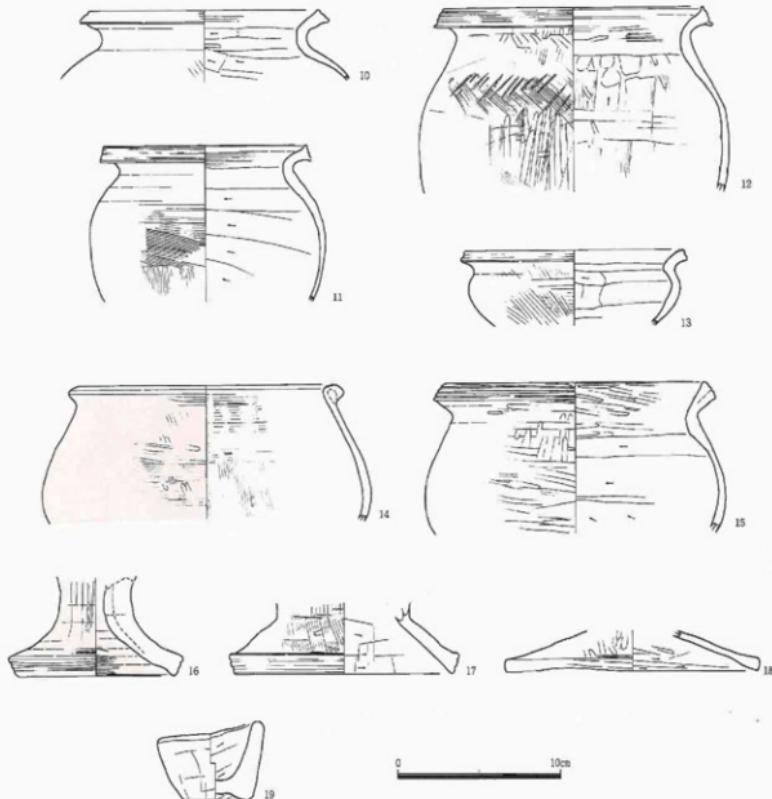
南半の中央やや北東側に位置する。桁行4間、梁行3間の建物である。主軸をN-22°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行4間が7.04m、梁行3間が7.52mを測り、面積は52.9m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は桁行が159~191cm、梁行が221~259cmを測り、平均すると、桁行174cm、梁行247cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。根石を有する柱穴P-208、P-251、P-862、P-920、柱根が遺存するP-906がある。根石は長さ20~30cmの比較的扁平な石の平滑な面を上にして、ほぼ水平に据えている。柱根は径12cmを測る。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も5基存在し、その径は12~19cm程度である。

P-906に遺存していた柱根を放射性炭素年代測定(14C)した結果AD.1039±38年という結果を得てい



第11図 SD-34出土遺物実測図（1）

0 10cm



第12図 SD-34出土遺物実測図（2）

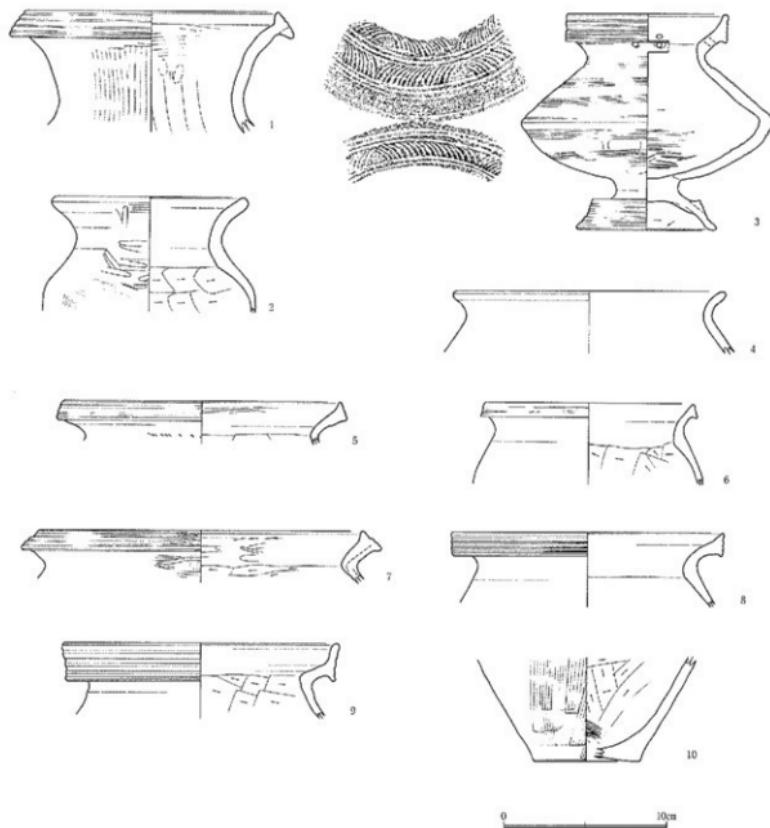
る。樹種はスギ。

#### SB-02(第15図)

南半の中央やや北東側、SB-01の北側に位置する。桁行2間、梁行2間の建物である。主軸をN-22°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行2間が4.80m、梁行2間が3.54mを測り、面積は17.0m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は桁行が207~246cm、梁行が150~188cmを測り、平均すると、桁行236cm、梁行175cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。根石を有する柱穴にP-247、P-285がある。根石の大きさは長さ23~25cm程度である。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も4基存在し、その径は11~18cm程度である。

#### SB-03(第16図)

南半の北東端、SB-02の東側に位置する。現状で桁行2間、梁行1間の建物である。桁行の東端は調査地外に延びる可能性もある。主軸をN-19°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行2間が3.61m、梁行1間が2.11mを測り、面積は7.2m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は桁行が176~185cm、梁行が211cmを測



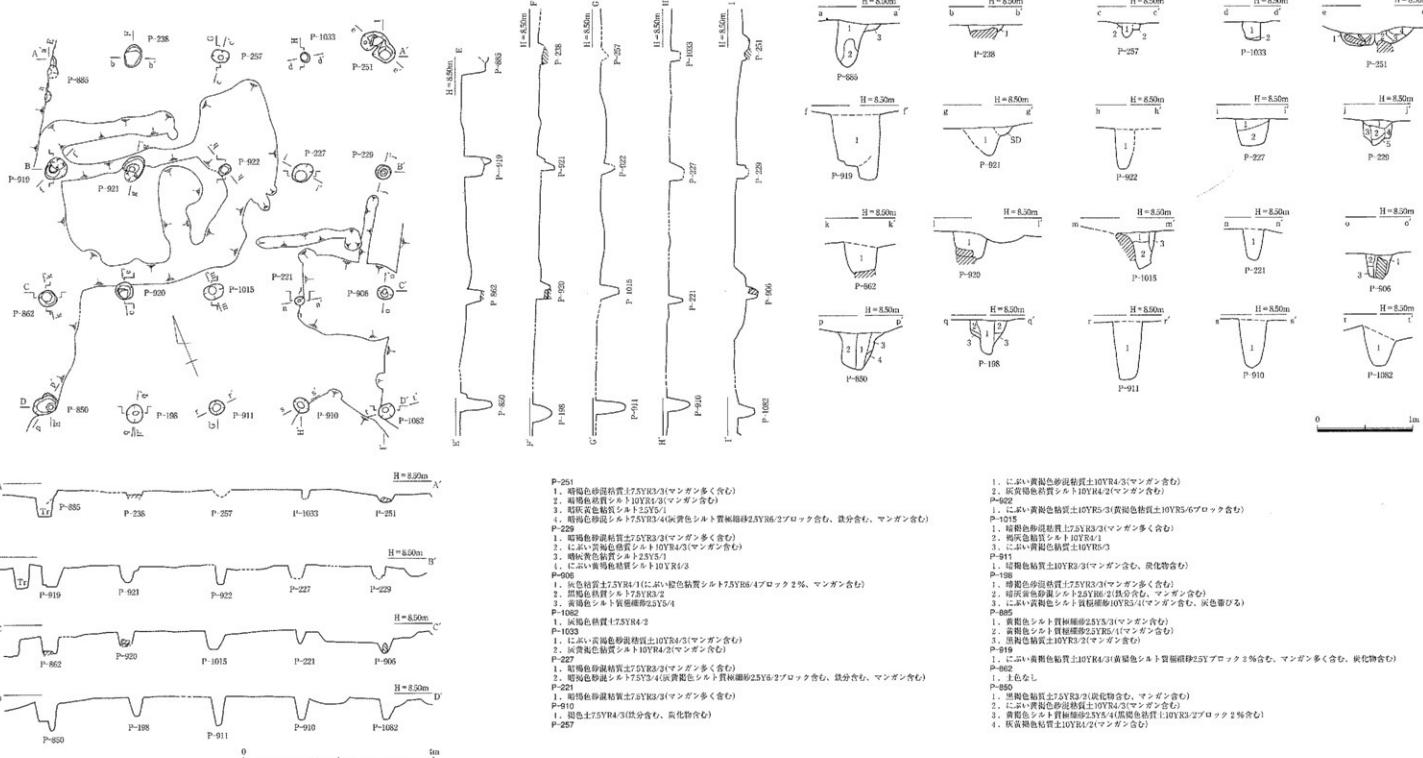
第13図 SD-35出土遺物実測図

る。桁行の平均は181cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。4基の柱穴に根石を有する。根石の大きさは長さ19~29cm程度である。柱痕跡を確認できるものはなかった。

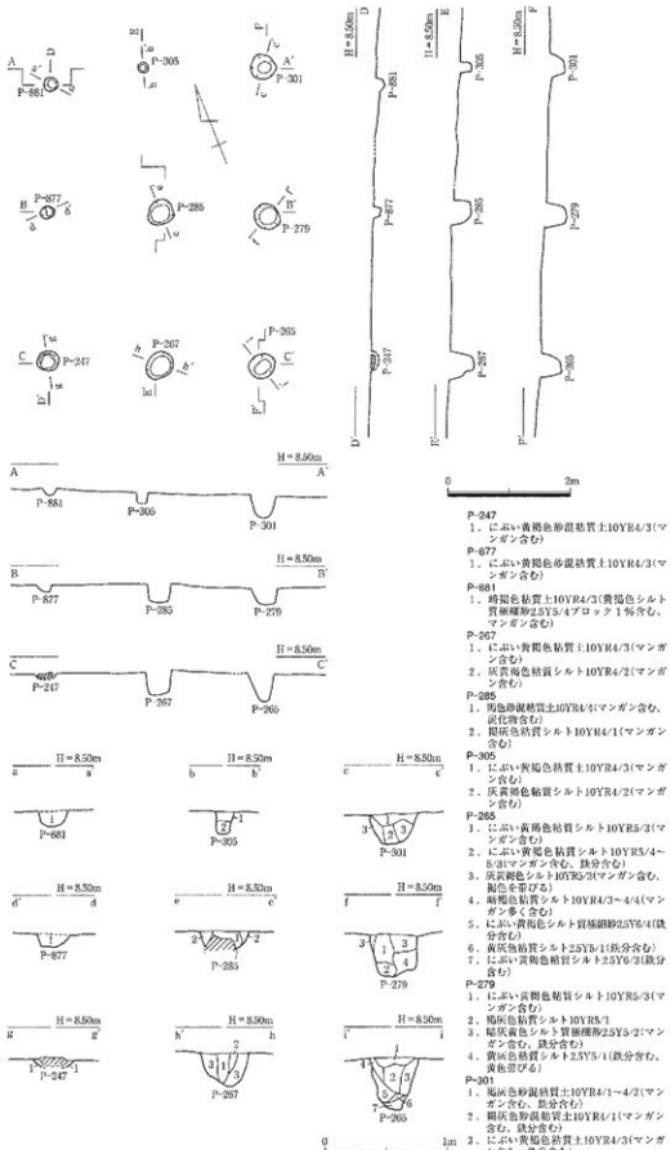
#### SB-04(第17・18図)

南半の中央やや西側、SB-01の西側に位置する。現状で桁行3間、梁行4間の建物である。主軸をN-11°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が10.37m、梁行4間が9.65mを測り、面積は100.1m<sup>2</sup>となる。SK-10、SD-06・07・08と重複する為、検出できなかった柱穴も多く、柱列(C)と柱列(D)の間は、P-477、P-528を除き検出できなかった。P-477・P-528は柱列(H)上に存在するが柱間寸法が短く当建物に伴わない可能性もある。検出した柱穴の柱間寸法は桁行が252~273cm、梁行が220~250cmを測り、平均すると桁行259cm、梁行233cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も4基存在し、その径は19~24cm程度である。

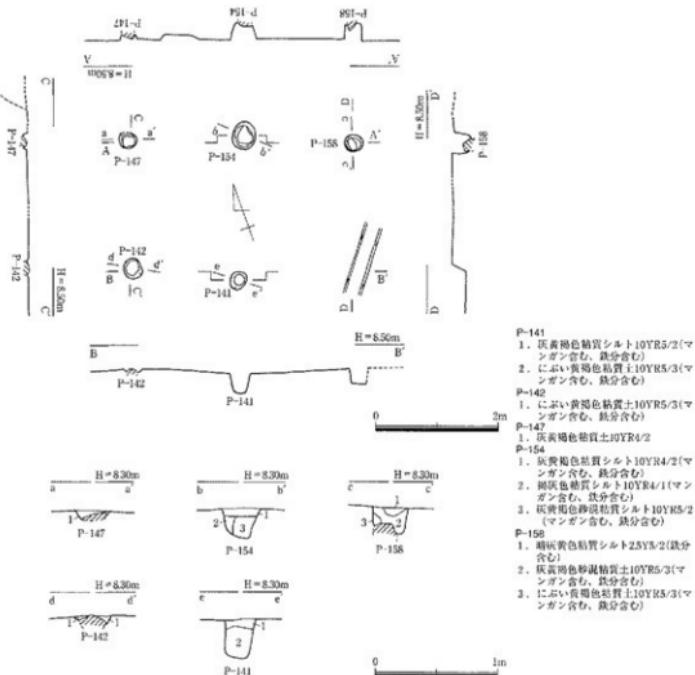
柱列(D)を構列等で除外すると、桁行4間、梁行2間の建物が想定できる。この場合の面積は51.1m<sup>2</sup>



第14図 SB-01実測図



第15図 SB-02実測図



第16図 SB-03実測図

となり、柱間寸法の平均は桁行237cm、梁行261cmとなる。柱列(I)も横列等で除外すると、桁行3間、梁行2間の建物が想定でき、面積は38.2m<sup>2</sup>となり、柱間寸法の平均は桁行240cm、梁行259cmとなる。

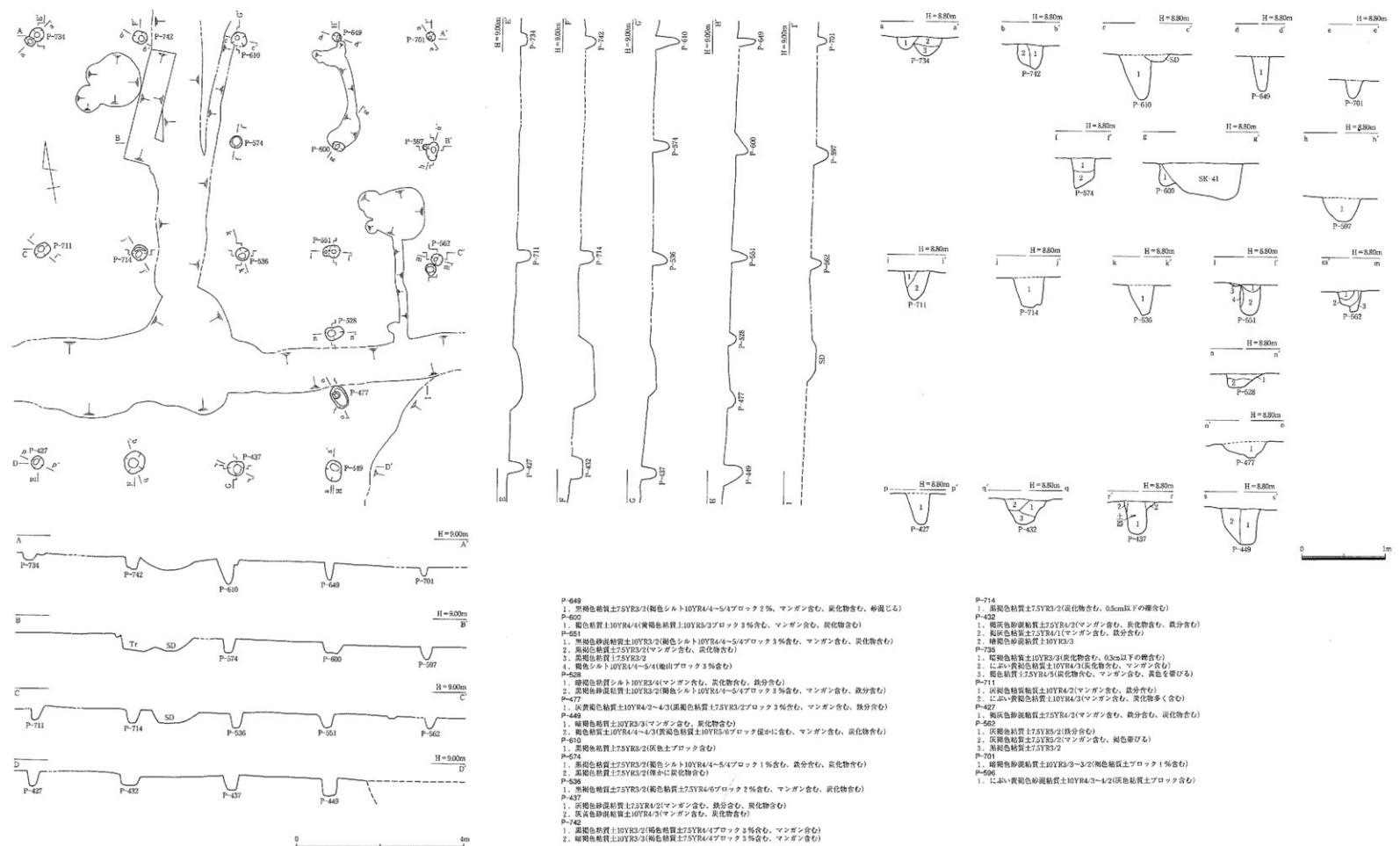
遺物はP-437より土師質土器の杯(1)、須恵器の蓋(2)が出土している。

#### SB-05(第19図)

南半の中央やや西側、SB-01の西側に位置し、SB-04と重複する。現状で桁行2間、梁行2間の建物である。主軸をN-11°-Eにとる。北側は後世の削平を受けていると考えられ、柱穴の検出が困難であった為、桁行の北端は更に延びる可能性がある。建物の平面形は長方形を呈する。建替え、若しくは南側に拡張が行われていると考えられ、建替えを想定すると、桁行2間は4.93m、4.56m、梁行4.70mを測り、面積は23.2m<sup>2</sup>、21.4m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は、桁行が236~272cm、200~256cm、梁行234cmを測り、平均は桁行253cm、224cm、梁行は234cmとなる。拡張を想定すると、柱列(E)と柱列(C)は廂と考えら



第17図 SB-04出土遺物実測図



第18図 SB-04測定図

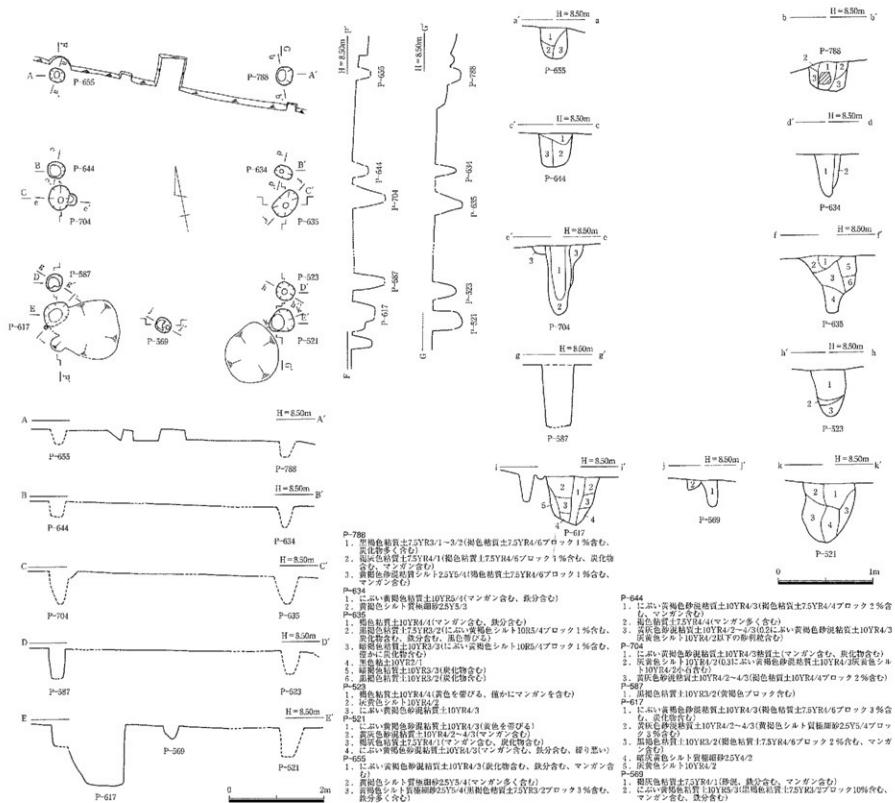
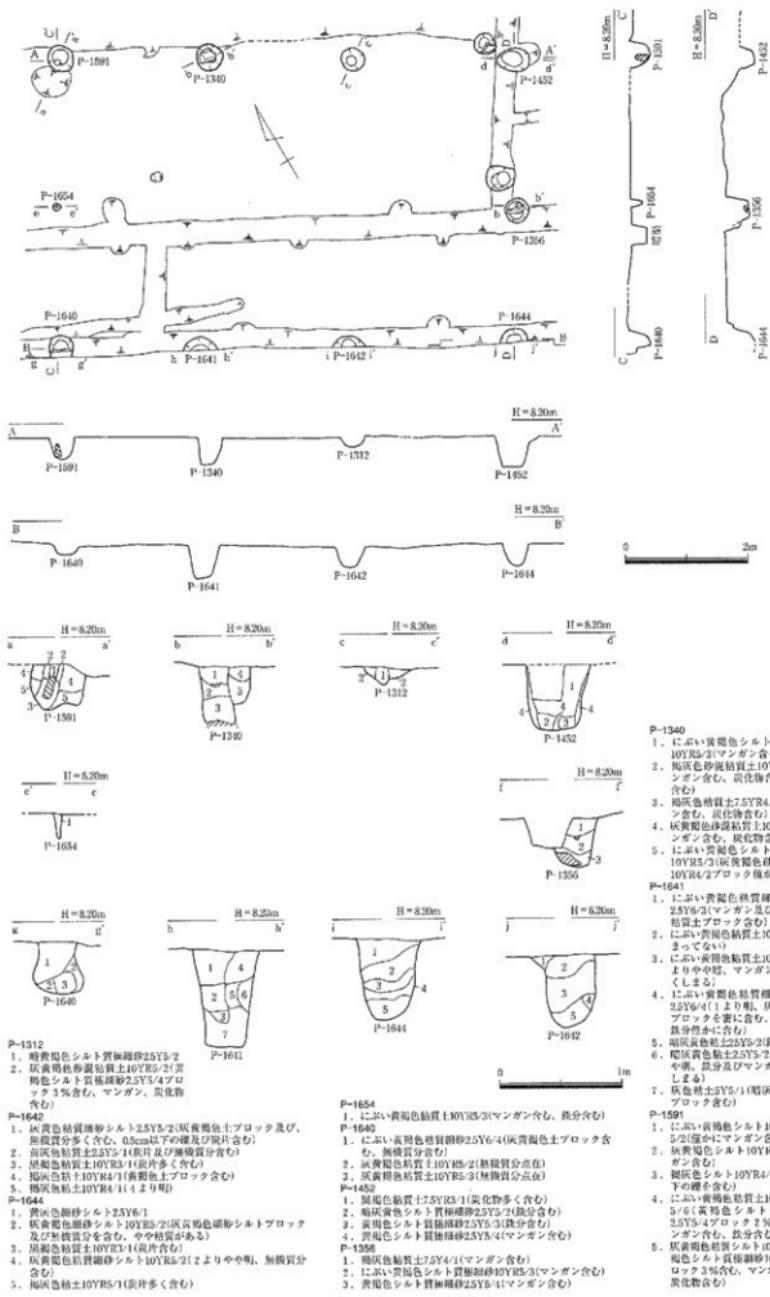
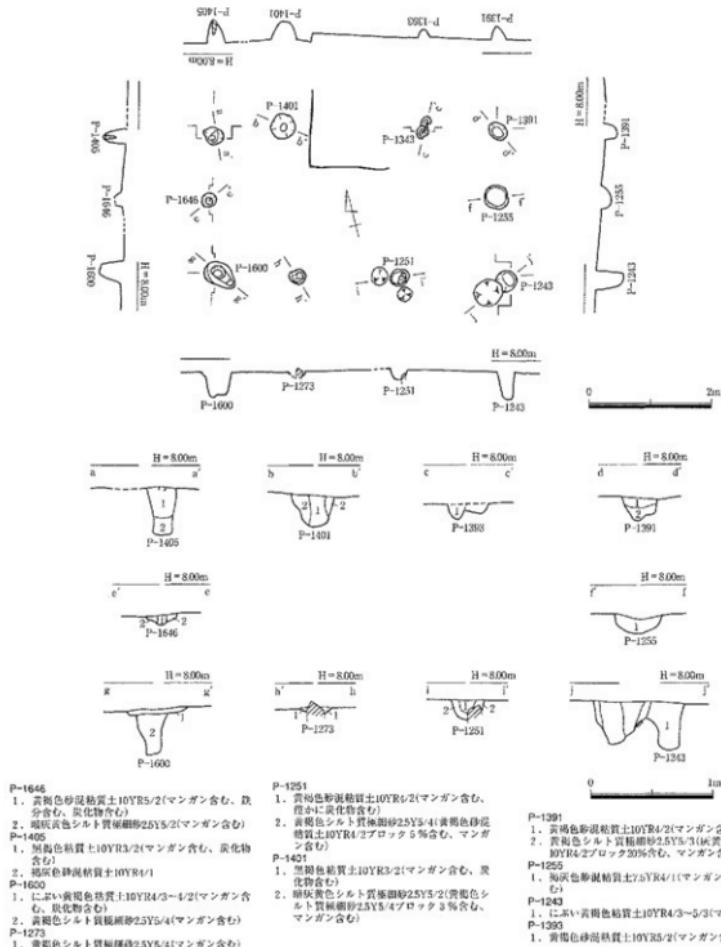


図19 SB-05実測



第20回 SB-06実測図



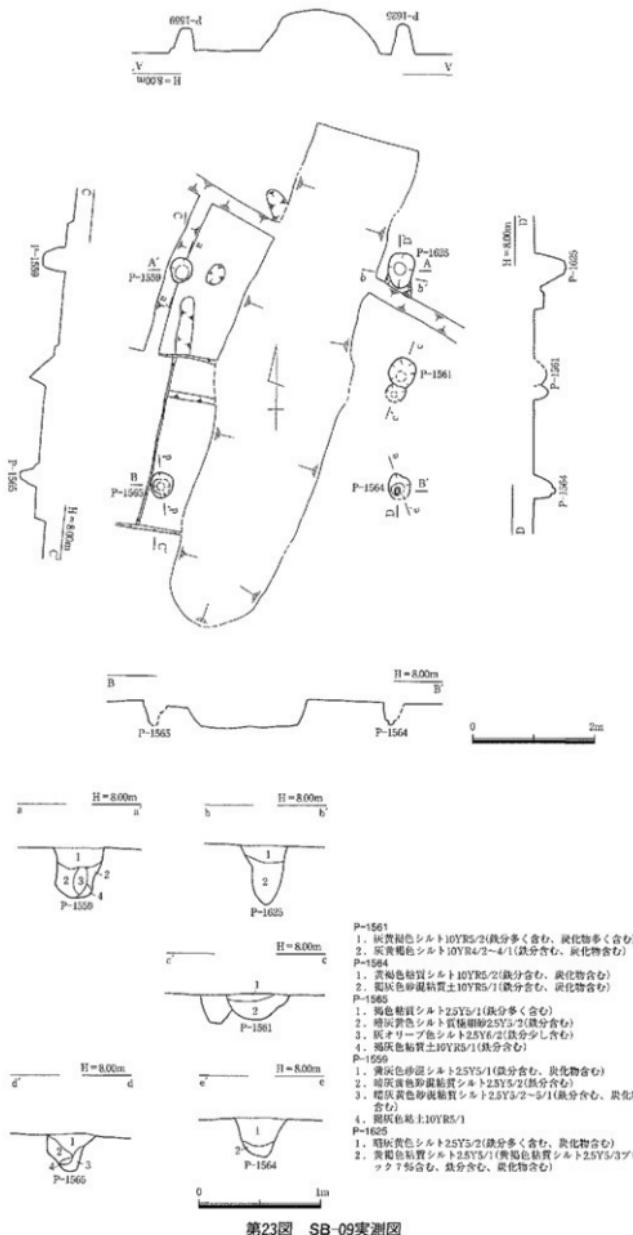
第21図 SB-08実測図

れ、拡張前の規模は梁行1間が2.01mとなり、面積は9.4m<sup>2</sup>となる。柱穴間寸法は55~72cmを測り、平均は62cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も6基存在し、その径は13~21cm程度である。

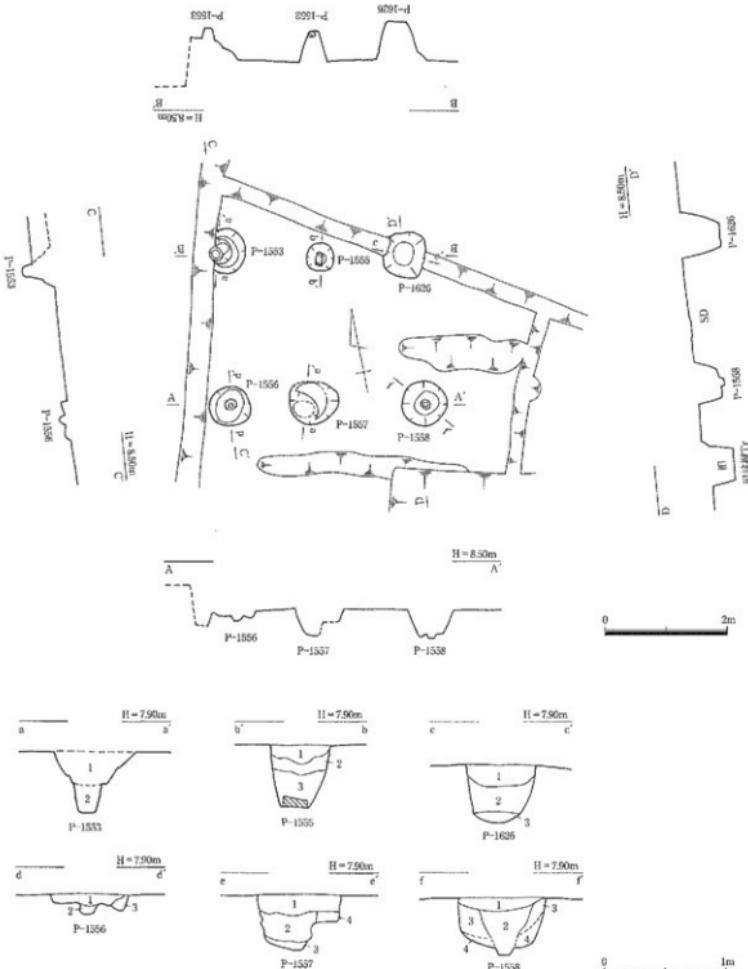
#### SB-06(第20図)

北半の東側、SB-05の北側に位置する。SB-07と重複する。現状で桁行3間、梁行2間の建物である。主軸をN-30°-Eにとる。北西側は用水路を保護する為、北半との間3mが未調査である。このため梁行の北西端は更に延びる可能性がある。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が7.40m、梁行2間が4.70mを測り、面積は34.8m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は桁行が230~265cm、梁行が211~247cmを測り、平均すると、桁行247cm、梁行232cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。P-1591には径11cmの柱根が遺存していた。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も4基存在し、その径は11~34cm程度である。





第23図 SB-09-01実測図



P-1558  
 1. 黄褐色粘質シルト質板岩細砂2.5Y5/3(明灰黄色シルト質板岩細砂2.5Y5/2  
 ブロック3%含む、マンガン含む)  
 2. 黑灰色粘質シルト2.5Y4/1(鉄分含む)  
 3. 黑灰色粘土2.5Y4/1(锰に鉄分含む)

P-1559

1. 黄褐色シルト質板岩細砂2.5Y5/3(明灰黄色シルト質板岩細砂2.5Y5/2  
 ブロック3%含む、炭化物含む)
2. 黄灰色シルト質板岩細砂2.5Y4/2(マンガン含む、鉄分含む、炭化  
 物含む)
3. 黑灰色シルト質板岩細砂2.5Y5/2(マンガン含む、鉄分含む、炭  
 化物含む)

P-1556

1. 黄褐色シルト質板岩細砂2.5Y5/3(黄褐色シルト質板岩細砂2.5Y5/2  
 ブロック3%含む、炭化物含む、鉄分含む)
2. 黑灰色粘質シルト2.5Y4/2

P-1558  
 1. 黄褐色シルト2.5Y5/1(鉄分含む、マンガン含む)  
 2. 明灰黄色粘質シルト2.5Y4/2~4/1(鉄分含む、炭化物含む)  
 3. 明灰黄色粘質シルト2.5Y5/2(マンガン含む、鉄分含む、炭化  
 物含む)

P-1557

1. 黑褐色粘質シルト2.5Y2/3(鉄分含む、炭化物含む)
2. 黄褐色粘質シルト2.5Y4/1(鉄分含む)
3. 黄褐色シルト2.5Y5/4(锰に鉄分含む)
4. 黑灰色粘質シルト2.5Y5/1~5/2(鉄分含む)

P-1556

1. 黄褐色シルト2.5Y5/2(鉄分含む、マンガン含む)
2. 黑灰色粘質シルト2.5Y5/2(鉄分含む)
3. 明灰黄色粘質シルト2.5Y5/2(鉄分含む)

第24図 SB-10実測図

### SB-07(第22図)

北半の東側、SB-05の北側に位置する。SB-06と重複する。現状で桁行3間、梁行2間の建物である。主軸をN-15°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が5.03m、梁行2間が4.72mを測り、面積は23.7m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は桁行が144~184cm、梁行が149~175cm、275~298cmを測り、平均すると、桁行165cm、梁行167cm、285cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。根石を有する柱穴にP-1301、P-1308、P-1320、P-1326、P-1343、P-1589がある。根石の大きさは長さ15~26cm程度である。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も5基存在し、その径は11~27cm程度である。

### SB-08(第21図)

北半の東側、SB-07の北東に位置する。桁行3間、梁行2間の建物である。主軸をN-14°-Eにとる。建物の平面形は長方形を呈し、桁行3間が4.78m、梁行2間が2.54mを測り、面積は12.1m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は桁行が113~223cm、梁行が100~138cmを測り、平均すると、桁行156cm、梁行119cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。柱根が遺存するP-1405がある。柱根は径8cmを測る。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も3基存在し、その径は8~15cm程度である。

P-1405に遺存していた柱根を放射性炭素年代測定(14C)した結果AD. 1332±36年という結果を得ている。樹種はマツ属。

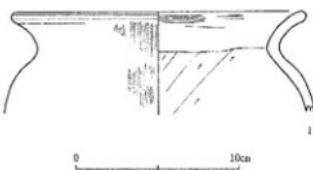
### SB-09(第23図)

北半の西端に位置する。桁行2間、梁行2間と考えられる建物である。SD-34と重複する為、検出できなかった柱穴も多い。主軸をN-5°-Eにとる。建物の平面形はほぼ正方形を呈し、桁行2間が3.89m、梁行2間が3.57mを測り、面積は7.8m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は桁行が171cm、186cmを測り、平均すると179cmとなる。柱穴の平面形は全て円形。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴はなかった。

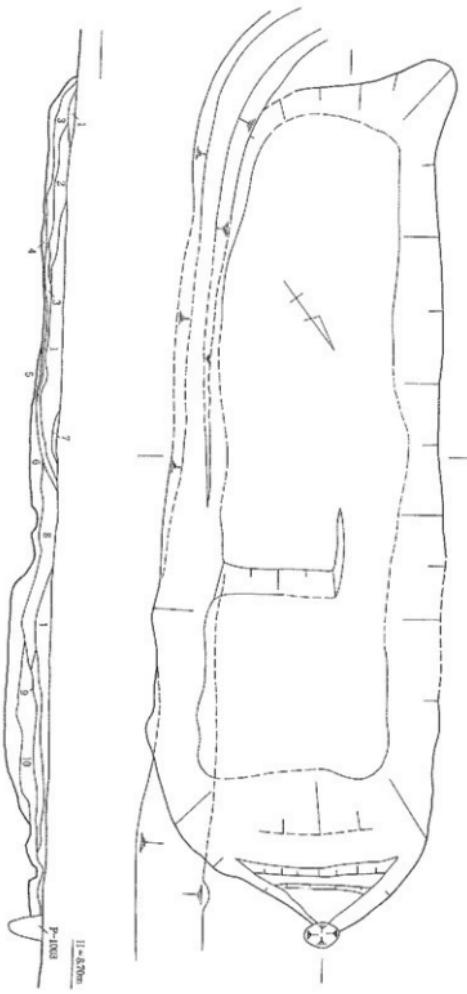
### SB-10(第24・25図)

北半の西端に位置する。桁行2間、梁行1間の建物である。主軸をN-6°-Eにとる。建物の平面形はほぼ正方形を呈し、桁行2間が3.20m、梁行1間が2.44mを測り、面積は13.9m<sup>2</sup>となる。柱間寸法は桁行が115~205cm、平均すると156cmとなる。梁行は244cmを測る。柱穴の平面形は全て円形であるが、径が50~70cmと比較的大きい。断面観察により柱痕跡を確認できる柱穴も3基存在し、その径は15~22cm程度である。P-1555の底面には、長さ22cm、幅11cm、厚さ7cmの板材が据えられていた。

遺物はP-1557より土師器の甕(1)が出土している。

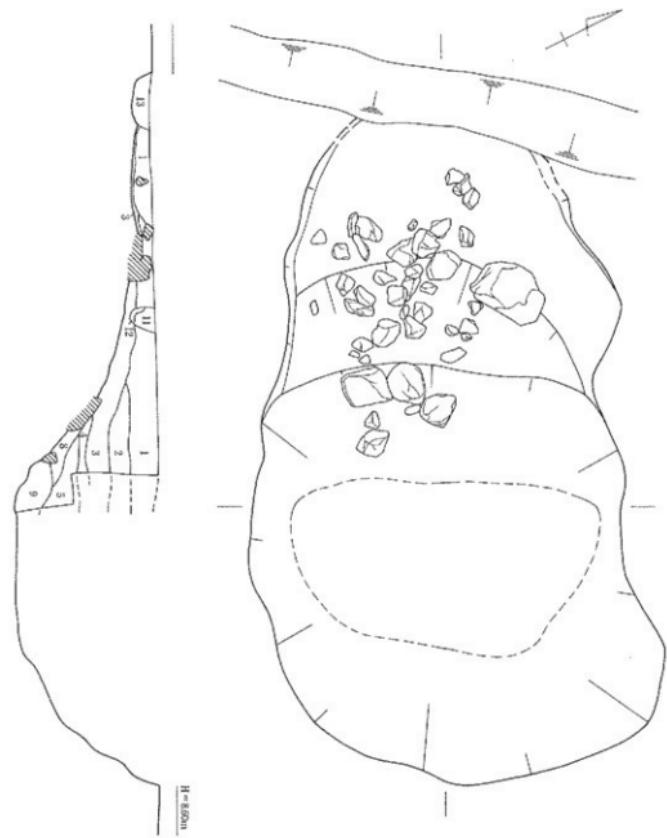


第25図 SB-10出土遺物実測図

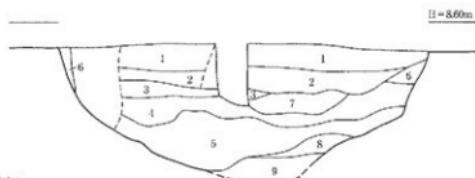


1. 黄褐色粘質土7.5YR4/4(マンガン含む)
  2. 噴霧褐色砂7.5YR3/3(黑色或褐色粘質土  
10YR5/2ブロック2%含む、マンガン、  
錆分含む)
  3. 黄褐色シルト質粘膠砂10YR5/2
  4. 黄褐色砂7.5YR4/4(黑色或褐色粘質土  
10YR5/2ブロック2%含む)
  5. ぶい黄色粘質土シルト10YR5/4(に  
ぶい黄色粘質土2.5YR6/3ブロッ  
ク10%、マンガン含む)
  6. ぶい・黄褐色砂粘質土10YR4/3(灰色含む、マンガン含む)
  7. 黄褐色粘質土7.5YR4/4(黑色或褐色シルト質粘膠砂10YR5/2ブロック2%含  
む、マンガン含む)
  8. 黄褐色砂粘質土7.5YR4/4(黑色或褐色シルト質粘膠砂10YR5/2ブロック2%  
含む、マンガン含む)
  9. ぶい・黄褐色粘質土10YR4/3(灰色含む、マンガン含む)
  10. ぶい・黄褐色粘質土10YR4/3(灰色含む、黄色含む)
- P=1000  
灰褐色粘質土7.5YR4/2(マンガン含む)  
SD-02  
にぶい・黄褐色粘質土7.5YR4/6(にぶい・黄褐色粘質シルト10YR5/3ブロック  
2%含む、マンガン含む)
- H = 8.70m
- SD-02 1 7 6
- 0 2m

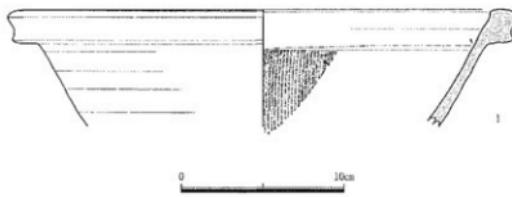
第26図 SK-01実測図



1. 黄褐色粘質土10YR3/3(マンガン、炭化物含む)
2. 黄褐色粘質土10YR4/2(マンガン、鉄分含む)
3. 黄褐色粘質土10YR4/2(褐色火成岩10YR4/1ブロック7~10%含む、マンガン、鉄分含む)
4. 褐灰色粘土10YR4/1(マンガン多く含む)
5. 黑褐色粘土10YR2/1(黒褐色に腐植物含む)
6. にじみ褐色粘質土10YR3/3(マンガニン含む)
7. 黄褐色粘質土10YR3/3(マンガニン含む)
8. 黄褐色粘質土10YR3/3(マンガニン含む)
9. 黄色シルト質粘膠砂10Y4/1(黒褐色に腐植物含む)
10. 暗灰色シルト質粘膠砂10YR4/1(鉄分含む)
11. 暗褐色粘質土10YR3/4(マンガニン、鉄分含む)
12. 暗褐色粘質土10YR3/4(黒褐色粘質土2/3ブロック5%含む、マンガニン、炭化物含む)
13. 褐色粘質土10YR4/4-----SD・04



第27図 SK-02実測図



第28図 SK-01出土遺物実測図

## 2. 土坑

### SK-01(第26・28図)

南半の東側に位置する。SK-02を切り、SD-02(04)に切られる。SD-03との新旧関係は不明である。平面形は不整長楕円形を呈する。長さは7.17m、幅2.42mを測り、主軸をN-29°-Eにとる。深さは均一ではなく、南西側2/3が26cm、北東側1/3は38cmを測り、北東側が10cm余り深い。遺物は埋土中から陶器の擂鉢(1)が出土している。近世以降の牛ノ戸焼。SD-03を伴う水利施設かとも考えられるが詳細は不明である。

### SK-02(第27・30図)

南半の東側、SK-01の東側に位置する。SK-01、SD-02(04)に切られる。平面形は不整楕円形を呈する。検出長は5.47m、幅3.42mを測り、主軸をN-71°-Wにとる。深さは均一ではなく、西側約半分が11~39cm、東側は114cmを測る。西側には10~60cmの石が最深部に向かって散乱している。遺物は埋土中から瓦質土鍋(1)、陶器(2・3)、青磁碗(4)、土鍤(5)、漆器碗(6)などが出土している。(3)は備前系。(4)は崩れた雷文を有する。溜井戸などの水利施設か。15世紀頃。

### SK-03(第29図)

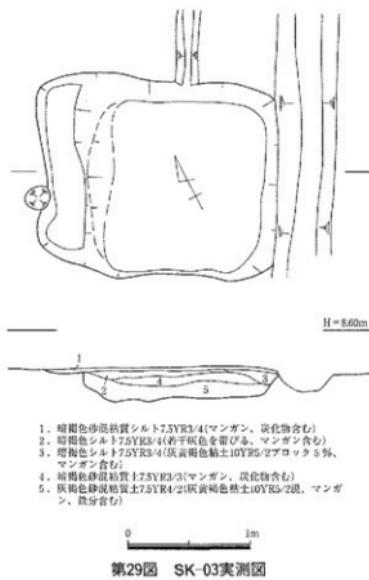
南半の東側、SK-01の北側に位置する。SD-04(02)に切られる。SD-46との新旧関係は不明である。平面形は長方形を呈す。検出長は1.98m、幅1.72m、深さは28cmを測る。主軸はN-62°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

### SK-04(第31図)

南半の東側、SK-03の北東に位置する。SD-54に切られる。平面形は不整楕円形を呈する。長さ2.84m、幅1.88mを深さは38cmを測る。主軸はN-16°-Wにとる。埋土上位中央には5~20cm大の角礫が密に含まれていた。時期、性格等は不明である。

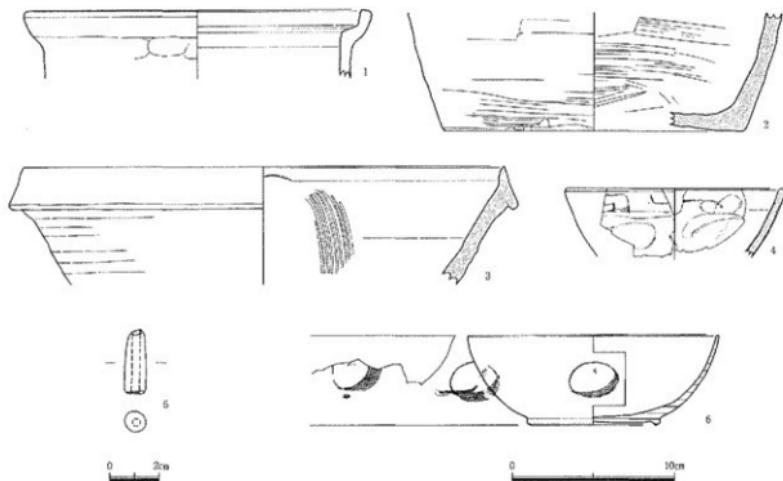
### SK-05(第32・33図)

南半の東側、SK-04の北に位置する。SK-06と重複するが新旧関係は不明である。また北端は現代の用水路に切られる。平面形は不整楕円形を呈す。検出長は2.64m、幅1.75mを深さは79cmを測る。主軸



第29図 SK-03実測図

1. 緑褐色砂混熱質シルト7.5YR3/4(マンガン、炭化物含む)
2. 緑褐色シルト7.5YR3/4(若干灰褐色を帯びる、マンガン含む)
3. 緑褐色シルト7.5YR3/4(灰青褐色粘土10YR5/2ブロック 5%、マンガン含む)
4. 緑褐色砂混熱質土7.5YR3/3(マンガン、炭化物含む)
5. 灰褐色砂混熱質土7.5YR4/2(灰青褐色粘土10YR5/2混、マンガ  
ン、灰分含む)



第30図 SK-02出土遺物実測図

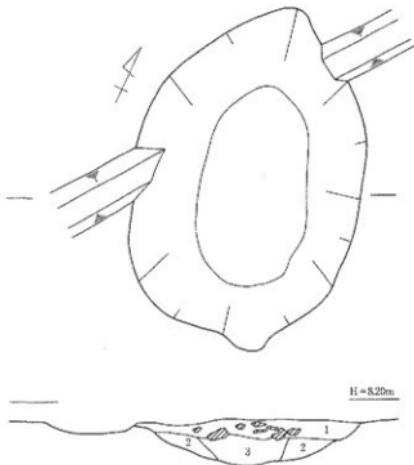
はN-9°-Eにとる。遺物は埋土中から須恵器の鉢(1)が出土している。性格等は不明である。

#### SK-06(第34・35図)

南半の東側、SK-04の北に位置する。SK-05と重複するが新旧関係は不明である。北西端は現代の用水路に切られる。平面形は不整長楕円形を呈す。検出長は4.44m、幅2.88mを深さは102cmを測る。主軸はN-81°-Wにとり、SK-05とはほぼ直交する。出土遺物は埋土中から天目茶碗(1)、陶器瓶鉢(3)、白磁碗(鉢)(4)、青磁(5)、土鍾(7)などが出土している。(1)は瀬戸産、(4・5)は輸入陶磁器。14世紀後半。性格等は不明である。

#### SK-07(第36図)

南半の西側、南端付近に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ1.52m、幅1.27m、深さ152cmを測る。主軸はN-10°-Wにとる。底面から長さ47cm、幅30cm、厚さ16cmの比較的扁平な石が出土した。時期、性格等は不明である。



第31図 SK-04実測図

### SK-08(第37・38図)

南半の西側、中央やや西側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ2.53m、幅2.39m、主軸をN-85°-Eにとる。底面は深さ114~132cmから更に径63~76cmの不整円形に掘り込まれる。最深部の深さは169cmを測る。遺物は土師器皿(1)、白磁(2・3)、刀子(4)などが出土している。中央部分に井筒が据えられていたと仮定すれば、井戸の可能性もある。

### SK-09(第39・40図)

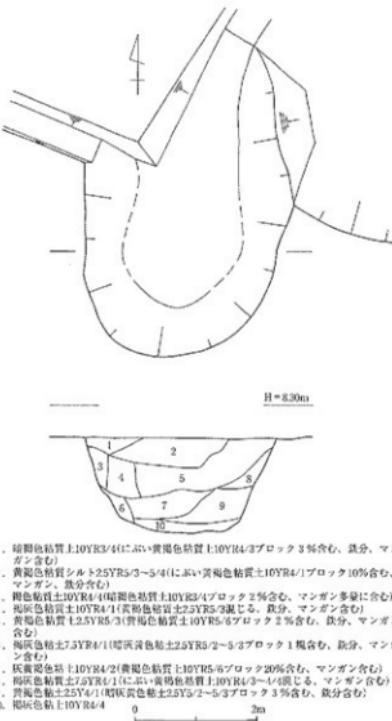
南半の西側中央、SK-08の北東に位置する。北端をSD-08に切られる。平面形は不整円形を呈す。長さ5.21m、幅5.19m、主軸をN-3°-Eにとる。底面は深さ109~117cmから更に径95~122cmの不整梢円形に掘り込まれる。最深部の深さは153cmを測る。遺物は瓦質の土鍋(1)、漆器碗(4・5)、下駄(6・7)などが出土している。SK-08同様、中央部分に井筒が据えられていたと仮定すれば、井戸の可能性もある。

### SK-10(第41・43・45図)

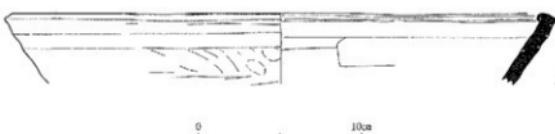
南半の中央やや西側、SK-10の北西に位置する。北半分をSD-07に切られる。SD-06・08との新旧関係は不明である。平面形は不整長梢円形を呈す。長さ3.06m、幅1.93m、深さ106cmを測る。主軸をN-5°-Eにとる。遺物は土師器杯(1・2)、瓦質羽釜(3)、瓦質壺(4)、埋土下位からは下駄(5)、板状木製品(6)が出土している。(4)は勝間田系か。溜井戸などの水利施設かと考えられる。

### SK-11(第42・46図)

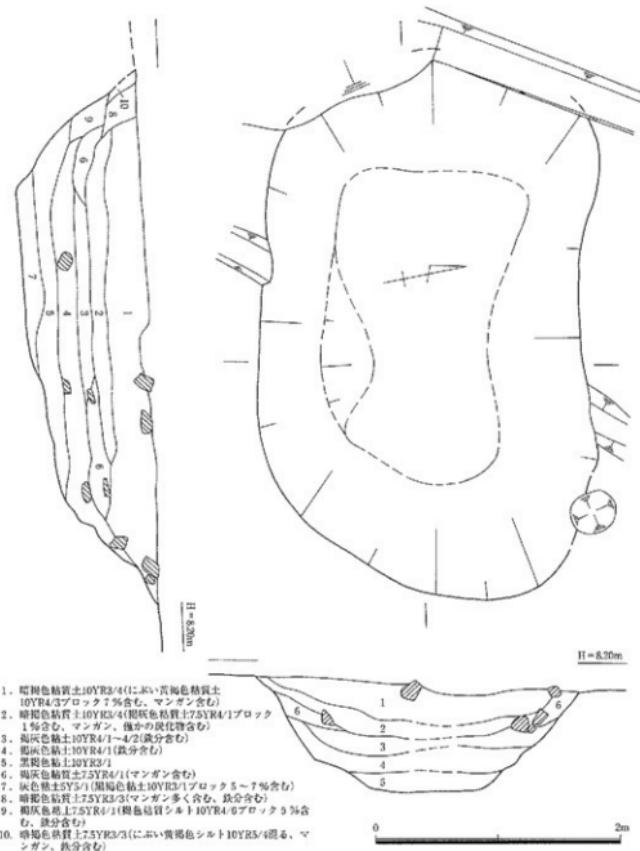
南半の中央やや西側、SK-09の北側に位置する。西端をP-557、P-617に切られる。SD-09との新旧関係は不明である。平面形は不整円形を呈す。長さ1.29m、幅1.23m、深さ127cmを測る。主軸をN-85°-Wにとる。遺物は土師器甕(1)、天目碗(3)などが出土している。性格等は不明である。



第32図 SK-05実測図



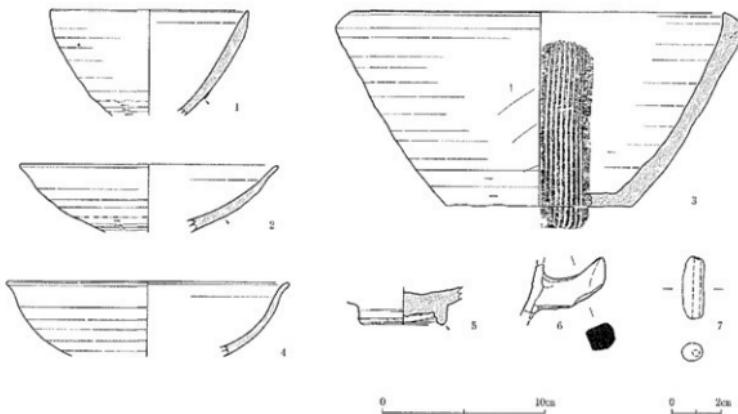
第33図 SK-05出土遺物実測図



第34図 SK-06実測図

#### SK-12(第44・49図)

南半の中央、SK-11の東側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ1.22m、幅1.17m、深さ116cmを測る。主軸をN-20°-Eにとる。遺物は埋土中より取瓶もしくは壇場と考えられる小皿(1)、中央の埋土下位より20cm大の石、底面から20cm浮いた位置に網籠に入った状態の鉄釘塊、底面から華瓶(5)、五鉢鉢(6)などが出土している。(1)は口径7.7cmを測り、内面には溶融物が付着する。鉄釘塊は角釘を主とするが錐や工具状のものも混ざる。銹化または熔着して塊化しており重さは約2kg。個々に分離することは不可能である。一部外れた鉄製品(2・3・4)がある。網籠は底板(7)の大きさが長さ21.1cm、幅15cmを測り、孔から縦上げたと考えられる。籠部は鉄釘塊に付着して分離は不可能。華瓶(5)、五鉢鉢(6)はいずれも銅製と思われる。いずれも完存。これらの出土遺物から宗教的な埋納遺構や特別な廃棄土坑などと考えられるが詳細は不明である。時期は室町期頃か。



第35図 SK-06出土遺物実測図

#### SK-13(第47・50図)

南半の西側、SK-10の北側に位置する。平面形は不整橢円形を呈す。長さ1.35m、幅1.17m、深さ109cmを測る。主軸はN-51°-Wにとる。遺物は埋土中より瓦質の土鍋(1)、白磁の底部(3)などが出土している。性格等は不明である。

#### SK-14(第48・51図)

南半の西側、SK-13の北東側に位置する。平成12年度に実施した試掘調査のトレンチに切られる。SD-07・15・16と重複するが新旧関係は不明である。平面形は不整円形を呈す。長さ2.20m、幅1.99m、深さ143cmを測る。主軸はN-8°-Eにとる。遺物は埋土中より瓦質土鍋(1・2)、青磁(3)、曲物底板(4)などが出土している。性格等は不明である。

#### SK-15(第52図)

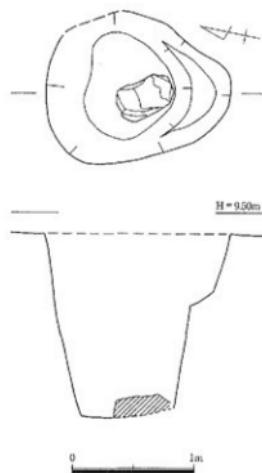
南半の西端付近に位置する。平面形は隅丸方形を呈す。長さは1.53m、幅1.47m、深さ54cmを測る。主軸はN-69°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

#### SK-16(第53図)

南半の西端付近、SK-15の西側に位置する。平面形は不整長円形を呈す。長さ1.50m、幅1.13m、深さ42cmを測る。主軸はN-60°-Wにとる。SK-15と同様の時期、性格と考えられるが詳細は不明である。

#### SK-17(第54・60図)

南半の西端付近、SK-16の南西側に位置する。平面形は不整橢円形を呈す。中央部分がピット状に若干凹む。長さ1.31m、幅1.07m、深さ58cmを測る。主軸はN-83°-Wにとる。遺物は陶器の鉢(1)などが出土している。SK-15・16と同様の時期、性格と考えられるが詳細は不明である。



第36図 SK-07実測図

### SK-18(第55・63図)

南半の西端付近、SK-17の北西に位置する。南西側は調査地外となる。平面形は隅丸(長)方形を呈すると考えられる。検出長1.31m、幅1.29m、深さ105cmを測る。現状での主軸はN-39°-Eにとる。遺物は五輪塔の空風輪(1)、陶器製の軒平瓦(2)などが出土している。(2)は近世以降のもの。性格等は不明である。

### SK-19(第56・66図)

北半の東端に位置する。南西側約1/3を暗渠に切られる。北端をSK-24に切られる。平面形は不整円形を呈す。長さ1.32m、検出幅1.06m、深さ56cmを測る。主軸はN-29°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

### SK-20(第64図)

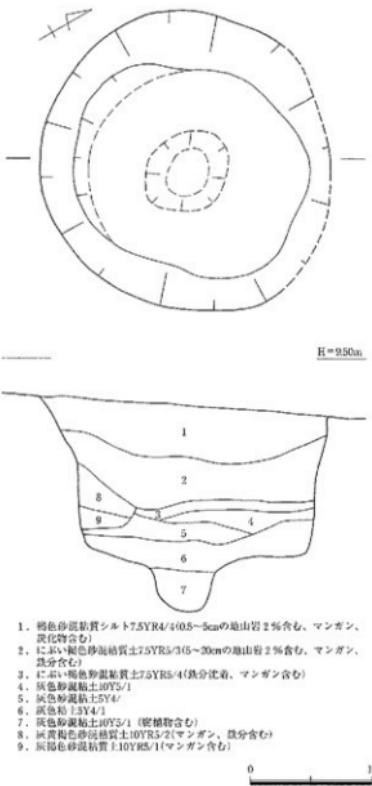
北半の東端、SK-19の南西側に位置する。南半は現代の用水路とそれを保護するために設けた控えにより未調査である。検出長は1.44mを測るが、全体の規模などは不明である。調査中、崩落が著しく用水路の保護の為、調査続行を断念せざるを得なかつた。遺物は木製容器の蓋(1)が出土している。時期、性格等は不明である。

### SK-21(第57図)

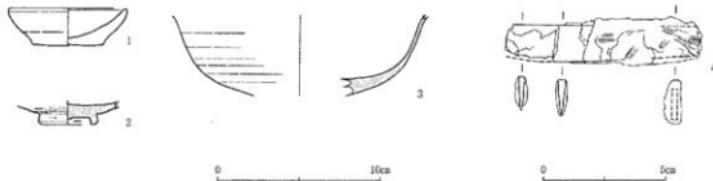
北半の東側、SK-20の北側に位置する。上位を暗渠に切られる。平面形は不整円形を呈す。径は1.02~1.06m、深さ95cmを測る。時期、性格等は不明である。

### SK-22(第58図)

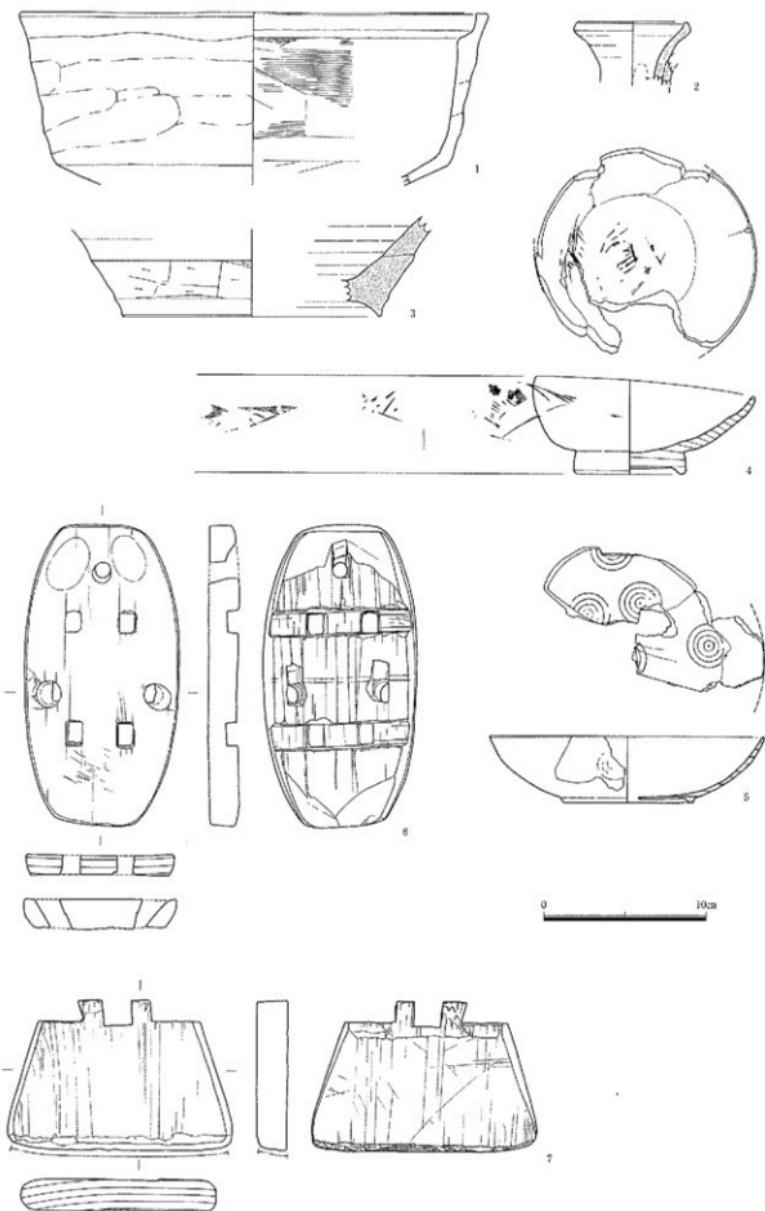
北半の東端、SK-19の東側に位置する。北側の一部を暗渠に切られる。平面形は不整円形を呈す。長さ1.58m、幅1.35m、深さ64cmを測る。主軸はN-66°-Wにとる。時期、性格等は不明である。



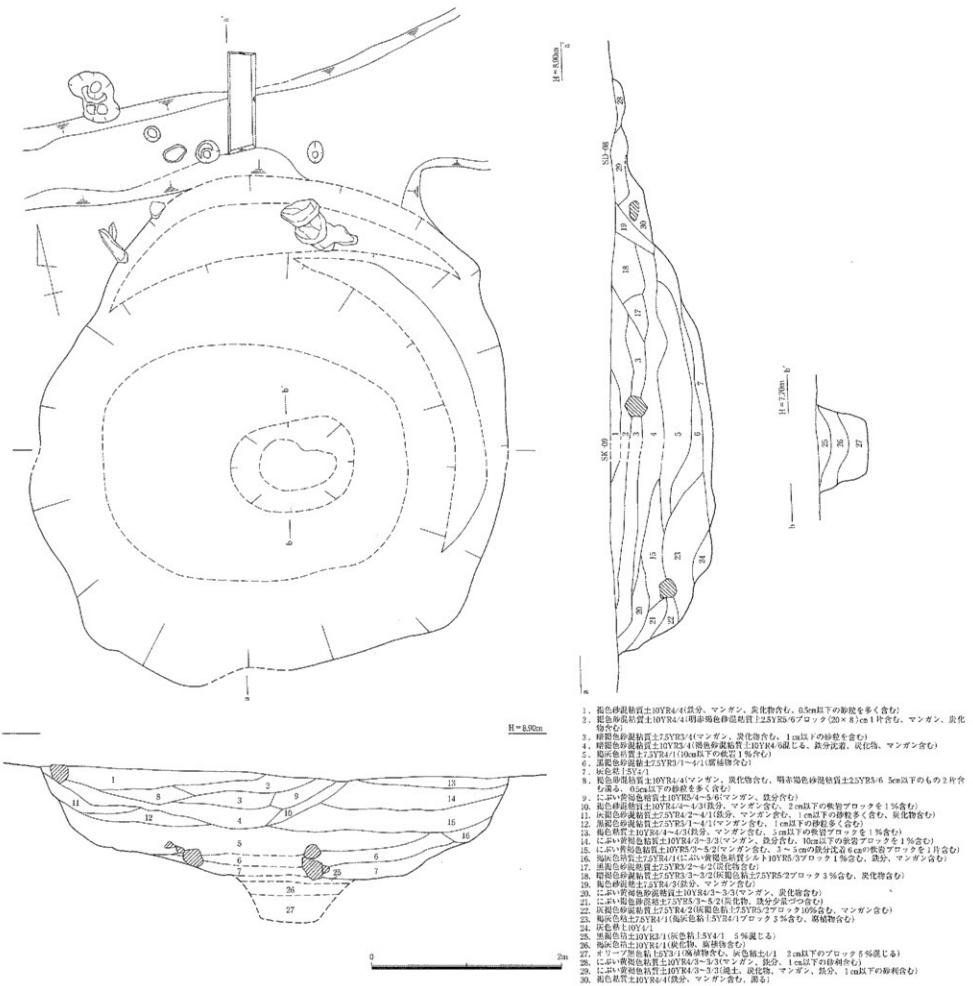
第37図 SK-08実測図



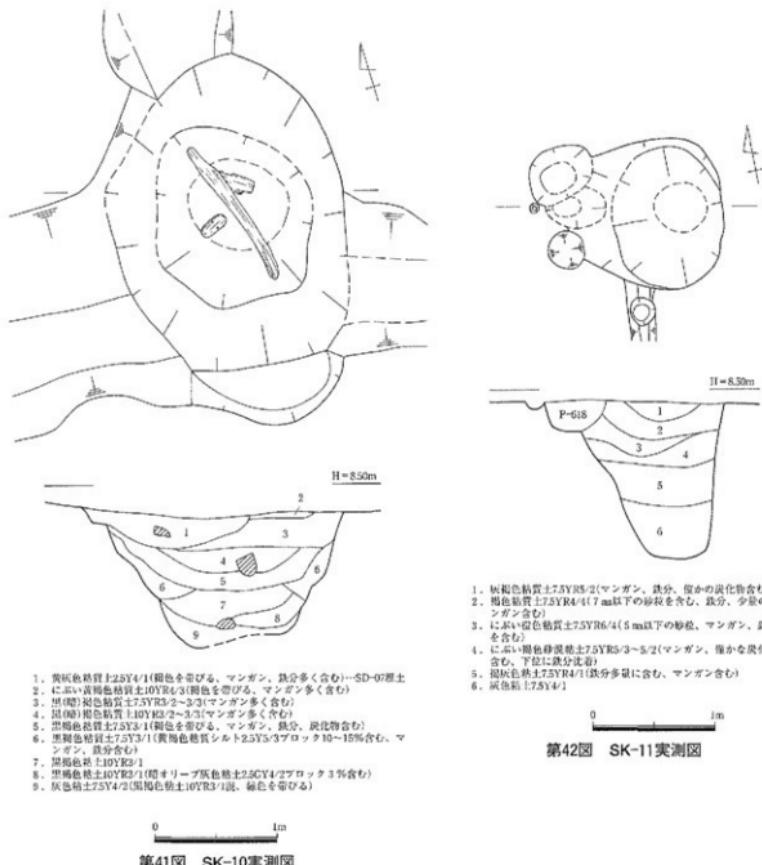
第38図 SK-08出土遺物実測図



第39図 SK-09出土遺物実測図



第40図 SK-09実測図



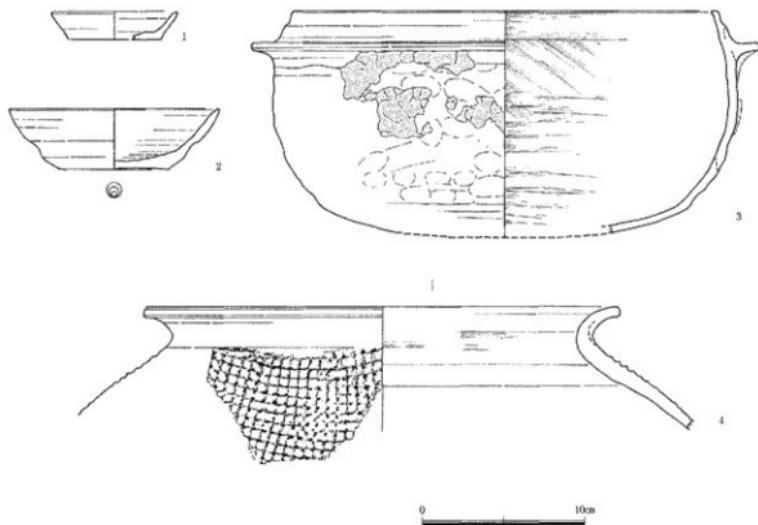
第42図 SK-11実測図

### SK-23(第59・65図)

北半の東側、SK-21の北西側に位置する。上位を暗渠に切られる。平面形は不整形円形を呈す。径は1.13～1.15m、深さ74cmを測る。遺物は瓦質の鉢(1)が出土している。性格等は不明である。

### SK-24(第61・67図)

北半の東端に位置する。SK-19の北端を切る。平面形は不整形を呈する。長さ1.06m、幅0.56m、深さ7cmを測る。主軸はN=36°-Wにとる。陶器の底部(1)が出土している。性格等は不明である。



第43図 SK-10出土物実測図（1）

#### SK-25(第62図)

北半の東端、SK-20の北東側に位置する。上位を暗渠に切られる。平面形は橢円形を呈す。検出長0.87m、幅0.72m、深さ83cmを測る。主軸はN-23°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

#### SK-26(第68~71図)

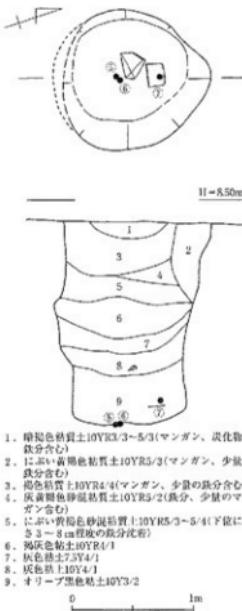
北半の東側に位置する。上位僅かに擾乱坑に切られる。平面形は不整橢円形を呈す。長さ2.58m、幅1.97m、深さ149cmを測る。主軸はN-63°-Eにとる。遺物は土師器灯明皿（1）、青磁（3）、砥石（4）、曲物底板（6）、漆器椀（8）、錢貨（9）などが出土している。（9）は1174年を初鑄年とする「淳熙元寶」か。規模などから井戸とも考えられるが詳細は不明である。

#### SK-27(第72図)

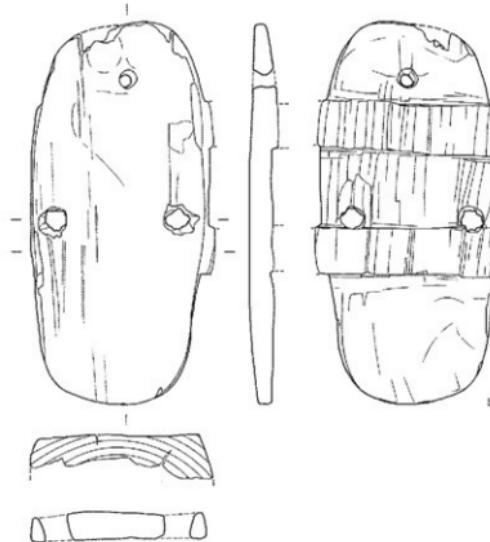
北半の中央付近、SK-26の西側に位置する。平面形は不整円形を呈す。径は0.84~0.86mを測る。調査途中で崩落した為、深さは不明である。時期、性格等は不明である。

#### SK-28(第73図)

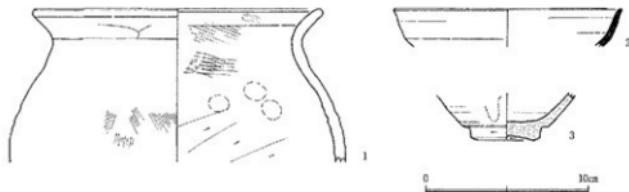
北半の北東端に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ0.77m、幅0.75m、深さ35cmを測る。主軸はN-65°-Wにとる。時期、性格等は不明である。



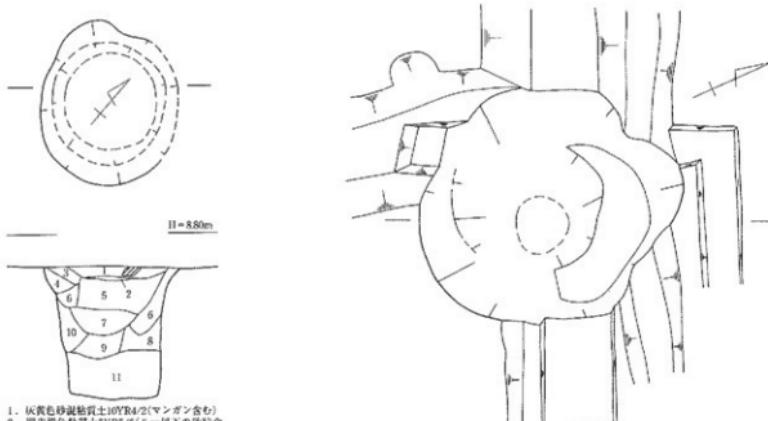
第44図 SK-12出土物実測図



第45図 SK-10出土遺物実測図（2）

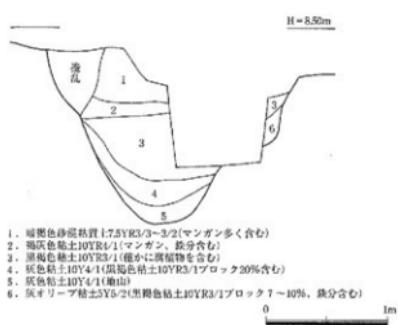


第46図 SK-11出土遺物実測図



1. 淡黄色砂泥質粘土10YR4/2(マンゴン含む)
  2. 明赤色粘質土5YR5/6(5cm以下)の砂質含む
  3. に加え黄褐色砂泥質粘土10YR4/4(炭化物含む)
  4. 淡黃葉色シルト10YR4/2(炭化物、マンゴン含む)
  5. 黑褐色粘質土10YR3/2(黄褐色シルト質塊含む2.5%ブロック7%、マンゴン、砂かん等の炭化物を含む、灰化帶びる)
  6. 黑褐色粘質土10YR3/2(炭化物、マンゴン含む)
  7. 黄褐色シルト質塊緑6.25Y3/4(黄褐色粘質土10YR3/2ブロック10%含む、マンゴン含む)
8. 黑褐色粘質土10YR3/1(3mm以下)の砂を含む

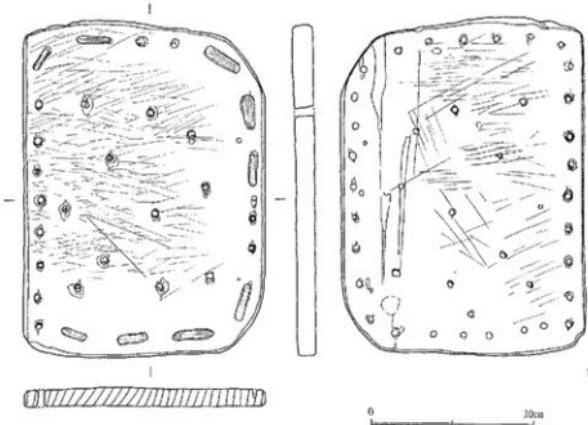
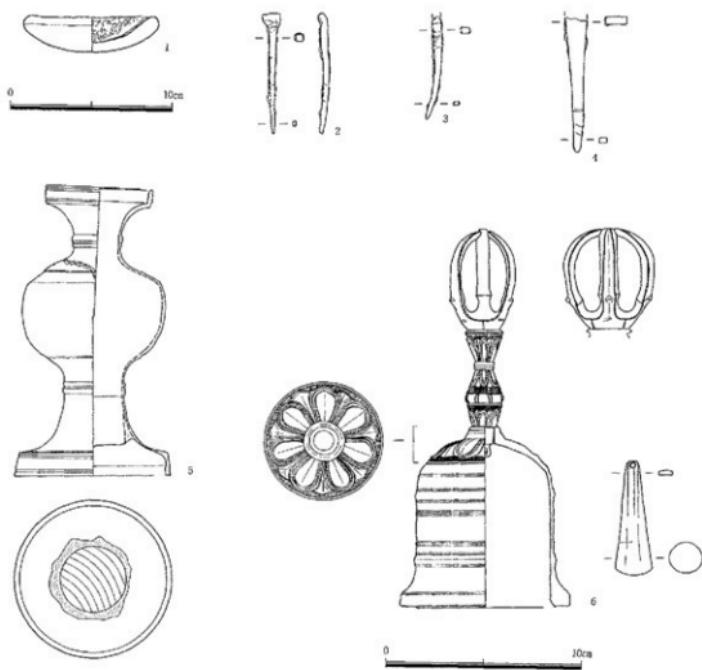
第47図 SK-13実測図



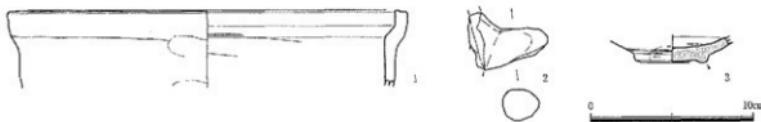
第48図 SK-14実測図

#### SK-29(第74・75図)

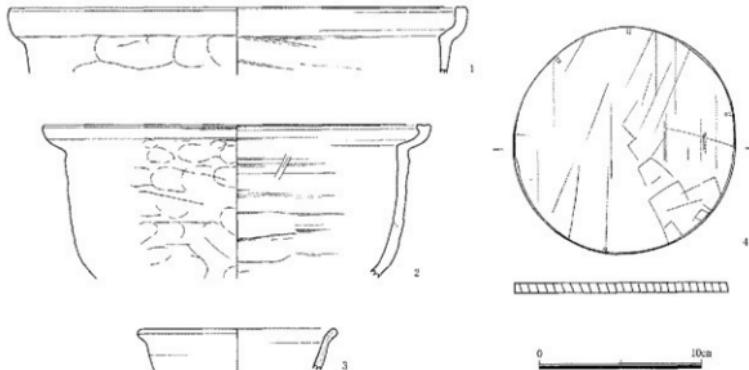
北半の中央付近に位置する。平面形は円形を呈す。径1.81m、深さ140cmを測る。断面形は若干オーバーハングしており、袋状を呈す。遺物は箱状木製品(1)などが出土している。時期、性格等は不明である。



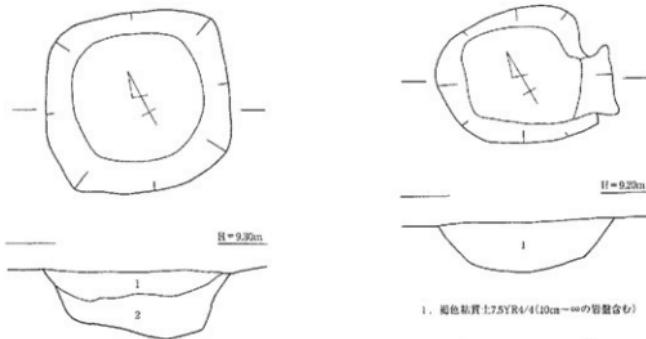
第49図 SK-12出土遺物実測図



第50図 SK-13出土遺物実測図

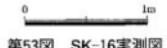


第51図 SK-14出土遺物実測図

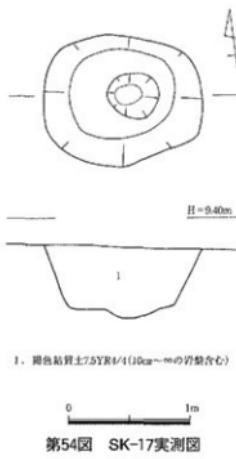


1. 黄褐色粘質土10YR4/3-5/3(褐色シルト10YR4/6ブロック5%含む)
2. 褐色砂質粘質土7.5YR4/4-4/6(1cm-∞の岩盤ブロック5%含む)

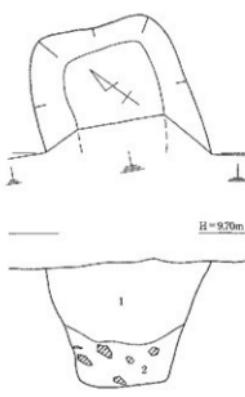
第52図 SK-15実測図



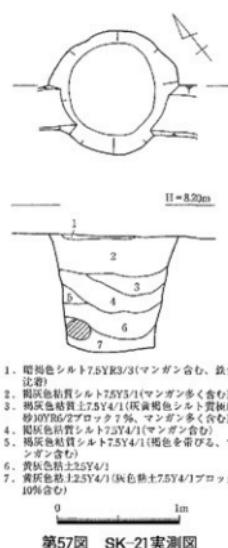
第53図 SK-16実測図



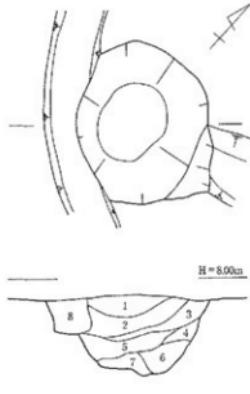
第54図 SK-17実測図



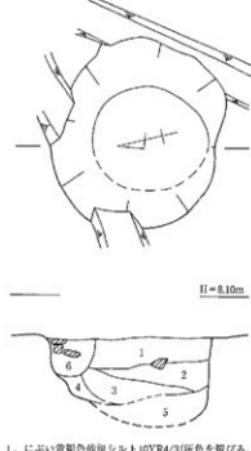
第55図 SK-18実測図



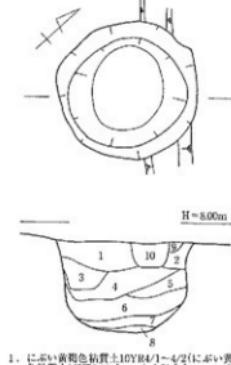
第57図 SK-21実測図



第56図 SK-19実測図



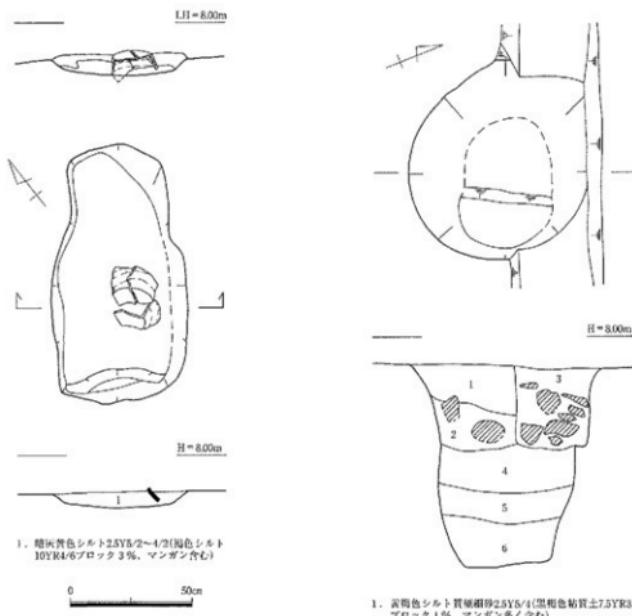
第58図 SK-22実測図



第59図 SK-23実測図



第60図 SK-17出土物実測図



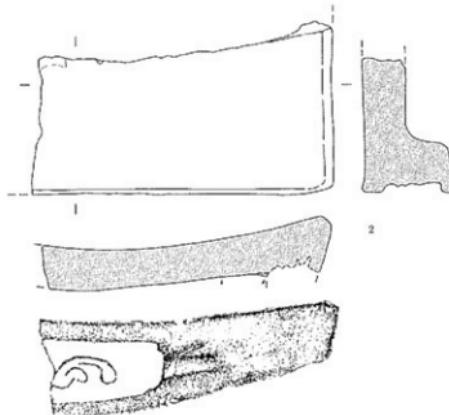
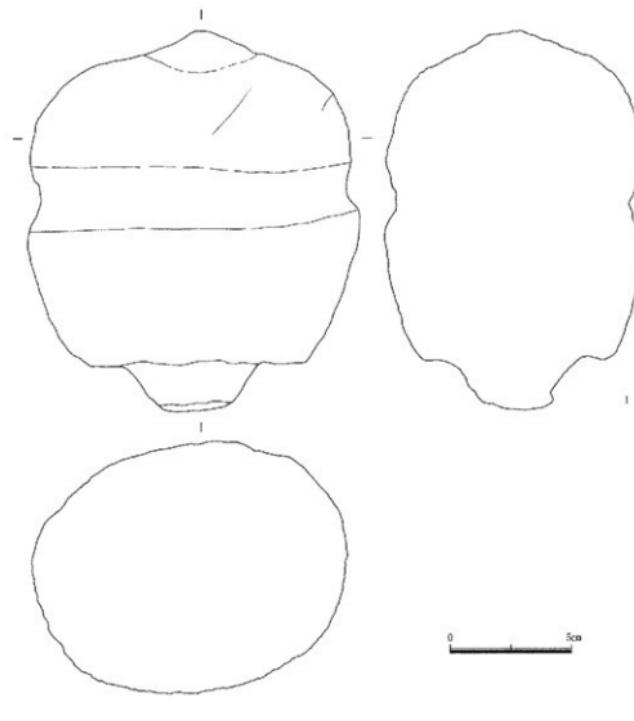
第61図 SK-24実測図

- 1. 青褐色シルト質粘土2.5YS5/2~4/3(黒褐色粘土7.5YR3/1  
ブロック1%, マンガン多く含む)
- 2. 黄褐色シルト質粘土2.5YS5/4(マンガン多く含む)
- 3. 褐灰色シルト質粘土2.5YS5/2(マンガン多く含む)
- 4. 棕灰色粘土10YR3/1(マンガン含む)
- 5. 褐灰色粘土2.5Y4/1~3/1
- 6. 姑获黄色シルト質粘土2.5YS5/2(鉄分含む)

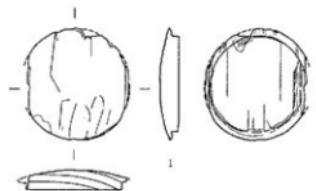
第62図 SK-25実測図

#### SK-30(第78・81図)

北半の東端、SK-28の南側に位置する。SD-22と接する。平面形は円形を呈す。径3.41~3.48m、深さ182cmを測る。中央部分が径60cm程度の範囲で若干凹む。埋土には最大長90cm以上もある石が投棄されていた。遺物は土師皿(1)、瓦質の土鍋(2)、羽釜(3)、木製品(5・6)などが出土している。中央部分に井筒が据えられていたと仮定すれば、井戸の可能性もあるが詳細は不明である。



第63図 SK-18出土遺物実測図



第64図 SK-20出土遺物実測図



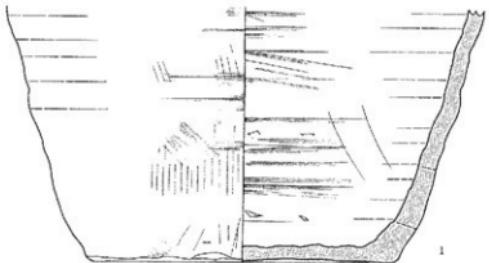
第65図 SK-23出土遺物実測図

0 10cm

第64図 SK-20出土遺物実測図



第66図 SK-19出土遺物  
実測図



第67図 SK-24出土遺物実測図

0 10cm

#### SK-33(第76図)

北半の北東端、SK-30の北東側に位置する。平面形は隅丸方形を呈す。一边131~139cm、深さ17cmを測る。時期、性格等は不明である。

#### SK-34(第77図)

南半の東側、南寄りに位置する。平面形は円形を呈す。径は0.58~0.60m、深さ36cmを測る。時期、性格等は不明である。

#### SK-35(第79・82図)

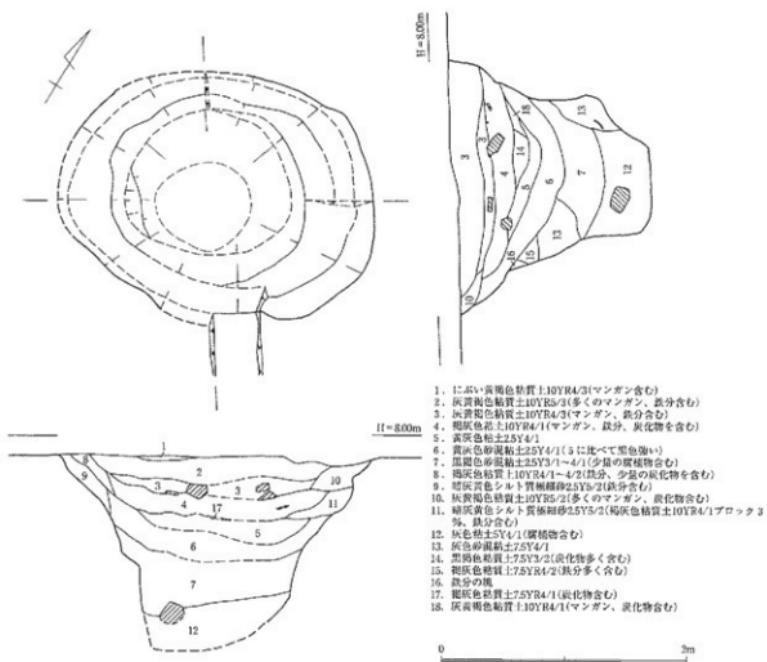
南半の東側、SK-35の東側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ0.78m、幅0.69m、深さ46cmを測る。主軸はN-31°-Eにとる。遺物は製塙土器(1)、須恵器杯(2)が出土している。性格等は不明である。

#### SK-36(第80図)

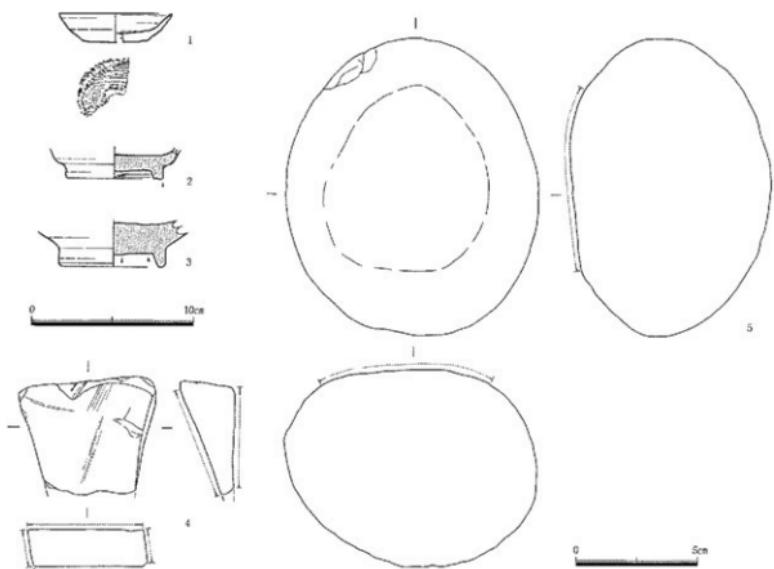
南半の東側、SK-35の北東側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ0.71m、幅0.64m、深さ49cmを測る。主軸はN-32°-Eにとる。時期、性格等は不明である。

#### SK-37(第83図)

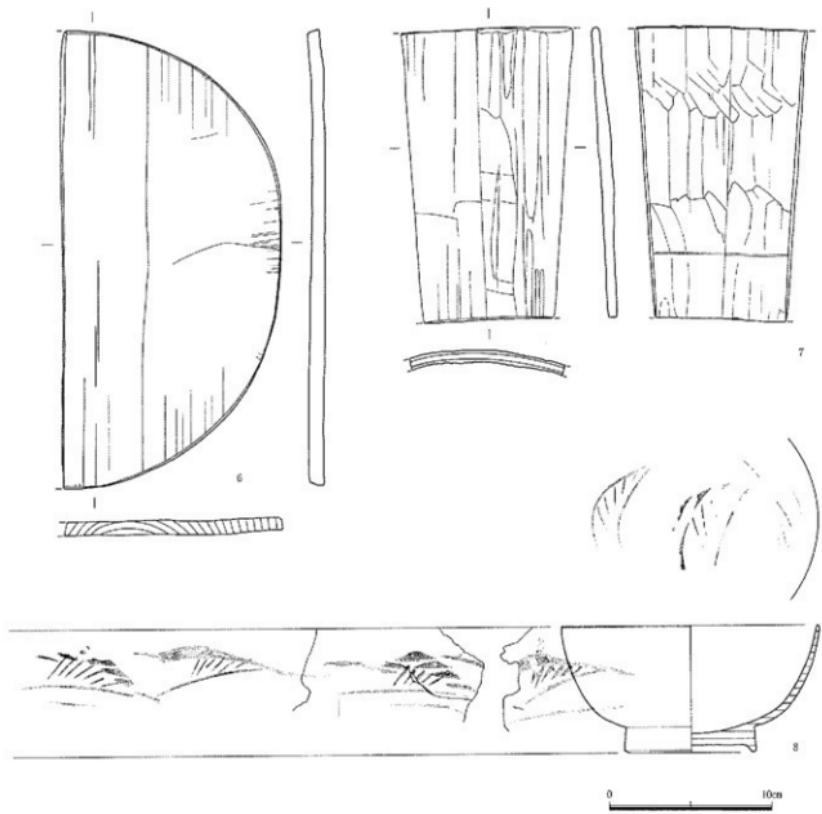
南半の東側、SK-36の北東側に位置する。平面形は不整円形を呈す。長さ0.93m、幅0.81m、深さ72cmを測る。主軸はN-82°-Wにとる。時期、性格等は不明である。



第68図 SK-26実測図



第69図 SK-26出土遺物実測図 (1)



第70図 SK-26出土遺物実測図（2）

**SK-38(第84図)**

南半の東側、SK-01の南東側、SK-37の北側に位置する。平面形は橢円形を呈す。長さ0.91m、幅0.78m、深さ62cmを測る。主軸はN=34°-Wにとる。時期、性格等は不明である。

**SK-39(第85図)**

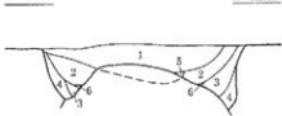
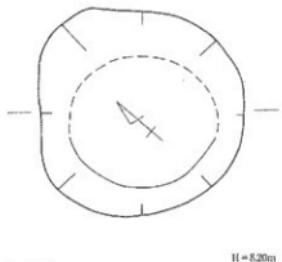
南半の東側、SK-04の北東側に位置する。平面形は円形を呈す。径は0.81~0.85m、深さ13cmを測る。時期、性格等は不明である。

**SK-40(第86・87図)**

南半の東側、SK-04の東側に位置する。平面形は円形を呈す。長さ0.71m、幅0.64m、深さ22cmを測る。遺物は須恵器杯（1）が出土している。性格等は不明である。

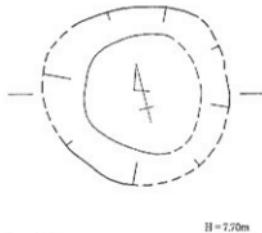


第71図 SK-26出土  
錢貨拓影



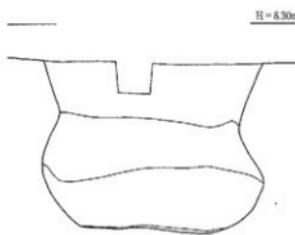
1. に、ぶい黄褐色粘質土10YR5/3-5/2(10cm以下の  
新岩ブロック15%含む、マンガン、鉄分、炭化  
物を含む)
2. 黄褐色砂泥質土10YR4/1(マンガン、炭化物  
含む)
3. 黄褐色シルト質粘土2.5Y5/4(細粒色砂混粘質  
土10Y3/2/1ブロック3%含む、鉄分含む)
4. 黄褐色シルト質粘土2.5Y5/3(鉄分多く含む)
5. に、ぶい黄褐色粘質土10YR5/3(黄褐色シルト質  
粘土2.5Y5/4ブロック5%含む、マンガン含む)
6. 原状黄色細砂土2.5Y5/2(黄)

第72図 SK-27実測図



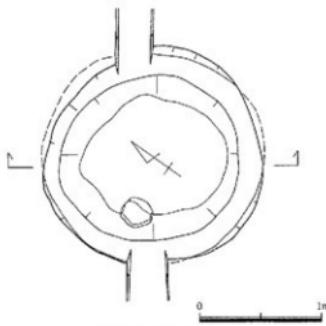
1. 黄褐色砂泥質土2.5Y5/4(黄褐色シルト質細砂2.5Y5/4  
ブロック20%、マンガン、鉄分含む)
2. 黄褐色砂泥質土2.5Y5/1(マンガン、鉄分含む)

0 50cm  
第73図 SK-28実測図

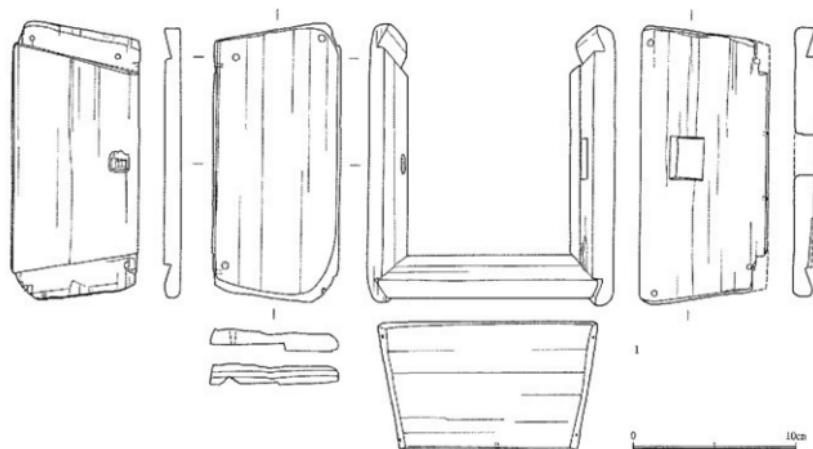


SK-41(第88図)

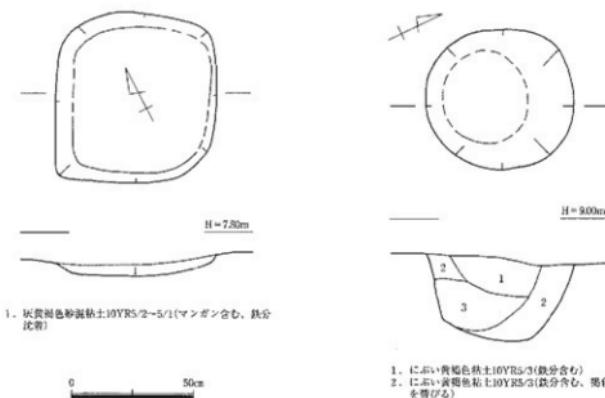
南半の西側中央付近、SK-11の北側に位置する。南西端をP-600に切られる。SD-12と重複するが新旧関係は不明である。平面形は不整梢円形を呈す。長さ0.98m、幅0.59m、深さ44cmを測る。時期、性格等は不明である。



第74図 SK-29実測図



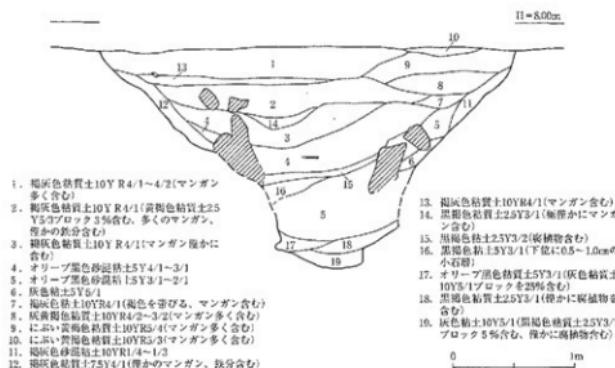
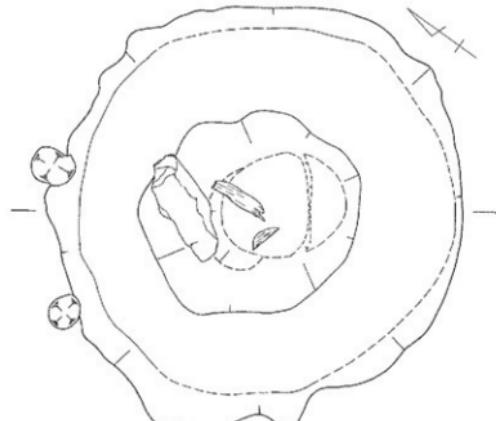
第75図 SK-29出土遺物実測図



第76図 SK-33実測図

0 50cm

第77図 SK-34実測図



第78図 SK-30実測図



H = 9.00m

H = 9.00m



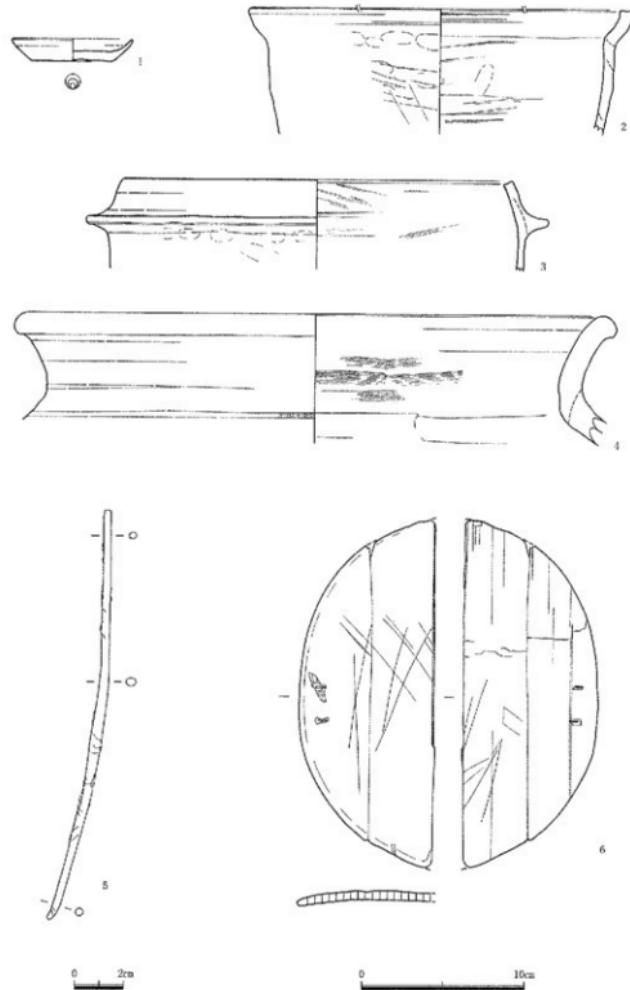
1. 褐色粘质土10YR 4/4(マンガン含む)
2. に赤い黃褐色粘质土10YR 3/1(褐色を帯びる、鉄分、マンガン含む)

0 50cm  
第79図 SK-35実測図

1. 褐色粘土7.5Y 4/4(マンガン含む)
2. 黄褐色粘质土10YR 3/1(マンガン、に赤い黃褐色粘质シルト10YR 3/2プロック2%含む)
3. 黄褐色粘土7.5Y 4/4(マンガン、に赤い黃褐色粘质シルト10YR 3/2プロック7%含む)

- 59 -

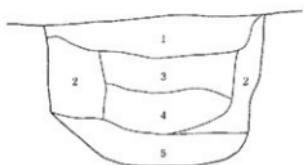
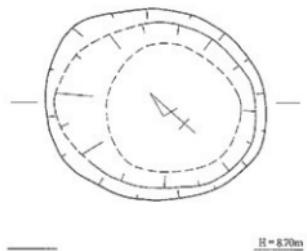
0 50cm  
第80図 SK-36実測図



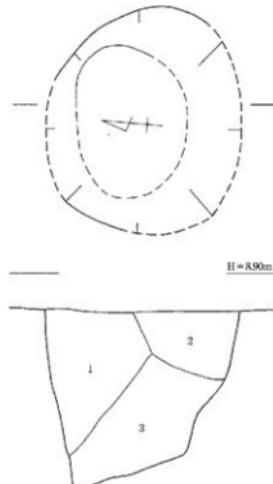
第81図 SK-30出土遺物実測図



第82図 SK-35出土遺物実測図



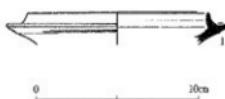
1. 雜色砂混粘土7.5YR4/4(マンガン含む)
2. 雜色砂混粘土7.5YR4/6-4/4(鉄分多く含む)
3. 雜色砂質土7.5YR4/2(マンガン含む)
4. 鐵灰色砂混粘土(質土7.5YR4/1)マンガン、鉄分含む)
5. 鐵灰色砂混粘土10YR4/1下部に鉄分含む)



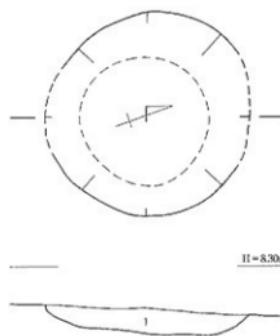
1. 雜色粘土7.5YR4/4(マンガン含む、に赤い黄褐色粘土シルト10YR4-3ブロック5%含む)
2. 雜色砂混粘土7.5YR4/3(マンガン含む)
3. 雜色砂混粘土7.5YR4/4(マンガン含む)

第83図 SK-37実測図

第84図 SK-38実測図

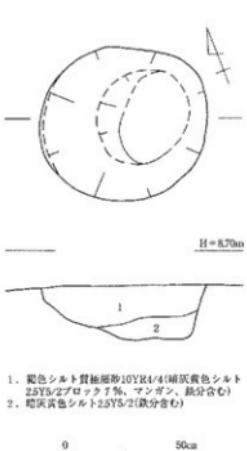


第86図 SK-40出土遺物実測図

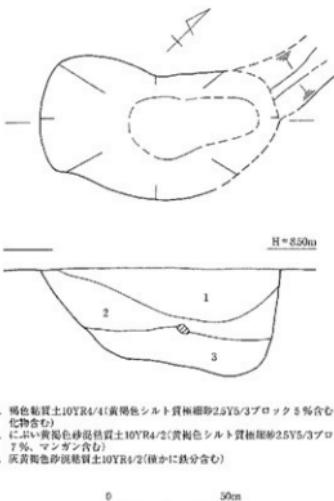


1. 鐵色シルト質粘土10YR4/4(鐵灰青色シルト2.5YR5/2ブロック7%、マンガン、鉄分含む)

第85図 SK-39実測図



第87図 SK-40実測図



第88図 SK-41実測図

### 3. 溝状遺構

当時期の溝状遺構は57条を検出した。明らかに近現代の暗渠と考えられるものは省略している。また、遺構番号を付けたなかにも暗渠や耕作痕などが含まれており、それらについては説明等を割愛している。

#### SD-02(04)(第89図)

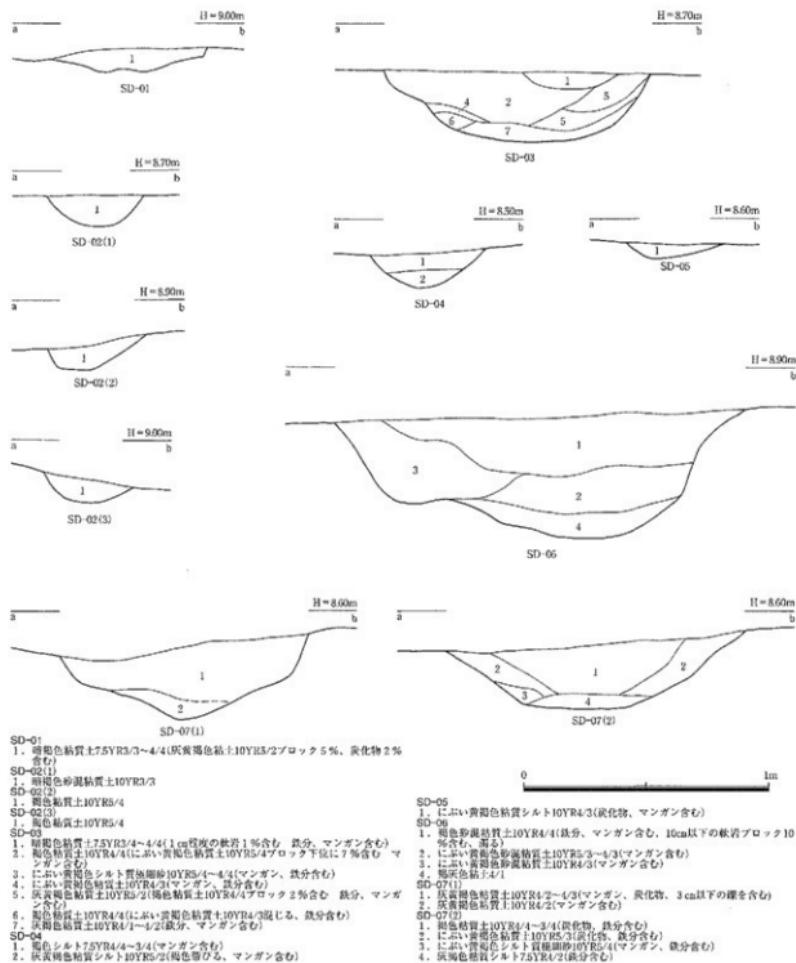
南半の中央から北側に位置する。東西から南北方向に屈曲する。便宜上、東西方向をSD-02、南北方向をSD-04としている。主軸をN-73°-Wにとる。溝幅は概ね0.4m、深さは15cm程度である。北西端に向かい次第に浅くなり、消滅する。南東端はSK-01の南隅で屈曲する。屈曲後の主軸はN-24°-Eにとり、約100°開く。北東端は調査地外へと延びる。SK-01・02・03より降る時期と考えられる。区画溝等も考えられるが、詳細は不明である。

#### SD-03(10)(第89・90図)

南半の中央に位置する。北東側を中心に東から北へ湾曲する。便宜上、SK-01からSD-08との交点までをSD-03、交点から北端までをSD-10としている。東端はSK-01と重複する。新旧関係は不明である。北端はSD-15に切られ、消滅する。溝幅は1.09~1.31m、深さ18~29cmを測る。北へ向かって幅が増し、浅くなる傾向がある。遺物は土師器甕(1)、土錐(2~5)などが出土している。SK-01を水利施設と考えると導水路とも考えられるが詳細は不明である。

#### SD-06(08)(第89・91・93・96図)

南半の西側に位置する。便宜上、SK-10より西側をSD-06、東側をSD-08としている。西端は調査地外へと延びる。東端はSD-10と合流するが新旧関係は不明である。主軸はN-82°-Wにとる。溝幅0.58~1.68m、深さ13~53cmを測り、西に向かって幅も増し、深くなる。SD-06から輸入青磁(1)、SD-08から須恵器甕(1)が出土している。区画溝、SK-10を水利施設と考えると導水路とも考えられるが詳細

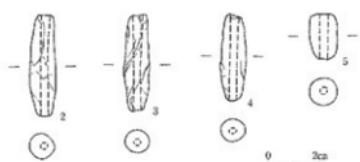
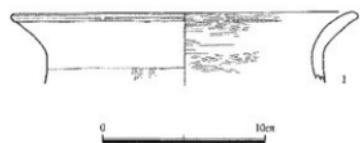


第89図 SD-01～07断面実測図

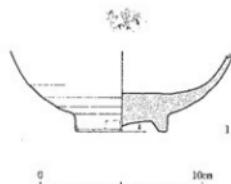
は不明である。

#### SD-07(第89・92図)

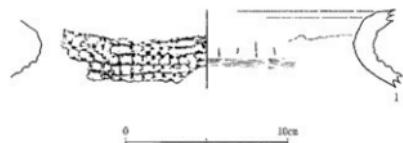
南半の西側に位置する。SK-10を切るが、更に南に延びないことからSD-06(08)と合流すると考えられる。北端はSK-14、SD-15に切られ、消滅する。主軸はN=11°-Eにとる。溝幅1.02~1.22m、深さ32~36cmを測る。出土遺物は礫石(1)などがある。SD-06(08)同様、区画溝、導水路などが考えられるが詳細は不明である。



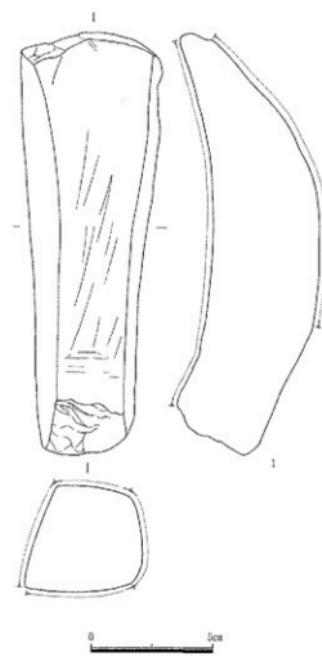
第90図 SD-03出土遺物実測図



第91図 SD-06出土遺物実測図



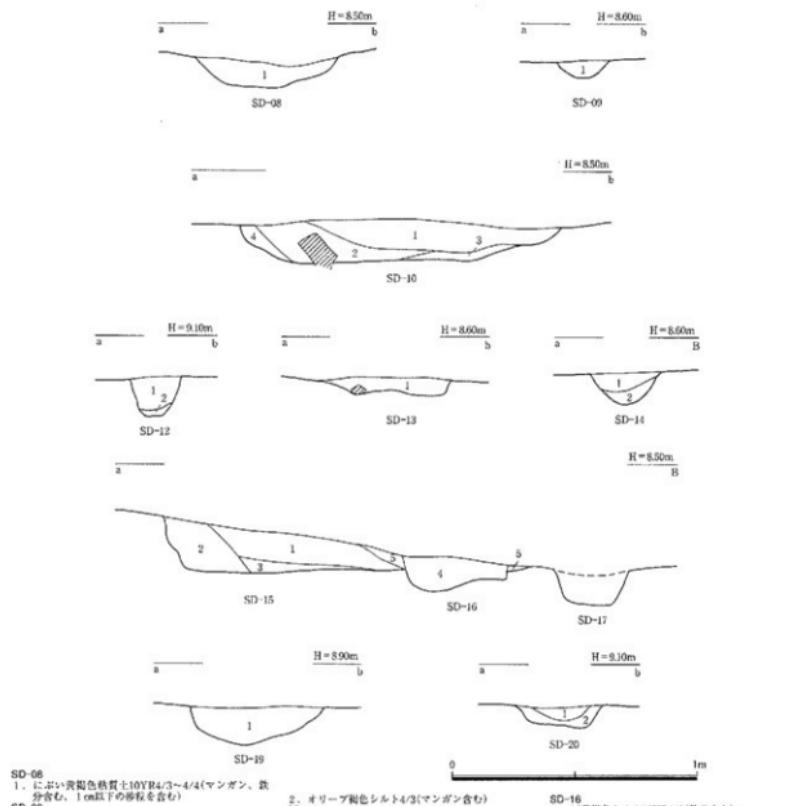
第93図 SD-08出土遺物実測図



第94図 SD-13出土遺物実測図



第95図 SD-21出土遺物実測図



- SD-08**  
1. に bei 黄褐色粘土 10YR4/3~4/4(マンガン、鉄分含む、1cm以下のみ鉄分を含む)
- SD-09**  
1. 黄褐色粘土 10YR3/2(化物土、マンガン含む、0.5cm以下の砂粒を含む)
- SD-10**  
1. 黄褐色粘土 10YR4/4(鉄分、化物土含む)  
2. 黄褐色粘土 10YR4/1(鉄分、マンガン含む)  
3. 黄褐色シルト層 10YR5/2(鉄分に鉄化物含む)  
4. に bei 黄褐色粘土 10YR4/3(鉄分含む)
- SD-11**  
1. 塗褐色砂泥質土 10YR3/3~3/2(褐色粘土質土 7.5YR4/6ブロック10%含む、僅かに化物土、マンガン含む)
- SD-12**  
1. 塗褐色砂泥質土 10YR4/3~3/2(褐色粘土質土 7.5YR4/6ブロック10%含む、僅かに化物土、マンガン含む)
- SD-13**  
1. に bei 黄褐色砂泥質土 10YR4/3(マンガン多く含む)
- SD-14**  
1. に bei 黄褐色砂泥質土 10YR4/3(マンガン多く含む)  
2. 黄褐色シルト 10YR4/2(マンガン含む)
- SD-15**  
1. に bei 黄褐色砂泥質土 10YR4/3(マンガン、鉄分含む)  
2. 黄褐色砂泥質土 10YR4/4(鉄分、マンガン含む)  
3. 黄褐色砂泥質土 10YR4/3~3/2(マンガン含む)  
4. 黄褐色シルト 10YR4/2(鉄分含む)
- SD-16**  
1. 深黄褐色シルト 10YR4/2(鉄分含む)
- SD-17**  
1. 砂
- SD-18**  
1. に bei 黄褐色砂泥質土 10YR5/3~5/2(鉄り土、0.5cm以下の砂粒を含む、鉄分、マンガン含む)
- SD-19**  
1. 深褐色砂質土 10YR3/3(0.5cm以下の小石、マンガン含む)  
2. に bei 黄褐色砂泥質土 10YR4/3(0.5cm以下の小石を含む、僅かに鉄分含む)
- SD-20**  
1. 黄褐色シルト 10YR4/2(鉄分含む)

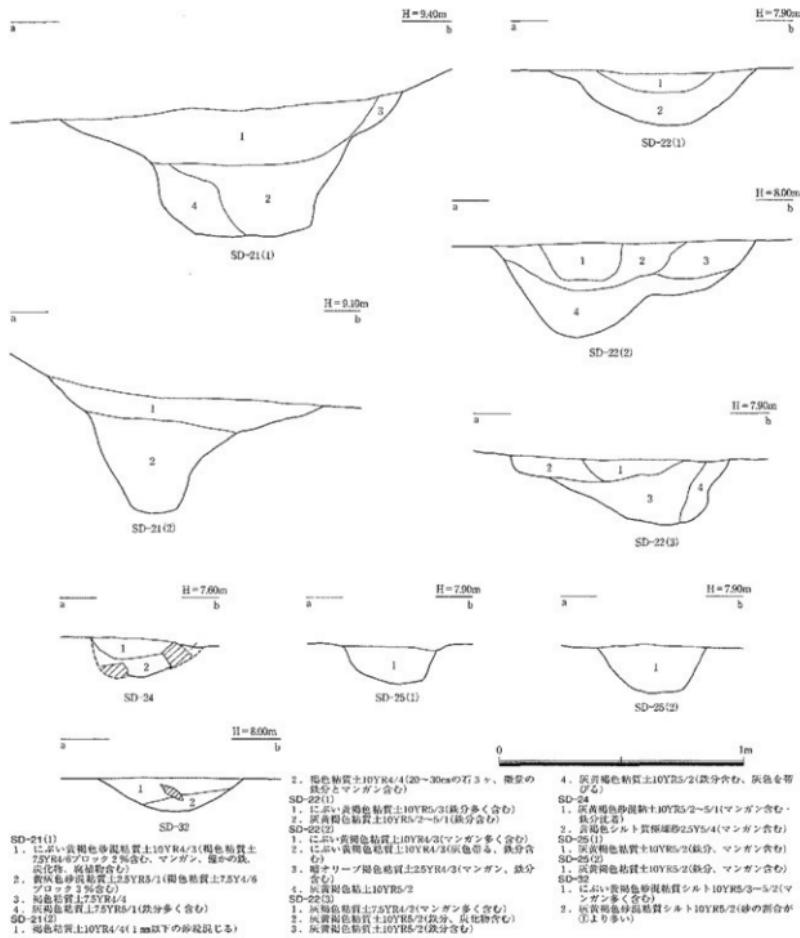
第96図 SD-08~10・12~17・19・20断面実測図

#### SD-21(第95・98図)

南半の西端に位置する。南東側を中心に南西から東に湾曲する。南西端は調査地外へと延び、東端は現代の用水路とそれを保護するために設けた控えにより未調査である。溝幅は1.12~1.40m、深さ56~59cmを測る。遺物は瀬戸産天目碗(1)、陶器壺(2)、輸入青磁(3)などが出土している。性格等は不明である。



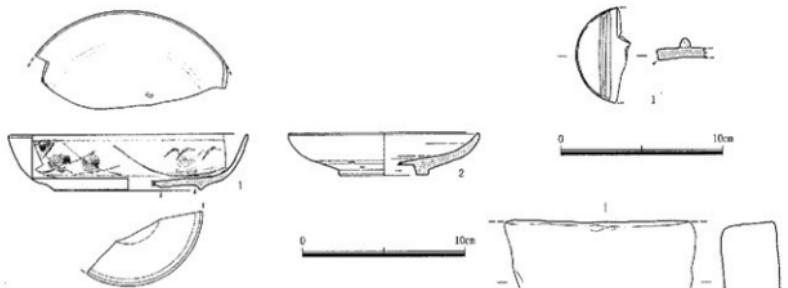
第97図 SD-17出土遺物実測図



第98図 SD-21・22・24・25・32断面実測図

### SD-40

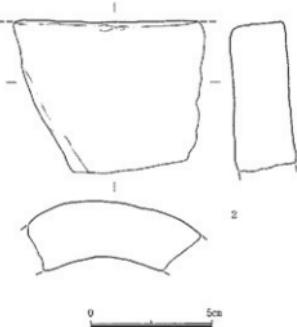
北半の西端、SD-34の西側に位置する。西端は終息するが、東端は平成12年度に実施された試掘トレンチに切られて消滅する。主軸はN-82°-Wにとる。幅0.34m、深さ8cmを測る。SB-10とはほぼ同軸であることからSB-10に伴う溝である可能性もあるが詳細は不明である。



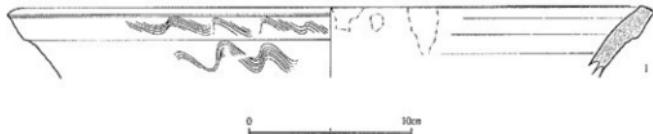
第99図 SD-22出土遺物実測図



第101図 SD-39出土遺物実測図



第100図 SD-25出土遺物実測図



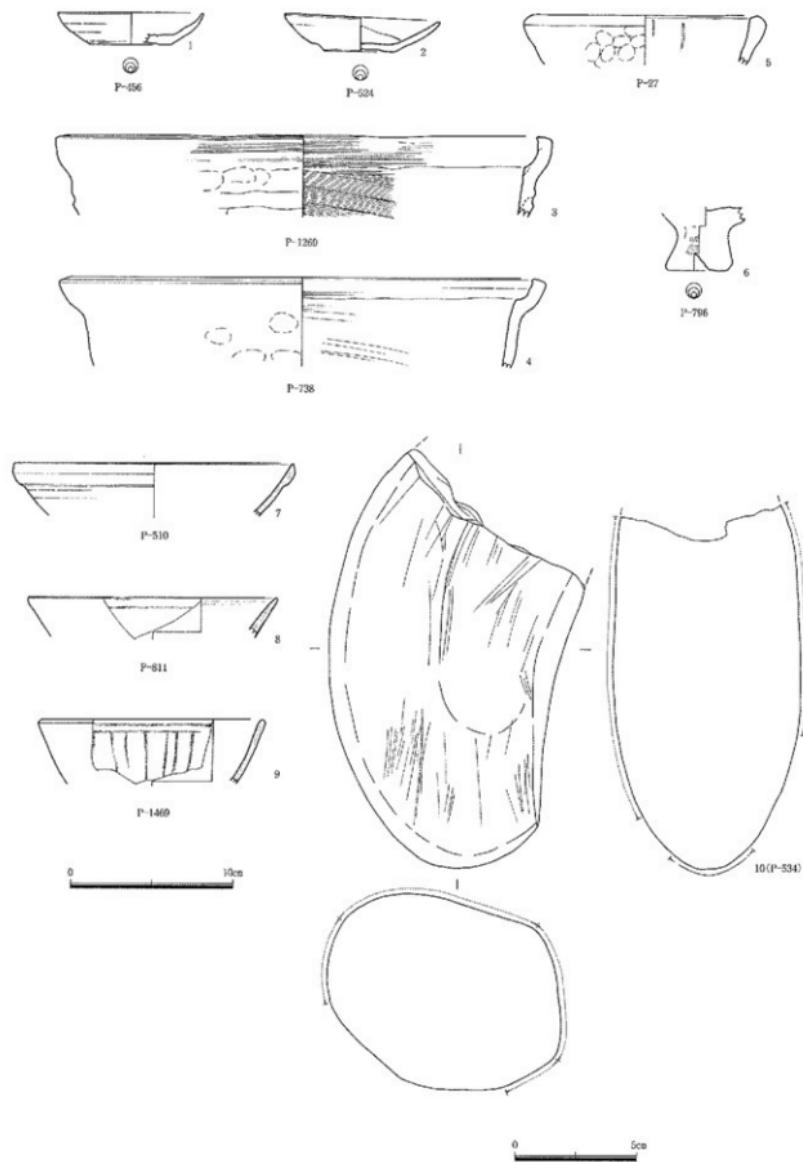
第102図 SD-54出土遺物実測図

#### 4. 遺構外遺物(第105~109図)

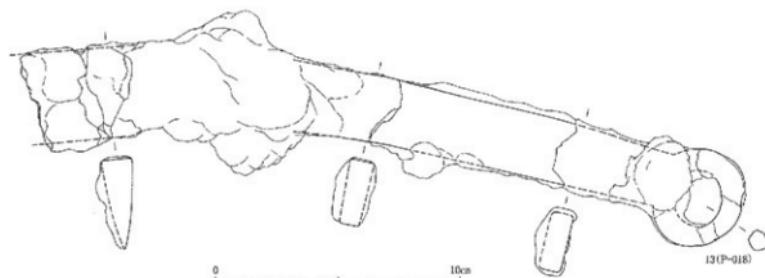
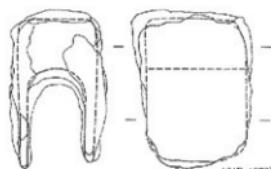
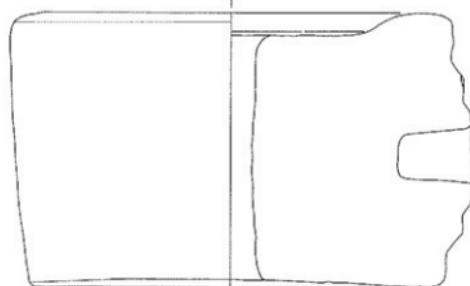
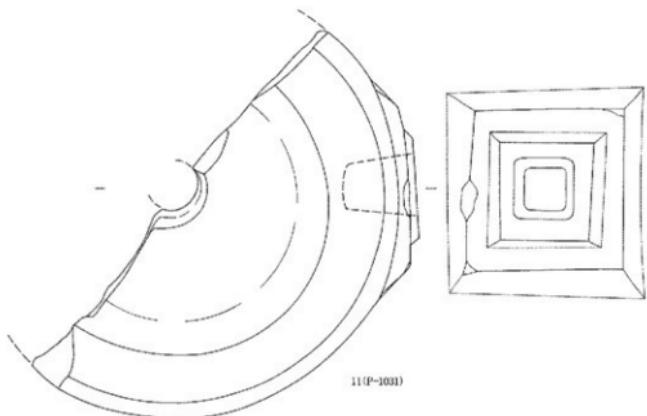
(1~4)は縄文土器。(1~3)は鉢の口縁部、所謂「突帯文土器」。(1)は直立、(2)は内傾、(3)は外傾し、端部で外方へ肥厚する。(1)は突帯に刻み目、(2)は押圧を施す。(4)は体部片。内外面共に工具による条痕が認められる。平成11年度の試掘調査において、隣接する字段木から同類の突帯文土器が數片出土している。

弥生土器(5~6)は壺、(7~8)は甕、(9)は鉢、(10)は器台である。(5)の口縁部は大きく外反し、水平気味に納める。外方に凹端面を有する。口縁内面に櫛描波状文と櫛描半円文を有する。(6~7~8~9)は「縫上げ口縁」。(6)は口縁端部下方突出部に刻み目、頸部には指頭圧痕貼付突帯を有する。(7)は口縁端部上方に丸く納める。(8)は口縁端部外下方に大きくつまみ出す。端面には3~4条の凹線を有する。(6~7~9)は体部外面上半にハケ目、中位に刺突文、下半はヘラ磨き。(10)は復元口径28.8cm、器高29.1cmを測る。口縁端面に4条の凹線を有す。赤彩。

(11~14)は土師質土器。(11)は土鍋、(12)は手捏ね土器、(13~14)は杯。(14)は高台付。(15~16)は製塩土器。(17)は甕。(18~22)は須恵器。(18)は蓋、(19~21)は杯、(22)は高杯。(23~24)は陶器。



第103図 ピット内出土遺物実測図(1)



第104図 ピット内出土遺物実測図(2)

(23)は蓋、オリーブ黄色の釉が観察できるが須恵器である可能性もある。(24)は備前系擂鉢、復元口径28.1cm、器高9.5cmを測る。内面7条単位の擂目を有する。(25)瓦質火鉢の脚部。

#### 第4節 まとめにかえて

初めに本高円ノ前遺跡の時期について出土遺物を概観すると、弥生時代後期、平安時代末期から鎌倉時代(11世紀末~14世紀前半)、室町時代前半(14世紀後半~15世紀)に大別できる。これら以外にも繩文時代晚期の突帯文土器、古墳時代後期の須恵器、近世陶磁器なども若干出

土するがそのほとんどは遺構外から出土している為、当遺跡の主要な時期と捉えることはできない。

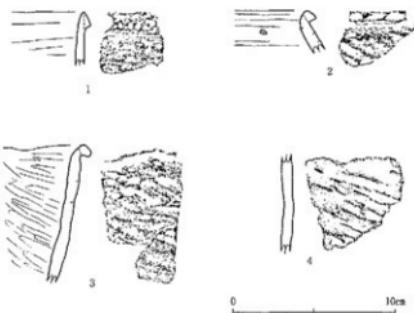
弥生時代の遺構は北半の西側からの検出に限定され数は少ない。このことは、当該期の遺跡の中心は今回の調査地から外れるものと考えられ、西側の字段木においても平成11年度の試掘調査において顕著な遺構が確認されなかったことから、北側を流れる有富川方向へ広がるものと考えられる。SD-34・35からはIV-3からV-1様式<sup>10</sup>、概ね後期初頭に比定できる一括土器が出土する。SB-10は柱間寸法や柱穴の規模、主軸などが他の建物と異質であり、当時期に該当する可能性もある。

中世期の遺構の特徴に掘立柱建物が挙げられる。この度、想定できた建物は10棟を数えるが、柱穴は1,300基近く検出しておらず、本来は相当数の建物が存在したと考えられる。規模は4間×3間が2棟、3間×2間が3棟、2間×2間が3棟、2間×1間が2棟と比較的小規模である。このことは柱痕跡の大半が20cm前後、大きいものでも30cm程度であることと矛盾しない。主軸はN-5°-E前後が2棟、N-11°-15°-Eが4棟、N-20°-E前後が3棟、N-30°-Eが1棟である。主軸からは3・4時期が考えられる。建物の時期を柱穴から出土する僅少な細片から限定することは困難であるが重複関係からSB-04はSD-06(08)・07、SK-13の室町期に先行すると考えられる。更に想像を逞しくすれば、同軸のSB-05、SB-07、SB-08が同時期と考えられる。この場合、SB-04、SB-05が重複し矛盾が生じるがSB-04のプランは縮小の可能性があるので大過はない。SB-08の柱穴P-1405の柱根を放射性炭素(14C)年代測定したところAD.1332±36の年代を得ている。これらの結果から鎌倉時代末期(14世紀中頃)の所産と考えられる。SB-01も柱穴P-906の柱根を年代測定した結果、AD.1039±38年が比定できる。同軸のSB-02・03も同様、平安時代後半(11世紀末)と考えることもできる。SB-06、SB-09に関しての時期は不明である<sup>11</sup>。

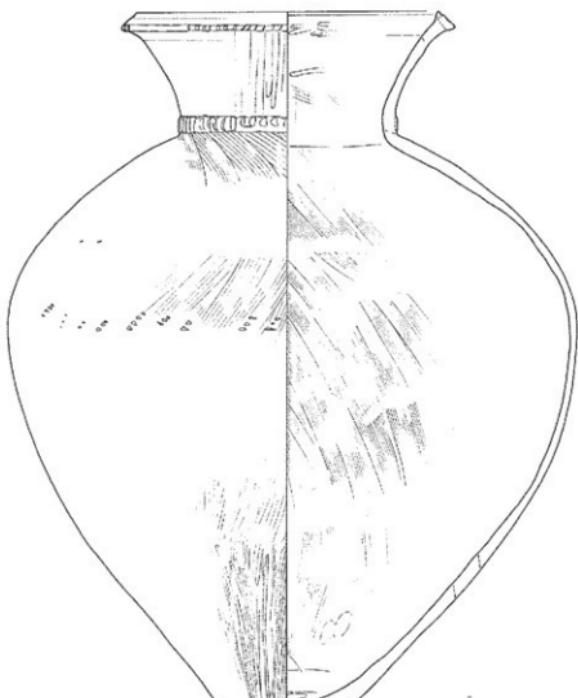
土坑は大半の性格が不明である。なかには井戸など水利施設的性格が考えられるものがあるが井戸枠や井筒が確認されていない為、断定はできない。これらの土坑からは漆器や下駄などの木製品が良好に遺存する。特徴的な土坑としてはSK-12から五鉢鉢や華瓶などの銅製仏具、取瓶もしくは壇場と考えられる小皿、鉄釘塊などが出土しており、宗教的な埋納遺構や特別な廐棄土坑などの可能性が考えられる。仏具の形態等から室町期の所産と考えられる<sup>12</sup>。

溝状遺構についても大半の性格は不明である。暗渠や耕作痕も含まれている。井戸等の水利施設に付帯する導水路や区画溝などの性格が考えられるが詳細は不明である。

中近世期の遺物は土師質土器、瓦質土器、須恵器、陶磁器類、木製品、鉄製品などがある。土師質土器は杯、皿を主とするが鍋も少しばかり出土している。量的には12・13世紀代のものよりは13・14世紀

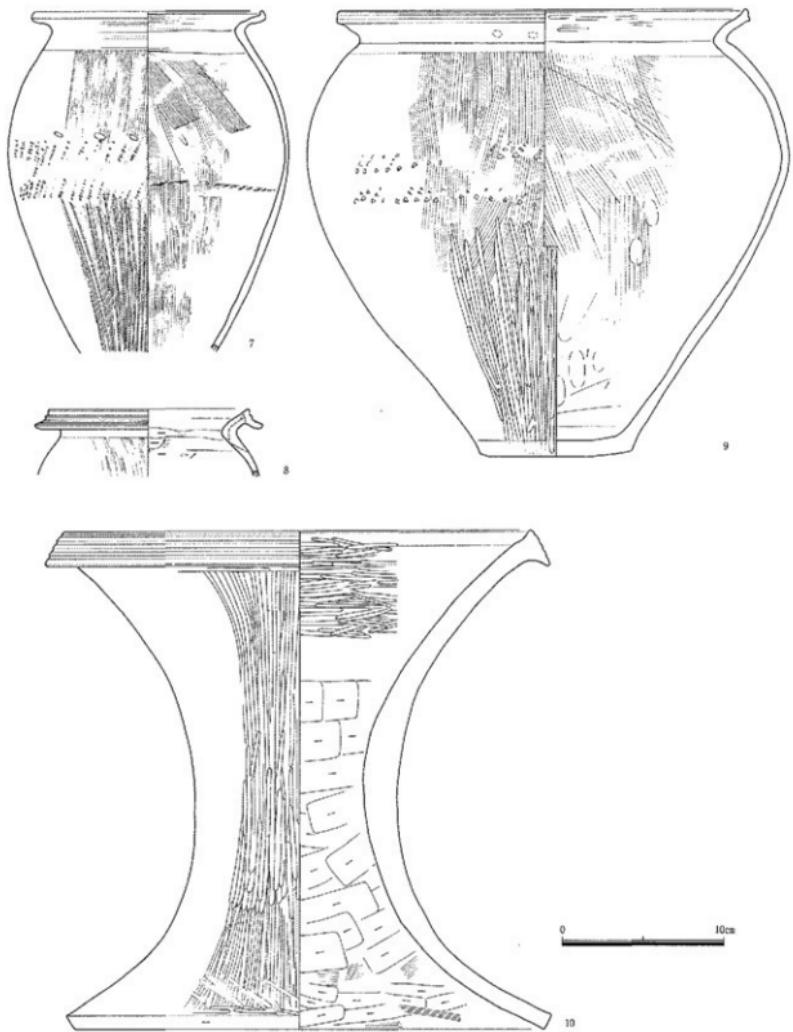


第105図 遺構外出土遺物実測図(1)



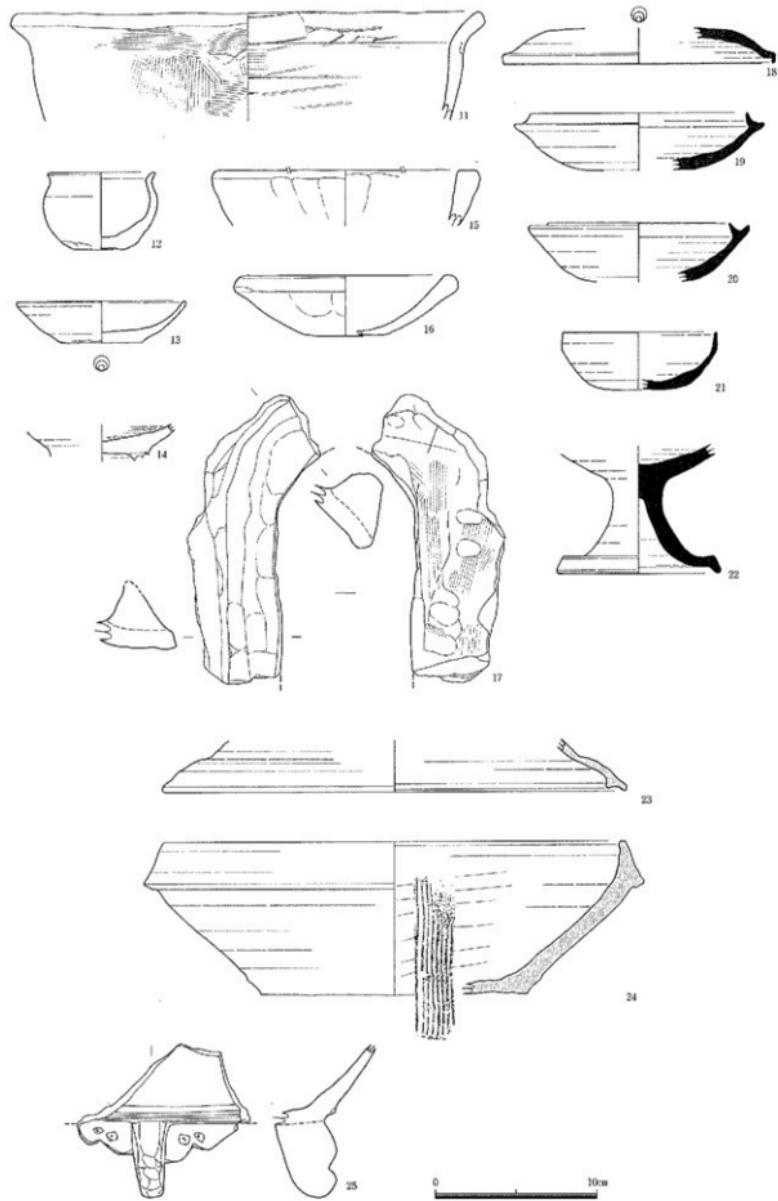
第106図 遺構外出土遺物実測図(2)

代のものが多い。なかには11世紀代に遡る杯もある。瓦質土器は「受け口」状の口縁を有する鍋、羽釜を主体に出土量は比較的多い。火鉢片も出土している。ほとんどが14・15世紀代と考えられる。須恵器は壺甌類、鉢類で占める。壺甌類の外面には大きめの格子タタキが特徴的であり、勝間田系かと考えられている。鉢類は東播系か。陶器は備前系と考えられる擂鉢、小型の壺甌類で占める。なかには瀬戸産と考えられる天目碗が数点出土している<sup>10</sup>。磁器は白磁、青磁、染付があるが、白磁と青磁は碗類を主と



第107図 遺構外出土遺物実測図(3)

し、全てが輸入品である。白磁は口縁部が端反り、玉縁の2種類がある。青磁は全て14世紀以降のものである。剣先蓮弁文、雷文、見込みのスタンプ文が主流であり、無文のものも多い。染付は近世のなます皿、目跡が残ることから在地産の可能性もある。このように中世遺跡の典型的な器種、産地構成である。



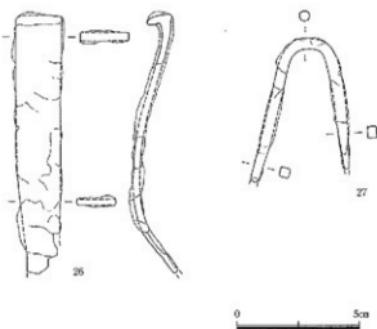
第108圖 造構外出土遺物實測圖(4)

本高円ノ前遺跡は鎌倉時代末期から室町時代前半(14・15世紀)を盛期とする集落遺跡と考えられるが、五鉛鈴や華瓶などの密教法具が埋納もしくは廃棄されていた土坑の存在や輸入陶磁器が比較的多いことなど、やや特殊な性格も有していると考えられる。墨書き土器や木簡などの文字資料は出土しておらず、瓦葺建物も存在していないかったようで寺社などとは直接的な関係は見出せないが、「釣山」の北西に位置する菖蒲庵寺(後の座光寺)の存在は気になるところである。また、16世紀以降は集落そのものが放棄され、耕地化していることも興味深い。有富川を挟んだ対岸の菖蒲、山ヶ鼻遺跡とも時期的に重なり、その関係も今後の課題である。

最後に若干ではあるが繩文時代晩期の突帯文土器や古墳時代の須恵器が出土していることから周辺には当該時期の遺構も存在する可能性を指摘しておきたい。

#### 註

- (1)『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992年
- (2) P-906、P-1045内に遺存する柱根の放射性炭素(<sup>14</sup>C)年代測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に業務委託。
- (3) 京都国立博物館 久保 智康氏のご教示による。
- (4) 愛知学院大学 菊澤 良祐氏の専門鑑定による。



第109図 遺構外出土遺物実測図(5)

掘立柱建物一覧表

造構名	調査区	規 模			平均柱間 (cm)	主軸方向	時 期
		桁×梁(間)	全長(m)	面積(m <sup>2</sup> )			
SB-01	A区(南半)	4×3	7.52	52.9	174	247	N-22°-E AD. 1039±38年
SB-02	A区(南半)	2×2	4.80	17.0	236	175	N-22°-E 平安時代後半
SB-03	A区(南半)	2×1	3.61	7.1	181	211	N-19°-E 平安時代後半
SB-04	A区(南半)	3×4 4×2 3×2	10.37 9.65 7.22	100.1 51.1 38.2	259 237 240	233 261 259	N-11°-E 鎌倉時代末期
SB-05	A区(南半)	2×2  2×1	4.93 4.70 4.70	23.2 21.4 9.4	253 224 234	234 234 201	N-11°-E 鎌倉時代末期
SB-06	B区(北半)	3×2	7.40	34.8	247	232	N-30°-E —
SB-07	B区(北半)	3×2	5.03	23.7	165 285	167 285	N-15°-E 鎌倉時代末期
SB-08	B区(北半)	3×2	4.78	12.1	156	119	N-14°-E AD. 1332±36年
SB-09	B区(北半)	2×2	3.89	7.8	179		N- 5°-E —
SB-10	B区(北半)	2×1	3.20	13.9	156	244	N- 6°-E 弥生時代後期?

# 出土遺物観察表

一記載事項について

挿図番号 遺構ごとの実測番号、図版番号、付国内表示番号を統一して示す。

器種 土器は形態的特長から、壺・甕・器台・鉢・杯・皿等の呼称を用い須恵器は、蓋・蓋杯・杯身・高杯・甕・鉢等の從来の呼称を用いた。部分名称の場合は( )で表示。鉄製品は形態、使用痕等の観察から、鉄刀・刀子・鉄釘の名称を用いた。石製品は形態、使用痕等の観察から、砥石・蔽石・磨石等の名称を用いた。

法量 土器……口径：① 底径：② 最大胴径：③ 器高：④をcmで示す。なお、( )は復元値。( )は推定値。ただし目安として径の残存が7分の1以下を推定値とした。

石製品・鉄製品……長さ：L 幅：W 厚さ：Tをcmで表す。( )は現存値。

形態・手法の特徴 主要部分について記述した。土器については口縁部の内外ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

①胎土 砂粒の大きさとその量を示す。

②焼成 良好(堅微)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。

陶磁器については硬質・軟質で表した。

③色調 主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(内)・(外)で表示。

陶磁器の場合は断面・施釉・露胎を(断)・(釉)・(露)で表示。

備考 朱、黒斑、煤、炭化物、初痕の有無を記載。鉄・石製品は重量を記載。( )は現存値。陶磁器は產地を記載。

遺物登録番号 出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

—遺物実測図中における表示—

須恵器：黒塗り 土器回転糸切り：○ 陶磁器：□

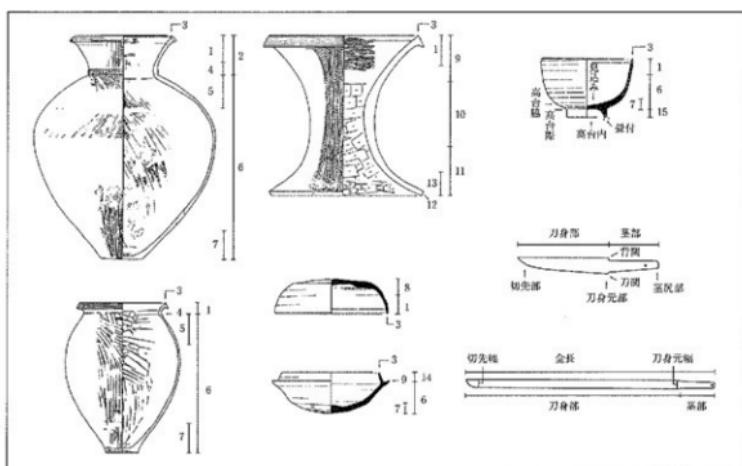
その他 煤付着部分、粘土、目釘、通紐部分：△ 土器実測図のヨコナデ調整による移：---

遺物使用痕範囲：→ 石製品実測図摩滅範囲：→ 陶磁器釉の範囲：-----→

—土器の部分名称について— 部分名称を略す場合は頭文字を( )で表示。

1：口縁部 2：口頸部 3：口縁端部 4：頸部 5：肩部 6：体部 7：底部 8：天井部

9：受部 10：筒部 11：脚(台)部 12：脚(台)端部 13：裾部 14：立上がり 15：高台部



土器・鉄製品細部名称図

## 本高円ノ前遺跡

### SB-04(第17図)

辨認番号	器種	法量(cm) 径深 ①口 ②底 ③底部横 ④厚	形態・手法の特徴	①鉛 ②焼成 ③色 ④表面	残存状況	備考	遺物登録番号
1	土師器杯	①(14.1)	口縁部は外側して開き底部で丸く納める。(内外)ヨコナダ。(内)底部糸引き底。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)褐色 (内)暗褐色	1/6		81
2	須恵器	つまみ2.1	つまみは扁平。(内外)ヨコナダ。(外)つまみ財物後腹部をヨコナダ。(内)ナダ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	つまみ完存 (外)一部		116

### SB-10(第25図)

1	土師器皿	①(17.6)	くの字狀口縁。口縁部は外側で底部で丸く納める。	(外)口縁部ハケ日後所ナダ。底部ハケ口。(内)口縁部横折後ハケ日後所くナダ。頭部ナダ。底部ヘアリ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(外)褐色 (内)暗褐色	(口)1/6 (底)1/15	黒底有 焼成化物付着	226
---	------	---------	-------------------------	---	---------------------------------------	-------------------	---------------	-----

### SK-01(第28図)

1	陶器接鉢	①(28.6)	口縁部は外側して開き底部で外側に肥厚させ下方に棱をつくる。上端は凸面とする。	(外)口縁部ヨコナダ。(内)体部充実する物語目。後口縁部ヨコナダ。(内)口縁部施鉢。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや軟質 ③(外)褐色 (内)赤褐色	(口)1/15	炭化物付着	2
---	------	---------	--	--	---	---------	-------	---

### SK-02(第30図)

1	瓦質鉢	①(20.3)	受け口状の口縁部。	(外)口縁部指成形後ナダ。(内)体部ナダ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③褐色	(口)一部		1
2	陶器 (底盤)	②(18.3)		(外)体部ナダ。底部ハケ目皿。底面工具ナダ。(内)体部ハケ目皿後ナダ。底部粗なナダ。工具痕。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや軟質 ③(外)赤褐色 (内)赤褐色	(底)1/6		1
3	陶器接鉢	①(29.6)	口縁部は外側して開き底部で上下に肥厚して曲をもつ。	(外)口縁部下部横方向へのナダ。体部粗なヨコナダ後8条の原位の物語目。(内)ヨコナダ後8条の原位の物語目。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③(外)赤褐色 (内)褐色	(口)1/12		2
4	青磁碗	①(13.3)	口縁部は内面気味に立ち上がり端部で丸く納める。	(外)ヨコナダ後斜後放性。(内)ヨコナダ後斜後放性。(外)口縁部割れた青文。	①濃密 ②軟質 ③(外)褐色 (内)オリーブ灰色	(口)1/12	貫入有	4
5	土鍋	L 2.6 W 0.8 T 0.8	円筒状。	指成形後ナダ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③褐色	完存	1.6g	1
6	木製品 漆器	①(15.4) ②7.6 ③6.6	口縁部は内面気味に立ち上がり端部は丸い。	(外)丸き真型後黒漆塗布。(内)柄部4方向に漆線にて茶葉文。		(口)1/4 (底)1	絹目材 広葉樹	6

### SK-05(第33図)

1	須恵器鉢	①(32.0)	口縁部は外側し底部で内側に肥厚、裏面をもつ。	(外)体部ナダ。成形時の箇所压痕。(内)体積横方向の工具ナダ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む、2mmの砂粒有 ②不良 ③褐色	(口)1/12 (底)1		1
---	------	---------	------------------------	---------------------------------	--	-----------------	--	---

SK-06(第35図)

種別 番号	器種	法量(cm) ○口 ○底 ○側 ○大頭部 ○部	形態・手法の特徴	①始 ②進 ③成 ④固	残存状況	備考	遺物 登録 番号	
1	陶器 天目碗	①(12.1)	天目茶碗。 口縁部は直線的に開き底部は傾く。	(内外) 種類により調査不明解。 (外) 底部へラ削り。釉造り有。	①特徴 ②直底質 ③(底) 露葉灰褐色 (底) 黒と褐色が範囲方向に斑、木目風	(口) 1/4	貢入無	3
2	陶器碗	①(15.8)	口縁部は外傾し底部で腰る。	(内外) ヨコナダ後施釉。 (外) 底部へラ削り。	④頬質 ②やや紫質 ③(底) 黄灰褐色 (底) 明灰褐色 (底) 棕色	(口) 1/13 (底) 1/8	貢入有	3
3	陶器抹茶	①(22.6) ②(11.4) ③(2.1)	口縁部は外傾し底部で腰厚、 内上方向へつまみ出す。 底部は平底。	(内外) ヨコナダ。 (外) 口縁一部、底盤へラ削り。体一部ナダ。 底盤は露底。底部は斜面仕様。 (内) 体部と底盤は露底目を散射状態に 隠すが使用頻度重く塗減する。 底盤ナダ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ④4~7mmの砂粒有 ②やや秋質 ③(底) 露褐色 (底) 露褐色 棕色	(口) 1/12 (底) 1/6 (底) 1/5		36
4	白磁钵	①(17.2)	口縁部は外反し縁部は丸い。 内上方向へつまみ出す。	(内外) 施釉。 (外) 底盤へラ削り。 (内) ヨコナダ。	①精緻 ②硬質 ③(底) 灰色 (底) 灰白色 (底) 1/9	(口) 1/19 (底) 1/9	貢入無	6
5	青磁 (高台部)	①(6.0)	削り出し高台。 牌部は直下に下る。		①緻密 0.5mmの砂粒を含む ②種質 ③(底) 明褐色 (底) 灰色 (底) 淡灰色	(底) 1/2	貢入有	2
6	須恵器 把手			手捻ね成形後ナダ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ④5mm以上砂粒有 ②良好 ③灰色			3
7	土器	L 2.5 W 0.8 T 0.7	円筒状。	ナダ。	①0.5mmの砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	完存	1.5g	6

SK-08(第38図)

1	土器器皿	①(7.2) ②4.3 ③(2.3)	口縁部は外傾し底部は丸い。 内上方向へつまみ出す。 底部は平底。	(内外) ヨコナダ。 (外) 底盤ナダ。 (内) 体部ナダ。	①精緻 1.5mmの砂粒有 ②良 ③棕褐色	(口) 1/6 (底) 1/2	黒斑有	3
2	陶器 (高台部)	②(3.2)	削り出し高台。	(外) 底盤へラ削り後施釉経状のハケ目。 高台部ヨコナダ。 (内) 体部ヨコナダ? 後施釉。高台部へラ削り。高台中央に焼巾が残る。	①精緻 1mm以下の砂粒有 ②良 ③(底) 黄褐色 (底) 灰白色		貢入有	3
3	白磁			(内外) 体部ヨコナダ後施釉。	①精緻 ②硬質 ③(底) 灰白色		貢入無	3

SK-09(第39図)

1	瓦質瓶	①(27.6)	受け口状の口縁部。 体部は内下方へドリ底部で屈曲する。	(内外) 体部形成形状ナダ。 (内) 体部ハゲ目後底部不明のナダ。	①1mm以下の砂粒を含む ④5~7mmの砂粒有 ②良 ③(外) 建灰褐色 (内) 灰白色	(口) 2/5	多く付着	10
2	陶器 (口縁部)	①(6.6)	口縁部は外傾し縁部は上方へ丸く傾める。	(内外) ヨコナダ後自然隠。 (外) 口縁一部に釉剥り。	①細質 ②現質 ③(底) 黑褐色灰褐色 (底) オリーブ灰褐色 (底) 灰色	(口) 1/3		1
3	陶器 (底盤)	②(15.7)	上げ底部の底盤。	(内外) ヨコナダ。 (外) 体部下部へラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む ④2~4mmの砂粒有 ②やや秋質 ③(外) にぶい赤褐色 (底) 黒灰色 (内) にぶい赤褐色	(底) 1/6		11
4	木製品 漆器筒	① 細 大 ②(13.8) ③6.6 ④5.9		黒化著しく変形する。 内外面洗拭調整後墨微痕有。外面杯部、内面底部に釉部にて墨積するが表面多く不規則。		(口) 1/4 (底) 3/4	細目材 広葉樹 全体並	13

傳因 番号	器 様	法量(cm) ①口 ②縦 ③横 ④大頭部 ⑤小頭部 ⑥高	形态・手法の特徴	①始 ②続 ③成 ④調	残存状況	備 考	遺物 登録 番号
5	木製品 漆器 横	①(16.8) ②(7.8) ③(4.2)	口縫部は外反し端部は丸い。 内外面刷毛調整後墨漆徹布。高台内は墨染し。 残存部外側杯底、内部底部に朱漆筆描きの五重輪心円文。		(口)一部 (底)1/2	延日材 広葉樹	2
6	木製品 漆器 具下 箱	L 18.7 W 9.5 T 1.9	上面形は圓滑丸みをもつ形。 鼻緒孔3は背面穿孔。方形孔4は片面穿孔。 裏面は各種に垂直な2条の溝を削り、工具先端0.9cmの使用により方形孔をつくり表面を起伏させたと思われる。 表面、前面及び裏面両端部は刀による調整。 鼻緒孔径1.1~1.7cm。方形孔1.0~1.6cm。		完存	板目材 針葉樹	7
7	木製品 漆器 具下 箱	L 9.3 W 13.9 T 2.0	上部2ヶ所を方形状に削り出し片面に下脚を組み込んで使用した痕跡が残る。 接地面は使用頻度が高く削りに擦り減る。左右両側面は面取り成形。		完存	6と一様に 出土しているが僅量なし	7

SK-10(第43・45図)

1	土器容器	①(7.6) ②(5.8) ③(1.7)	口縫部は底面から外傾しで開き端部は丸い。 平底。	①(内)ヨコナダ。 (外)底部不明瞭。糸切りか? 平底。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)棕褐色 (内)ぶい緑色	(口)1/7 (底)1/4		8
2	土器容器	①(12.8) ②(6.8) ③(3.8)	口縫部は底面から外傾し端部は鋸歯状である。 平底。	(内)ヨコナダ。 (外)底部墨脱糸切り後接地外縫ナダ。 (内)底部鋸歯状ナダ。	①稍糊 ②良 ③棕褐色	(口)1/6 (底)2/3		8
3	瓦質羽釜	①(25.4)	口縫部は内側して上方に約め縁幅をもつ。 内側は柱状に盛る。	(外)体部ナダ。 底形の指揮板が底に残る。底部ナダ。 口縫部は圓形ハケ月後ヨコナダ。 (内)口縫部横ハケ月後ヨコナダ。体部 底部不明の丁寧なナダ。	①0.5mm前後の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③(外)乳白色 (内)淡灰色	(口)1/5 (底)1/4 (底)1/5	無多く付着 異化物付着	5
4	瓦 質 瓶	①(29.0)	口縫部は外反して開き端部に側をもつ。	(外)肩部ヨリ目後頭部ヨコナダ。 (内)瓶頭部ハケ状工具によるナダ。肩部 ヨコナダ。体部ナダ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(外)白色 淡灰色 (内)暗灰色	(口)1/21 (底)1/7		7
5	木製品 漆器 具下 箱	L 23.7 W 11.3 T (2.8)	両端部丸みをもつ円柱状。 中央部に大横木をもつ。 鼻緒孔3は背面穿孔。	表面の右尾端部分が凹み使用頻度が高い。 裏面に長軸に垂直な2条の溝を削り出し調節する。 鼻緒孔径1.0~1.7cm。		(表面)欠 針葉樹		1
6	木製品 底 板	L 30.0 W 18.5 T 0.3	平面の2角は開えを呈し 一側部は割れ欠失。	黒化して経剥れがある。 両面に掌状調節。使用痕残る。3個辺の中央に小孔2を一組とする環孔の可能性。二組に初期痕が一重に残る。			絆目材 広葉樹	3

SK-11(第46図)

1	土器容器	①(17.6)	口縫部は外傾し端部は丸い。	(外)頭部ヨコナダ。肩部保付造により不明瞭。体部斜削ハケ目。 (内)頭部はハケ目後口縫部ヨコナダ。 体部ヘラ削り後体部ナダ。指揮板有。	①1~2mmの砂粒を多く含む 4mmの砂粒有 ②良 ③棕褐色 棕色	(口)1/9 (底)1/6	無多く付着	1
2	楕 慈 器 (口縫部)	①(13.9)	口縫部は外傾し端部は丸い。	(外)ヨコナダ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ②良 深灰色	(口)1/6		1
3	天目茶碗 (底 部)	③(3.5)	削り出し高台。	ヨコナダ底内面施釉。 外側一面に釉溜り有。	①褐色②やや赤質 ③(外)淡黄灰色 (内)黑色 茶褐色 (底)棕褐色	(底) 1 貢入有		1

SK-12(第49図)

押出番号	器種	法量(cm) ①L ②W ③T ④大削径 ⑤高さ	形態・手法の特徴	①断 ②上 ③底 ④底 ⑤側 ⑥側	残存状況	参考	遺物 登録 番号
1	取瓶	Q7.7 Q2.7	(外)手捏ね成形後ナデ。 (内)金属溶融物付着により不明瞭。	①1mm前後の砂粒を含む ②良 ③底褐色	ほぼ完形	金属溶融物 付着	1
7	木製品 容器底板	L 21.1 W 15.0 T 1.4	平面形はW字型。 2角は角を丸める。 両面丁寧な調整。使用痕が残る。 側面に小孔2を一直線とする。		完存	底面財 封蓋附	6

SK-13(第50図)

1	瓦質鏡	Q(23.4)	受け口状の口縁部。 底部に凹面をもつ。	(外)口縁部成形後ナデ。 (内)口縁部ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く 含む ②良 ③(外)底灰色(内) 灰白色	(E) 1/24		2
2	土師器 把手			指成形後ナデ。	①1~2mmの砂粒を多く 含む ②良 ③底色	1		2
3	白磁 (底) (側) (縁)	Q4.4	削り出し高台。	(内外)ヨコナデ後旋錐。 (外)高台脇に1条の回輪。 (内)1条の回輪。	①緻密 ②粗質 ③(底)(側)(縁)灰白色	(底) 1 貫入無		2

SK-14(第51図)

1	瓦質鏡	Q(27.0)	受け口状の口縁部。 底部に凹面をもつ。	(外)底部成形後ナデ。 (内)体感ハケ状工具によるナデ。	①1mm以下砂粒を多く 含む ②良好 ③(外)底灰色 (内)淡灰色	(E) 1/9	多く付着	2
2	瓦質鏡	Q(22.3)	受け口状の口縁部。 口縁部は外方へ大きく張り出し底部に凹面をもつ。	(外)口縁部ハサ目鉛。頭部ナデ、指 印鉛痕後ハサ目鉛。体感成形成形 ナデ。指印鉛痕が帶状に残る。 (内)体感底部不明の工具のナデ。	①0.5mm以下の砂粒を多 く含む 3~6mmの砂粒有 ②やや不良 ③(外)底灰色 灰褐色 (内)底灰色 淡灰色	(E) 1/7 (体) 1/9	強・炭化物 付着	2 4
3	吉縫 (口縁部)	Q(11.9)	口縁部は外方へ張り出し底部は凸 状。	(内外)ヨコナデ後旋錐。	①緻密 ②粗質 ③(底)灰白色 (側)明褐色	(E) 1/13	貫入無	2
4	木製品 容器底板	外L 14.1 T 0.7 0.25	平面形は円形。 側縁部不均等な4方向に刃跡孔。	1箇刀削旋錐。 側縁部不均等な4方向に刃跡孔。		完存	様式材 底面 誰使用 か?	1

SK-17(第60図)

1	陶器鉢	Q(32.0)	口縁部は外傾して開き縁 部に凸面をもつ。	(外)口縁端面に1条の沈線後ヨコナ デ。 (内)ヨコナデ後口縁部ナデ。	①1mm以下砂粒を多く 含む 4mmの砂粒有 ②やや粗質 ③(底)灰褐色 (側)黒褐色	(E) 1/9		1
---	-----	---------	-------------------------	---	--	---------	--	---

SK-18(第63図)

1	瓦輪塔 (空風輪)	L 15.5 W 13.5 T 10.4		中央を横板に成形し空・臥輪とする。 風輪下位は台形状凹溝に成形して火輪 に適合し易くする。	④物色	完存	2,805g	2
2	陶器 軒瓦	L (7.0) W (12.3) T (3.8)		柔軟を入れ瓦面を接合後焼結。	①焼成1mm前後の砂粒有 ②良 ③(底)褐色 (側)灰褐色 色にぶい黄褐色 (側)茶褐色			1

## SK-19(第66図)

標識番号	器種	法寸(cm) ①縦 ②横 ③最大割径 ④高	態様・手法の特徴	①始 ②終 ③色	残存状況	解 考	遺物 登録 番号
1	土 釜	L (4.2) W 1.8 T 1.7	輪鉋形状。 折成形後ナダ。	①O.Gun後の跡紋を多く含む ②真 ③淡褐色	ほぼ完存	赤彩 8.9g	3

## SK-20(第64図)

1	木製品 容器蓋	L (6.3) W 6.9 T 1.2	平面円形状。 上面中央部は丸く盛り上がる。	周縁部は丁寧な面取り成形。 表面細部に沿って断面直角に削り落す。	輪鉋一部欠	板目材 舟葉筋	1
---	------------	---------------------------	--------------------------	-------------------------------------	-------	------------	---

## SK-23(第65図)

1	瓦質体	◎(34.2)	口縁部は外側して閉き端部に面をもつ。	(外)口縁溝間ハケ日後ヨコナダ。粗なヨコナダ。下半指印压痕。ナデ。刷毛の動きが残る。 (内)口縁部底座不明のナダ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡灰色 褐灰色	1/13		1
---	-----	---------	--------------------	--	-------------------------------------	------	--	---

## SK-24(第67図)

1	陶器 (底部)	◎(18.4)	平底。	(外)体部粗なヨコナダ。後縫合方向の粗なナダ。成形時の余張がかかるに残る。底盤砂の動きが残る。底面粗なナダ。 (内)体部底座不明工具による粗なヨコナダ後斜位ナダ。底部後ナダがしっかり残る。工具痕あり。	①1mm以下の砂粒を多く含む 6~9mmの砂粒有 ②やや不良 ③褐色 (底) 淡褐色	3/8	自然釉	1
---	------------	---------	-----	---	---	-----	-----	---

## SK-26(第69・70図)

1	土器 煙明皿	◎(7.0) ◎(4.0) ◎1.8	口縁部は底部から外傾して開き端部は組る。	(内)外)ヨコナダ後底面ナダ。 (外)底面帯止赤切り後外周一部をナダ。	①0.5mm以下の砂粒を含む 1~2mmの砂粒有 ②やや不良 ③褐色 (底) 淡褐色	1/3	焼付着	1
2	青磁 (底)	◎(5.9)	削り出し高台。	(内外)ヨコナダ後施釉。 (外)高台疊付けヘラ削り。	①粗吸 ②吸質 ③底)从白色 淡褐色 (底)オリーブ灰褐色 (底)淡褐色	1/2	質入有	1
3	青 磁 (高台部)	◎(6.2)		(内外)ヨコナダ後施釉後高台内部の日 暮剥ぎ。	①粗吸 ②吸質 ③底)灰褐色 (底)オリーブ灰褐色 (底)淡褐色	(底)ほぼ1	質入有 焼成不十分	4
4	磁 石	L (4.8) W 3.6 T 2.2		一端は自然剥、他還削れ。 長範4面に研ぎ痕。	③オリーブ灰褐色	一部	66g	3
5	磨 石	L 12.2 W 10.3 T 8.0		自然石の1面に研ぎ痕。	④淡白色	完存	1,375g	3
6	木製品 容器蓋 漆 片	L 28.2 W (1.0) D 直径 0.3	平面は円形の可能性。	質面削位の剥り。		1/2	板目材 舟葉筋	5
7	木製品 漆 片	L 18.1 W 10.6 T 0.8		丸孔部を倒り抜き内外面刀調整痕、内 面は年輪突出部を削る。		無被1		5
8	木製品 漆 片	◎(15.8) ◎(7.7) ◎7.9	口縁部は外傾して端部で削 る。	内外面削き調整後墨塗付。高台内側 なし。後赤津にて山野風痕を捺す。 外面は、風痕を継り返して2箇所。 内面杯底部は中心に木の固縁は不明瞭ながら風痕か?		(底) 1 / 3 (底) 1	板目材 舟葉筋 全体空	6 7

SK-29(第75図)

種類 番号	器種	法量(cm) ①縦 ②横 ③高さ ④太幅 ⑤厚さ ⑥孔径	形態・手法の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
1	木製品 箱	上 縦 径 17.1×13.6 下 縦 径 15.0×11.0 高さ 8.0 厚さ 1.2 目詰径 (大)0.4 (小)0.2	縁は斜角の直取成形。 長辺の側面内側の両端に溝を設け、対辺の側面をはめ込み使用。側板の4箇と底部分に目詰が残る。 長辺の側板一枚に方彫孔、相対する側板内に方形状を割り出し棒状の柄を差し込んで使用したことと思われる。	側板 3	板目材 骨董品	1 3	

SK-30(第81図)

1	土器器皿	①7.3 ②径大5.1 高さ4.9 ③1.4	口縁部は外削し縁部は崩れる。 平底。	①(内)ヨコナダ。 ②(外)底部切端条切り。 ③(内)底部一部ナダ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③暗褐色	(口)1/2 (底)1		10
2	瓦質鏡		受け口状の口縁部。丸部に凹面をもつ。	(外)口縁端面傾ハケ目底。体部指成形後ナダ。 (内)頭部横ハケ目底体部ナダ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)淡灰色 (外)灰白色	無付着		4
3	瓦質羽釜	①(23.8)	口縁部は内削して上方に鋸め凹面をもつ。 鶴は横状に造る。	(外)体部ナダ。成形時の指成形痕が残状に残る。 口縁部に鋸面付後ヨコナダ。 (内)口縁部原体不分明のナダ後ナダ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)淡灰色	(口)1/8 (底)1/6	無付着	4
4	瓦質窓	①(35.5)	口縁部は外削し指成形で肥厚して丸く納める。	(外)口縁端部ナダ。口縁端ハケ目底後ヨコナダにより成る。 (内)体部ナダ。第一輪ハケ目。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②良好 ③(内)暗灰色 (外)灰白色	(口)1/7 (底)1/7	瓦質吸着	1 5
6	木製品 容器	L 31.4 W (8.4) T 9.6 孔径 0.1×0.4 0.1×0.5	平面形は半円状。	楕化して縱割れする。画面に斜位の多糸痕。 上縁部切端。	無	1/2	板目材 広葉樹	8

SK-31(第6図)

1	陶文土器 鉢	①(21.5)	口縁部はほぼ直立し縁部で外方へつまみだす。	(内)ヘラ状工具によるナダ。 (外)口縁端部に附付痕、ナダ後削み目。	①1mm前後の砂粒を多く含む 2.5mmの砂粒有 ②良 ③(内)淡褐色 (外)暗褐色 淡褐色	(口)1/6 (底)1/10	無付着	1 2
2	陶生土器 (L1経年)	①(13.6)		(内)ヨコナダ。 (外)口縁端面3条の凹縁後ヨコナダ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 4mmの砂粒有 ②良 ③(内)黄褐色 (外)棕褐色	1/8		1

SK-32(第7図)

1	陶生土器 壺	①(13.2) ②24.8	口縁部はよく外削し縁部で肥厚して面をもつ。	(外)体部ハケ目後下半ヘラ削き。 (内)頭部剥落不明瞭。縁部ハケ目。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(内)黄褐色(外)棕褐色	(口)1/7 (底)1/7	無付着	1
---	-----------	------------------	-----------------------	---------------------------------------	---------------------------------------	------------------	-----	---

## SK-35(第82図)

拂国 番号	器種	法量(cm) ①長 ②幅 ③最大側径 ④厚	形態・手法の特徴	①船 ②焼 ③成 調	残存状況	備考	遺物 登録 番号
1	製陶土器	①7.4 ②33.5 ③6.4	口縁部は外傾して立ち上がり通部は丸い。 (外)指成形後ナデ。工具痕。(内)ヘラ削り後僅いナデ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③決擦褐色	(口)2/3 (底)1		4
2	積 惠 器 杯 身	①(12.4) ②(14.8)	立ち上がりは内傾し通部は丸い。 (内外)ヨコナデ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰色 (底)セピア色	(口)1/8 (受)1/6		4

## SK-40(第86図)

1	積 惠 器 身	①(11.2) ②(13.8)	立ち上がりは内傾気味に直立し底部は丸い。 (内外)ヨコナデ。 (外)体部に2条の沈痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰色	(口)1/8 (受)1/7		38
---	------------	--------------------	---	------------------------------	------------------	--	----

## SD-03(第90図)

1	土器部器	①(20.6)	口縁部は外傾して開き底部は丸い。 (外)指部ハケ目後口縁部ナデ。 (内)ハケ目。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③灰褐色	(口)1/6	瓶付壺	1
2	土 瓶	L 4.1 W 1.0 T 1.0	口型。  指成形後ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②2mmの砂粒有 ③良 ④黄褐色	完存	3.4g	1
3	土 瓶	L 3.9 W 1.0 T 0.9	瓶化著しい。 粘土の毛付方向が確認される。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②2mmの砂粒有 ③やや不良 ④板色 黄褐色	完存	2.7g	1
4	土 瓶	L 3.5 W 1.0 T 0.9	指成形後ナデ。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	完存	2.4g	1
5	土 瓶	L 1.8 W 1.1 T 1.1	依然。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	完存	2.2g	1

## SD-06(第91図)

1	青 磁 瓷	①6.4	削り出し高台。	(内外)ヨコナデ複数削り施跡。 (外)底部ハク削り。縫隙有。 (内)底部に花文。高台内中央に突山有。	①1mm以下の砂粒を含む ②焼質(底部軟質) ③(底)灰色 (和)緑色 (底)黄褐色	(底)2/3		2
---	-------	------	---------	--	---	--------	--	---

## SD-07(第92図)

1	粗 石	L 17.3 W 5.7 T 4.5		長脚4面に鋸ぎ歯。一面は使用頻度が高く凹凸となる。	③淡灰色	完存	532g	2
---	-----	--------------------------	--	---------------------------	------	----	------	---

## SD-08(第93図)

1	須 痘 壱			(外)指部平行叩き目後底部上半ヨコナデ。 (内)頬部ナデ。工具痕。残存部下半ハケ目。後のヨコナデにより消えかかる。	①1~2mmの砂粒を含む ②良 ③底白色 灰色	(測)1/7		3
---	-------	--	--	--	-------------------------------	--------	--	---

SD-13(第94図)

特徴番号	器種	法量(cm) □口 ○底 △側 ◎大崩 ●等	形態・手法の特徴	①幼土 ②燒成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
1	吉縄鏡	②(6.6)	(内外)ココナガ後施塗装施。 (外)高台内鉢の柱脚部。高台脇に2重圓錐。 (内)見込みに一重圓錐、花文?を施す。	①微質②硬質 ③(断)白色 (輪)緑色 (底)にぶい緑色 極色	(底)1/3		1

SD-17(第97図)

1	陶器 口縁部	①(13.2)	口縁部は外反し端部は丸い。 (内外)ヨコナガ後施塗。	①1mm前後の移粒を多く含む ②硬質 ③(断)灰色 (輪)内青褐色 (外)暗褐色	1/8		1
---	-----------	---------	-------------------------------	---	-----	--	---

SD-21(第95図)

1	陶器 天目碗	①(13.5) ④N.2 ⑥.5	口縁部は外傾して間き縫部で上方へ丸く納める。 底部は平底。	(内外)ヨコナガ後施塗。 (外)底部端部へラ切り。釉面有。	①精緻2~3mmの移粒を含む ②軟質 ③(断)灰褐色 (輪)黒色 口縁部近黒と茶の斑、木目風 (底)褐色	(口)1/4 (底)1		3
2	陶器 盆	①(13.5)	口縁部は外傾し端部で肥厚して丸く納める。	(内外)ヨコナダ。 (外)施塗。 (内)焦蒸ナダ。口縁一部削られ。	①1mm前後の移粒を含む ②やや軟質 ③(断)灰褐色 (輪)暗褐色 (底)内オーピーブ 灰褐色 (外)赤褐色	(口)1/11		1
3	吉縄 (高台部)	②6.4		(内外)ヨコナガ後施塗。 (内)高台内鉢の柱脚部。	①幼土 ②硬質 ③(断)白色 (輪)緑色 (底)青褐色	2/3	買入有	1

SD-22(第99図)

1	磁器 象付瓶	①(14.6) ②(9.2) ③3.4	口縁部は外傾し端部は丸い。 薄り出し高台。	(内外)ヨコナダ。染付け後施塗。 (内)口縁端部と底部にそれ程2重圓錐、間に溝と鳥文、斜格子に花文を染め付ける。見込み象部分に移跡1を認察。高台内鉢の柱脚部。	①噴出 ②硬質 ③(断)白色 (輪)無色透明(淡緑かかる) (底)白色	1/3		1
2	陶器 皿	①(11.6) ②(5.4) ③2.6	口縁部は内済気味に立ち上がり端部で上方へ丸く納める。 削り出し高台。	(内外)ヨコナダ後施塗。 (外)底部へラ切り。 (内)見込み残存部に移跡1を認察。	①噴出 ②硬質 ③(断)灰褐色(輪)緑色 (底)茶褐色	(口)1/9 (底)1/4	見込みに妙目路	2

SD-25(第100図)

1	陶器 蓋	L (6.0) W (3.4) T 0.7 つまみ 1.2	根付のつまみ。	上面持ち手部貼付、側縫部ヨコナガ後施塗。下面周縫部ハケ状工具による固密するナダ後中央ナダ。	①精緻 ②軟質 ③(断)黄褐色 (輪)褐色	2/5		2
2	土師器 丸	L (5.2) W (7.6) T 2.4		剥落不明顯。 (外)押き目?	①1mm以下の移粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	一部		4

SD-32(第10図)

1	弥生土器 壺	①(16.1)	縫上口縁。 口縁部は外傾し縫部下方に肥厚させをもつ。	(外)口縁部ヨコナダ後施塗に3条の凹部を延らす。底部ナダ。 (内)口縁部ハケ後底ナダ。	①1mm前後の移粒を多く含む ②やや小良 ③淡褐色	(口)1/8		2
2	弥生土器 壺	①(22.1)	縫上口縁。 口縁部は質く外傾し縫部で肥厚して面をもつ。	(外)口縁部に3条の凹部。後口縁部ヨコナダにより凹部消えかかる。 (内)剥落不明顯。	①1mm前後の移粒を多く含む ②やや良 ③淡橙褐色	(口)1/9 津付窓		2

## SD-34(第11・12図)

押抜 番号	器種	法量(cm) ①口 ②底 ③最大横径 ④厚	形態・手法の特徴	①新 ②既成 ③色調	既存状況	備考	追加登録番号	
1	土器鉢	①(13.5)	口縁部は内済して立ち上がり表面をもつ。 (外)ヘラ磨き。 (内)ナデ。ヘラ磨き面。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	(口)1/10 (底)1/12		35	
2	弥生土器 甌	①(23.6)	縦上口縁。 口縁部は外傾して聞き端部で肥厚、下方に棱をつまむ。 底部をもつ。	(外)口縁裏面に3条の凹線鋸けいヨコナダ。口縁部ハケ目後ナデ。 (内)ヘラ磨き。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(内)淡褐色 淡黄褐色 (外)淡褐色	(口)1/5	50	
3	弥生土器 甌	①(11.6)	縦上口縁。 口縁部は外傾し端部で肥厚、下方に棱をつまむ。 底部をもつ。	内外面に筋分がしっかり付着して不明瞭部分が多い。 (外)口縁裏面に凹線を3~4周開きせる。底部へラ磨き。 (内)底部に無数の工具痕。ヘラ磨き?。肩部へラ削り後工具ナダ。成形時の正直。	①2mm以下の砂粒を多く含む ③(内)淡褐色 淡褐色 ②やや不良 ③淡褐色 暗褐色	(口)3/5	12 15	
4	弥生土器 甌	①(14.0)		風化剥離不明瞭。 (外)口縁裏面に3条の凹線。底部指頭圧痕。体部多段状の成形痕。横ハケ目後ハケナリ。 (内)底部へラ削り後工具ナダ。頭部指頭ナダ。指頭压痕が留着に残る。	①1~2mmの砂粒を多く含む 4.5mmの砂粒有 ②やや不良 ③暗褐色 灰褐色	(口)1/4 (底)1/2	黑斑有 灰化物付着	4
5	弥生土器 (崩壊)			(外)ヘラ磨き後残存部に竹葉文2を観察。 (内)ナデ。成形時の指頭圧痕、棱り目が残る。	①1~2mmの砂粒を多く含む 4mmの砂粒有 ②やや不良 ③(内)暗褐色 (外)黒色	1/5	鉄分付着	13
6	弥生土器 甌	①(15.0) ②(5.7) ③(20.1) ④(26.5)	縦上口縁。 口縁部は軽く外傾し底部で肥厚、下方に棱をつまむ。 底部は中位に最大径をもつ。 底部は平坦。	(外)口縁裏面に3条の凹線。体部ハケ目後底部輕いヨコナダ。底部ナリ。底部ナリ。底部ナリ。工具痕。底部ナリ。 (内)体部へラ削り後堅い工具ナダ。頭部、底部ナリ。	①1~2mmの砂粒を多く含む 3.5~5mmの砂粒有 ②良 ③(外)暗褐色 暗褐色 暗褐色 (外)暗褐色 灰褐色 淡褐色 暗褐色	(口)5/8 (底)1/4 (底)1/2 (底)1	黒・灰化物付着	5 6 13 16 ~ 19 28 52
7	弥生土器 甌	①(14.5) 最大14.9 ②(7) ③(6.7) ④(25.3)		(外)口縁裏面に3条の凹線。体部ハケ目後底部輕いヨコナダ。底部ナリ。底部ナリ。成形時の指頭圧痕。底部半横方向へのハラ削り、下半段方向へのヘラ削り後軽くナダ。底部ナリ。	①2~3mmの砂粒を多く含む 4~6mmの砂粒有 ②良 ③暗褐色 黑色 灰褐色	ほぼ完形	薄多く付着 灰化物付着 口縫壁	30
8	弥生土器 甌	①(13.7) ②(16.5)	縦上口縁。 口縁部は軽く外傾し底部で肥厚して底部をもつ。	風化剥離著しい。 口縁部は軽く外傾し底部で肥厚して底部をもつ。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②良 ③淡褐色 淡褐色 淡褐色	(口)1/2 (底)1/2	剥付着	29 31 37
9	弥生土器 甌	①(13.2) ②(13.3)		風化剥離著しい。 (外)頭部ハケ目。体部後ハケ目後へラ磨き。頭部成形時の指頭圧痕。 (内)体部上半左方向のハラ削り、下半上方方向のヘラ削り後のナダ。底部ナダ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(外)淡褐色 乳灰色 (外)灰褐色 暗褐色	(口)1/4 (底)1/4	黒斑有 多く付着	35
10	弥生土器 甌	①(13.9)		風化剥離著しい。 (外)口縁裏面に2条の凹線痕。底部ヨナダ。底部へラ磨き痕。 (内)頭部工具ナダ後へラ磨き。体部へラ削り。	①2mm前後の砂粒を多く含む 3~4mmの砂粒有 ②良 ③(内)淡褐色 (外)過度色 橙褐色	(口)1/2	黒斑有 剥付着	6 18

種別 番号	算 種	法波(cm) ①口 ②縦 ③横 ④深さ ⑤大耕 ⑥厚	形態・手法の特徴	①船 上 ②焼 成 ③色 調	残存状況	備 考	遺物 登録 番号	
11	弥生土器 茎	①(12.4 ②(14.5	風化剥落若い。 (外)口縁裏面に3条の凹線。体部ハケ 目後上位ナデ。頭部ヨコナデ。 (内)頭部ハケ目後頭部ヨコナデ。頭 部ナデ。体部ヘラ削り後頭くナ デ。	①2 m前後の砂粒を多く 含む ②良 ③(内)穀色 淡緑色灰褐色 (外)穀色 淡褐色 増 褐色	(口) 1/2 (肩) 1/2	黒斑有 褐・洪化物 付着	45 48	
12	弥生土器 茎	①(16.0 ②(19.0	縫上口厚。 口縁部は粗く外傾し縁部 で肥厚、下方に縫をつま む。	①(外)口縁裏面に3条の凹線後上位2条 をヨコナデ。体部ハケ目。後頭部 へラ削き接転いヨコナデ。体部下 半幅へラ削き。ハケ状工具による 通透剝災。 (内)頭部ハケ目後ヘラ削き。体部ヘラ 削り後ヘラ削き。後にナデ、上位 に成形時の圧痕。	①1 m前後の砂粒を多く 含む ②良 ③(内)淡褐色 淡灰色 (外)淡褐色 黄褐色 暗褐色	(口) 1/2 (体) 1/4	多く付着	39
13	弥生土器 (口縁部)	①(13.4)	縫上口厚。 口縁部は粗く外傾し上端 部を欠く。	①(外)口縫部に1条の凹線。体部ハケ 目後上位カデ。後頭部ヨコナデ。 (内)頭部ナデ。体部ヘラ削り後頭ナ デ。	①0.5m以下の砂粒を多 く含む ②や不良 ③(内)淡褐色 (外)灰褐色	1/8	黒斑有	52
14	弥生土器 古付鉢	①(15.9) ②(20.4)	口縁部は内済し端部で外 方に肥厚させ上端部を欠 く。	①(外)体部ハケ目後へラ削き。 (内)体部上半幅ハケ目後頭ハケ目後 頭ナデ。	①1 m以下の砂粒を多く 含む ②良 ③(内)淡褐色 淡褐色 (外)褐色	(口) 1/11 (体) 1/6	黒斑有 朱	24
15	弥生土器 古付鉢	①(16.0) ②(8.6)	縫上口厚。 口縁部は粗く外傾し縁部 で肥厚して底をもつ。	①(外)口縫裏面3条の凹線後へラ削き。 体部工具ナデ後へラ削き。ハケ目 前。後頭部接転いヨコナデ。 (内)口縫部工具ナデ後へラ削き。体部 へラ削り。	①1 m前後の砂粒を多く 含む ②良 ③(内)淡褐色 (外)褐色	(口) 1/4 (肩) 1/4 (体) 1/8	朱 5 34 36	
16	弥生土器 縫合 鉢	②(9.6)	縫部はハの字状に開き端 面をもつ。	①(外)縫柱部ハケ目後頭ナデ。頭部ヨコナ デ、ヨコハケ目後。縫面上に2条の 凹線後削りナデ。 (内)縫柱部後縫合ナデ。頭部ヨコナ デハケ目。	①0.5m以下の砂粒を多 く含む ②良 ③(内)淡褐色 (外)乳褐色 淡褐色	1/2	朱	22
17	弥生土器 縫合 鉢	②(13.4)		①(外)ハケ目後へラ削き。工具痕。端面 に2条の凹線。 (内)へラ削り後上半幅くナデ。	①1 m以下の砂粒を多く 含む ②良 ③(内)淡褐色 灰褐色	1/4		34
18	弥生土器 縫合 鉢	②(15.6)	口縁部は大きくハの字状 に開き端部で肥厚し底を もつ。	①(外)へラ削き。縫面ナデ。 (内)へラ削り後一部へラ削き。工具 痕。	①1 ~ 2 cmの砂粒を多く 含む ②や不良 ③乳褐色灰褐色	1/5	黒斑有	31
19	手 織 ね 土 鉢	①6.2 ②5.7 ③4.0 ④4.1	上げ底の底部。	(内外)手縫ね成形後溶ナデ。	①1 m以下の砂粒を多く 含む ②や不良 ③褐色	ほぼ完形	黒斑有	2

SD-35(第13図)

1	弥生土器 茎	①(15.6)	縫上口厚。 口縁部は外傾し端部に立ち 上がり端部で上下に肥厚 し底をもつ。	(外)口縫裏面に4条の凹溝。頭部ハケ 目後所々ナデ。上半幅いナデ。 (内)頭部上半ハケ目後一部ナデ。下半 幅ナデ。 成形時の圧痕圧痕。	①2 m前後の砂粒を多く 含む ②良 ③(内)淡褐色 (外)褐色	(口) 1/6		9
2	弥生土器 茎	③(11.6)	口縫部は外傾して縫部は 底をもつ。	(外)口縫裏面ハケ目後ヨコナデ。頭部 ナデ後体部ハケ目。頭部ヘラ削 き。 (内)頭部ナデ。頭部ヘラ削り。	①2 m前後の砂粒を多く 含む ②良 ③(内)褐色 淡黃 褐色 (外)褐色	(口) 1/16 (肩) 1/5		10

博物 館 番号	器 種	法身(cm) (①上 ②底 ③大胸径 ④腰)	形態・手法の特徴	①新 ②残 ③成 調	現存状況	質 考	遺物 登録 番号
3	弥生土器 台 付 蓋	①9.5 ②8.5 ③15.7 ④13.4	複合口縫。体部算盤玉状に中位を突出させる。 複合台縫。	(外)口縫端面ハラ工具による5条の沈線。体部中央は内弧状工具による連続刻文ハバの字状に施し1段4支柱とし、1段と2、3段は支柱が交互になる。 2、3段は同一文。後上段から3余、3余、3余、1余、3余、3余のヘラ筋結継で各段を区画する。 体部中位の箇所には2重透写タング文で2段施す。 体部下位ナゲ、多屈状の成形痕。 肩台部接合後ヨコナギ。構造面ハラ工具による5条の沈線。 (内)口縫端面端部横幅、径4mmの円孔2ヶ1対を内から摩耗。2方向に観察。頭部以下ハラ削り後軽くナゲ。体部下位ヘラ磨き。	①1mm前後の砂粒を多く含む 3~4mmの砂粒有 ②やや不良 ③(内)淡乳褐色 淡灰色 (外)淡乳白色 淡灰色	(口)1/2 (口崩)1 (体)1 (脚)1/2	黒斑有 1 2
4	弥生土器 蓋	①(16.4)	くの字状口縫。 口縫部は寛く外傾し筋部は丸い。	剥落不明瞭。	①2mm以下の砂粒を多く含む 5mmの砂粒有 ②良 ③(内)淡乳白色 (外)橙褐色	(口)1/8	13
5	弥生土器 蓋	①(17.1)	複合口縫。 口縫部は短く外傾し端部で肥厚し縫をもつ。	(外)口縫端面に2条の凹段反張いヨコナギ。頭部工具痕。 (内)口縫端ハケ目後ヨコナギ。頭部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③(内)灰白色 (外)灰褐色	(口)1/5	保付有 14
6	弥生土器 蓋	①(12.8)		剥落不明瞭。	①2mm以下の砂粒を含む 3.5mmの砂粒有 ②不良 ③黄褐色	(口)1/4 (崩)1/4	保付有 17
7	弥生土器 蓋	①(19.8)		(外)口縫端面に3条の凹段。一部ヘラ磨き痕。頭部ヨコナギ後ヘラ磨き。 (内)口縫端ハケ目後ナゲ後ヘラ磨き。工具痕。頭部ヘラ削り。	①1mm前後の砂粒を多く含む 4.5mmの砂粒有 ②良 ③(内)乳白色 (外)淡乳褐色 乳灰色	(口)1/8	16
8	弥生土器 蓋	①(16.7)	複合口縫。 口縫部は直立し端部で上下に肥厚して縫をもつ。	剥落不明瞭。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③暗褐色 灰褐色	(口)1/4	保付有 11
9	弥生土器 蓋	①(16.9)	複合口縫。 口縫部はほぼ直立し端部で上下につまみ出し筋部をもつ。	(外)ヨコナギ。 (外)口縫端に4条の沈線。 (内)頭部ナギ。頭部ヘラ削り。	①1mm以下の砂粒を多く含む 2mmの砂粒有 ②やや不良 ③暗褐色	(口)1/5	保付有 13
10	弥生土器 (底 部)	②(6.4)	平底。	(外)体部ハケ目後底部ナギ。底面粗なナギ。 (内)体部ヘラ削り後所キナギ。後に底面ハケ日。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)褐色 (外)褐色 灰褐色 暗褐色	(底)1/4	保付有 15

SD-39(第101図)

1	製塼土器		口縫部は外傾し筋部で肥厚し丸く削める。	(外)成形後ナギ。 (内)工具ナギ後ナギ。	①1mm前後の砂粒を多く含む ②良 ③暗褐色	(口)一部		1
---	------	--	---------------------	--------------------------	------------------------------	-------	--	---

SD-54(第102図)

種類 番号	器種	比率(cm) 種類	形態・手法の特徴	①鉄 ②焼 ③色 調	残存状況	緒考	遺物 登録 番号
1 廉 (口縁部)	①(38.4)	口縁部は外傾し端部に面をもつ。	(内外)ヨコナダ後施鉄。 (外)底状文を2段に施す。口縁端面に施漬り有。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③灰白色	1/10		1

Pit(第103・104図)

1 P-456	土師器杯	①(8.9) ②(5.0) ④2.0	口縁部は外傾し端部は鋸る。	(内外)ヨコナダ。 (外)底面端部系切り。赤掛け灰。 (内)底部ハリ目。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	(D) 1/6		91
2 P-524	土師器杯	①(9.4) ②(4.3) ④2.2	口縁部は直線的に開き端部は丸い。	(内外)ナダ? (外)底面開鉢系切り。 (内)内折部に凹板が残る。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	12#完形		106
3 P-1269	瓦質鍋	①(25.6)	受け口状の口縁部。	(内外)口縁部横ハケ後輕くナダ。 (外)体部追加形後ナダ。成形時の指痕压痕。 (内)ハリ目。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色 灰色	(D) 1/11	埋付着	158
4 P-738	瓦質鍋	①(28.4)		風化削落著しい。 (外)体部追加形後ナダ。成形時の指痕压痕。 (内)ナダ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③やや不真 ④淡灰色	(D) 1/6 (体) 1/8	埋付着 黒斑有	132
5 P-227	製塼土器	①(13.8)	口縁部は外傾し端部で肥厚して凸面をもつ。	(内外)指成形後ナダ。 (外)口縁部成形後指面剥離。 (内)工具ナダ?	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③やや不真 ④(内)橙色 (外)淡褐色	(D) 1/20		6
6 P-796	上縁唇脚	②(3.6)		風化削落不明顯。 (外)ナダ後上唇脚ハケ目向。一部腹ハケ目。 (内)ナダ? ヨコナダ。	①0.5mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡褐色	(D) 1		151
7 P-510	白磁碗	①(17.1)	口縁部は外傾し端部は玉縁口継。	(内外)ヨコナダ後施鉄。	①細密 0.5mmの砂粒有 ②縫隙 ③(白) 白色(縮)灰白色	(D) 1/8		38
8 P-511	古磁碗	①(15.3)	輪状口継。 口縁部は外傾し端部で端部に凹入する。	(内外)ヨコナダ後施鉄。 (外)口縁部に施漬り有。 (内)口縁端部に隙間にによる2重縁跡。	①細密 0.5mmの砂粒有 ②縫隙 ③(白)灰白色 (縮)オーラー色 (後)灰白色	(D) 1/8		155
9 P-1469	古磁碗	①(13.6)	口縁部は外傾し端部は丸い。	(内外)ヨコナダ後施鉄。 (外)口縁部ヨコナダ2条の斜削開窓、体部追加形文。後施鉄。	①施鉄 ②軋質 ③(白)灰白色 (縮)オーラー色 (後)灰白色	(D) 1/6	貢入有	214
10 P-534	L 16.5 W 10.0 T 7.6 鐵石		自然石の一端を欠く。	長縦上面に祇表。1端部に縫打鉄。	③黒褐色 灰褐色		1,650g	120
11 P-1031	石 白	W 18.8 T 11.1	上石臼。	残存部は主張3本により3区画に分割。1半径は刷畫13本で構成。			3,020g	181

遺構外(第105・106・107・108図)

1	縄文土器 鉢		口縁部は直立し端部で外方に肥厚させ錐る。	(内外)ヘラ状工具によるナダ。 (外)口縁端部に附帶粘材後ナダ。後にヘラ工具使用による別み目を残存部に4割窓。	①2mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③青色	(L)一部		25
2	縄文土器 (口縁部)		口縁部は内傾し端部で外方につまみ出す。	(外)口縁端部ナダ、工具による押圧突起。削ナダ後接縫ナダ。 (内)工具ナダ。	①2mm以下の砂粒を多く含む ②良 ③(内)淡褐色 (外)暗褐色	(D)一部	移動	26
3	縄文土器 (口縁部)		口縁部は外傾し端部で肥厚する。	(外)口縫延長突起貼付後削成形。体部削鉛後工具ナダ。縫部輕いナダ。 (内)体部ヘラ状工具によるナダ。	①1mm以下の砂粒を僅かに含む ②良 ③(内)淡褐色 暗色 (外)暗色	(D)一部		41

補圖番号	器種	法量(cm) ①長 ②幅 ③最大頭径 ④厚	形態・手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号	
4	埴文土器 (体部)		(外)宿根後工具状のナダ。 (内)削割不明瞭。	①2~3mmの砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)明黄褐色 (外)灰黃褐色	(体)一部		41	
5	茎生土器 蓋 (口縁部)	①(22.2)	口縁部は外反し端部で水平気味に終わる。外方に凹面をもつ。	(外)風化剥落不明瞭。 (内)ヨリナゲ後10mm以上の御留波状文後御留半周軸とする文を残存部に1網刷。	①1mm後の砂粒を多く含む ②(口)1/9		48	
6	茎生土器 蓋	①(18.6) ②7.9 ③(35.2) ④(43.5)	縦上口縫。 口縁部は外反し端部で内に傾斜して面をもつ。 体部は中上位に最大径をもち大きく張り出す。 底部は平底。	風化剥落著しい。 口縫部ヨリコナゲ後下方肩部にハラ磨による削み目が連続する。 以下ハラ磨きヨリ御留波状底表面削除。体部ハケ目後側部に御留波文を2段に残す。底部ハラ磨き。底面ナダ。 (内)口縫部ハラ磨き痕。頸部ナダ。体部ハケ目後底部ナダ。体部下半所々に成形時の指痕压痕が残る。	①1mm後の砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)淡褐色 ④(外)淡褐色	黒斑有 (口) 1/2 (体) 1/2 (底) 1	1~3 6 8~12 15 16 18~22 24 26 30 31	
7	茎生土器 蓋	①24.0 ②17.4	縦上口縫。 口縫部は更く外傾し端部で上方へ丸く納める。	(外)体部ハケ目後1/3上半斜傾ハケ口後側ハケ日後斜傾ハケ下平斜傾ハケノリナゲ後斜傾方向への工具ナダ。肩部は輕いナダ後連続斜傾文を2段に残す。上位残存部には工具孔が4ヶ所以上? 頸部後ハケ目後斜傾ハケコナダ。 (内)口縫部ハラ磨きヨリ後口縫部輕いヨリナダ。底面ヨリナダ。体部1/3上斜傾ハケノリナダ所々ハラ磨き。以下ハケ目後工具ナダ。他の動き9ヶ所以上。体部中位に工具孔15~16カ所残存する。	①0.5mm後の砂粒を多く含む ②2mmの砂粒有 ③(口)1/2 ④(内)淡褐色 ⑤(外)淡褐色	(口) 1/2 (肩) 3/4 (体) 1/2 上半 1/2 下半 1/4	5 18 19 23 24 27 28 30 31	
8	茎生土器 蓋	①(12.3)	縦上口縫。	(外)口縫部面に3~4条の凹溝。肩部工具ナダ後頸部ヨリコナダ。 (内)頸部ナダ。肩部工具ナダ後頸部ナダ。	①1~2mmの砂粒を多く含む3mmの砂粒有 ②不良 ③(内)淡褐色	黒斑有 (肩) 1/2	42	
9	茎生土器 蓋	①(25.0) ②6.5 ③(29.8) ④(27.6)	縦上口縫。 口縫部は更く外傾し端部で上方へ丸く納める。 体部は中上位に最大径をもつ。 底部は平底。	(外)体部2/3上半板ハケ目後斜傾ハケ日。後削部に連続削波痕2段盛。体部1/2後ハラ磨き後斜傾方向への工具ナダ。頸部ヨリコナダ後斜傾面に1条の凹溝を残す。底面成形時の指痕压痕。 (内)口縫部軽いハラ磨き。底部ヨリナダ。体部2/3上半ハケ目後下半丁寧なナダ。ハラ磨き痕。成形時の指痕压痕。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③(内)淡褐色	黒斑有 (口) 3/8 (肩) 3/4 (体) 1/2 (底) 1	8 13 14 19 20 26 28 29 30 31	
10	器台	①(28.6) ②29.1 ③30.9	縦は上下にハの字状に開き口縫部は上下に厚薄させ、開閉面をもつ。	(外)体部ハケ目後受波痕部端部ハラ磨き後上縫痕への削き。 口縫部面に4条の凹溝。台面部ハラ磨き後削痕ナダ。 (内)受部1/3下半ナダ後2/3上半ハラ磨き。隣部以下ハラ磨き後削痕ナダ。	①1~2mmの砂粒を多く含む ②やや不良 ③(内)淡褐色	(口) 1/3 (脚柱) 1 (脚台) 3/5	赤彩 黒斑有	42
11	土鍋	①(28.5)	口縫部は更く外傾し端部に凸面をもつ。	(外)体部ハケ目後口縫部端部ナダ。端面に1条の沈痕。 (内)口縫部はハケ日後原体不明のナダ。体部外縫と同一ハケ目後原体不明の軽いナダ。	①1mm以下の砂粒を多く含む ②良好 ③(内)淡褐色	(口) 1/11 保付着	27	

種別 番号	器 様	寸法(㎜) ○□ ○直 ○△大規 直 ○△深	形 状・手 法 の 特 徴	①船 上 ②流 成 ③蒸 調	残存状況	備 考	監視 登録 番号	
12	手 捺 ね 土 器	①(6.4) ②(2.9) ③(1.1) ④(4.8)	口縁部は複数外輪し端部 で丸く切れる。 体部は中上位に最大形を もつ。	(内外)手捏ね成形。 (外)輕いナデ。 (内)ナデ。	①0.5m前後の砂粒を多 く含む ②やや不良 ③(内)暗褐色 (外)淡褐色	(口) 1/2 (底) 44121	瓶付岩	25
13	土 壤 器 杯	①(10.4) ②(5.0) ③(2.6)	口縁部は外傾して端部は 丸い。	(内外)ヨコナデ。 (外)底面軸糸切り。 (内)底部ナデ、周囲の工具痕。	①0.5m前後の砂粒を多 く含む 1.5mの砂粒有 ②良 ③褐色	(口) 1/7 (底) 1		7
14	土 壽 器 高台付杯 (底 部)			(外)ヨコナデ。 (内)工具によるヨコナデ。	①0.5m以下の砂粒を含 む 2.mの砂粒有 ②良 ③淡褐色	(底) 1		8
15	瓶壺土器		口縁部は直立気味に立ち 上がり端部で肥厚し四面 をもつ。	(外)口縁部指成形後ナデ。 (内)工具ナデ後ナデ。	①1m前後の砂粒を多く 含む ②良 ③褐色	(口) 1一部		1
16	瓶壺土器	①(12.3)	山縁部は外傾して開き端 部で肥厚して凸面をも つ。	底化剥落不明確。 (外)底部手捏ね成形後ナデ? (内)口縁部ナデ。	①1mm以下の砂粒を含む 5mmの砂粒有 ②良 ③淡褐色	(口) 1/5		1
17	甌			(外)沿板形後ナデ。 (内)指成形後ハケ目。ナデ。	①2mm前後の砂粒を多く 含む ②良 ③(内)淡褐色 (外)黃褐色 淡褐色	甌口部一部 黒斑有		49
18	瓶壺器皿	①(16.6)	口縁部は立ちこみをもって 下り、端部で削曲、下方 へ近く切れる。	(内外)ヨコナデ。 (外)天井部分角切り直。 (内)天井部分ナデ。	①1m前後の砂粒を多く 含む ②良 ③淡褐色	(口) 1/5		2
19	瓶 壺 金杯杯身	①(13.2) 受泡溝 (15.4)		(内外)ヨコナデ。 (外)底部同斜ヘタ切り。 (内)底部ナデ。	①1m以下の砂粒を多く 含む ②不良 ③(内)灰褐色 (外)周色	(口) 2/7		6
20	瓶 壺 金杯杯身	①(11.1) 受泡溝 (13.6)	立ち上がりは内無し端部 は縮る。 体部は丸く受部は上外方 へ丸く切れる。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部同斜ヘタ切り。	①1m以下の砂粒を多く 含む ②良 ③淡褐色	(口) 1/5 (底) 1/5		2
21	瓶壺器皿	①(9.4) ②(9.6)	口縁部は直立し端部は丸 い。	(内外)ヨコナデ。 (外)近底ヘタ切り後ナデ。 (内)ナデ。	①1mm前後の砂粒を多く 含む ②良 ③暗褐色	(口) 2/3 (底) 1/3		7
22	瓶 壺 高 杯	③(9.6)	縁部は基盤から縦やかに ハの字状に開き端部で削 曲、外下方へ丸く切れる。	(内外)ヨコナデ。	①1mm前後の砂粒を多く 含む ②良 ③淡褐色	(杯底部) 1/3 (脚) 1/2		7
23	陶 器 盖	④(28.5)	口縁部はハの字状に大き く開き端部にかえりをも つ。	(内外)ヨコナデ後削曲。	①0.5m以下の砂粒を含 む ②吹質 ③(底)灰色 (脚)リーブ白色 (底)灰白色	(口) 1/17		44
24	陶 器 盆 脚部	①(28.1) ②(16.5) ③(9.5)	口縁部は外傾し端部で外 方に肥厚させ上部につま み出す。 底部は平底。	(外)体部粗なヨコナデ後ハケ状工 具によるナデ? ヘラ状工具。底 部粗なナデ。 (内)右逆側方向へのナデ後7条星型 の脚跡目を施す。	①1~2mmの砂粒を多く 含む 8~10mmの砂粒有 ②良 ③(脚)灰色 (内外)にぶい橙色	1/6		44
25	瓦質火鉢 (脚 部)			(外)底部ナデ。我脚部接合後ナデ。詳 細剥取り成形。両箇の刺突4は良 適しない。	①1mm以下の砂粒を多く 含む ②良 ③(脚)白色 淡褐色	一部		33

## 鉄製品

(単位) : cm

出土 地	辨認 番号	器種	全長	法 量						形態の特徴	残存状況	備考	遺物 登録 番号				
				刀部			茎部										
				長さ	断面形	長さ	断面形	計測部位	幅	厚さ							
SK-08	第38回	刀子	(7.8)		二等辯 三角形			刀身中央部 茎 中央部	1.50	0.34	両側不明窓。	切先部欠	(16.4) g 本質直	5 2			
SK-12	第49回	釘	4.9					上 締	0.30	0.30		ぼば充存	(1.4) g	6			
	第49回	釘	(4.1)					下 締	0.14	0.20				5			
	第49回	不 明	(5.5)					上 締	0.36	0.28		頭部欠	(1.0) g	6			
SK-30	第81回	著	?	16.9				下 締	0.20	0.16				6			
								上 締	0.88	0.33							
								下 締	0.34	0.23							
P-328	第104回	不 明 製 品	6.4					上 締	0.31	0.27		ぼば充存	(10.5) g	16			
P-018	第104回		(30.1)					中辯(手柄) 中辯(向側)	4.00	3.20		完存	320 g	187			
								(15.5)	4.16	0.45							
								刀身 元 部	3.70	1.30		切先部欠	(404) g	2 34			
追跡外	第109回	不 明 製 品	(12.6)					基 元 部	2.62	1.12							
								茎 中央部	2.50	0.95							
								茎 尾 部	0.80	0.77							
追跡外	第109回	不 明 製 品	(10.6)						0.40	0.47		一端部欠	(14.8) g	29			
									0.43	0.44							
									0.40	0.40							

## 銅製品

(単位) : cm

出土 地	辨認 番号	器種	L(長さ) W(幅) T(厚さ) D(径)	形 態 の 特 徴						残存状況	備 考	遺物 登録 番号	
				刀身	刀身	刀身	刀身	刀身	刀身				
SK-12	第49回	審 教 法 具	口径 4.4 底径 6.35 器高 11.9	第式造字形章ね。全体に導手。頭部、茎部には2本1組の絆を飾る。底部は本絆をし奥部を枯土で程め底板とする。刃一部膨張しひび割れる。						完存			4
SK-12	第49回	審 教 法 具	口径 15.5 底径 15.5 最大幅 6.9	把手部・連縫部・玲珑部に鈎造。中筋は内角とし、頭部は緩やかに凸曲する。把手には丸形飾、茎を三線造らし、中央には丸目を飾る。鈎部には縦を造るすが玄文。						完存			5
SK-26	第71回	執 貨	D 2.4 T 0.1 方形孔 0.7	單體元寶? 裏面文字を照し。						完存	2.7 g		9

# 図 版



調査地南半  
全景（俯瞰）



調査地北半  
全景（東から）



図版 2



南半中央断面①  
(北から)



南半中央断面②  
(北から)



南半中央断面③  
(北から)



6

(五鈸鉢)

5

(草瓶)



図版 4



SK-02 出土遺物 (1)



2

SK-06 出土遺物 (1)



2

SK-09 出土遺物 (1)



SK—12 出土遺物 (2)



SK—13 出土遺物 (1)



SK—26 出土遺物 (1)



SD—06 出土遺物

図版 6



SD-13 出土遺物 (2)



SD-21 出土遺物

1

SD-22 出土遺物

2



7

P—510 出土遺物

9

P—1469 出土遺物



6

SK—02 出土遺物 (2)

5

SK—09 出土遺物 (2)



4

SK—09 出土遺物 (3)

8

SK—26 出土遺物 (2)

図版 8

調査前（北西から）

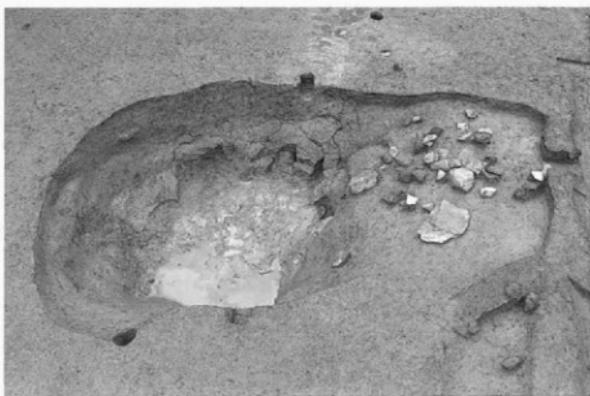


SK-01

完掘状況（北東から）



SK-02  
完掘状況（北から）



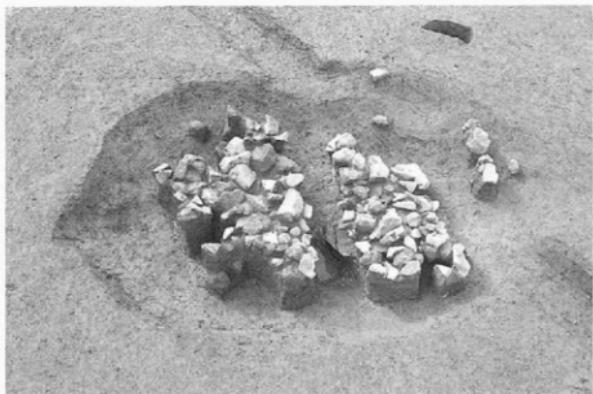
SK-03  
断面（北東から）



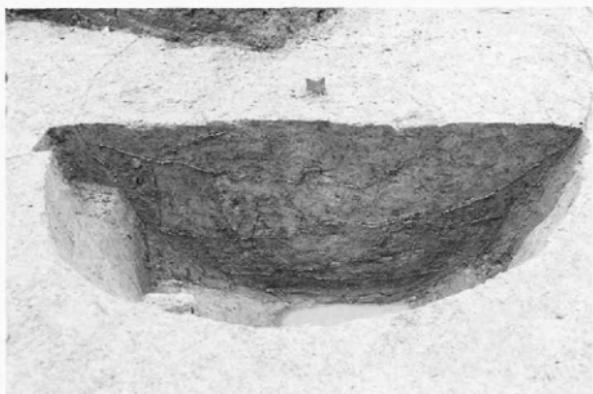
SK-03  
完掘状況（北東から）



図版 10



SK-04  
検出状況（北東から）



SK-05  
断面（南から）

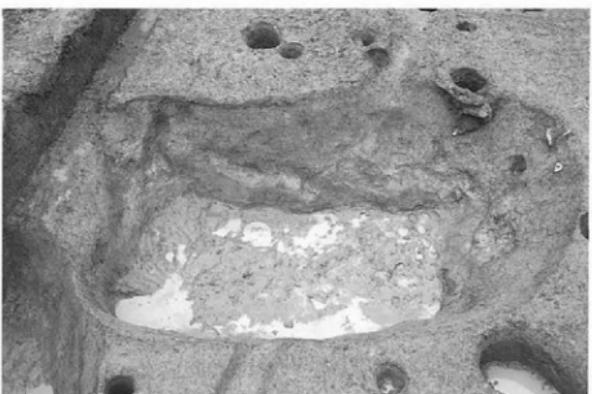


SK-05  
完掘状況（西から）

SK-06  
断面（南から）



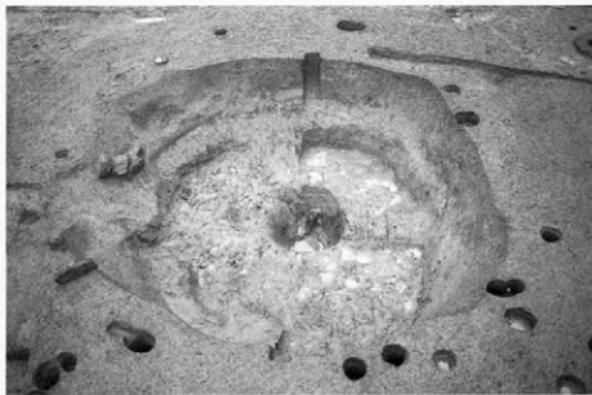
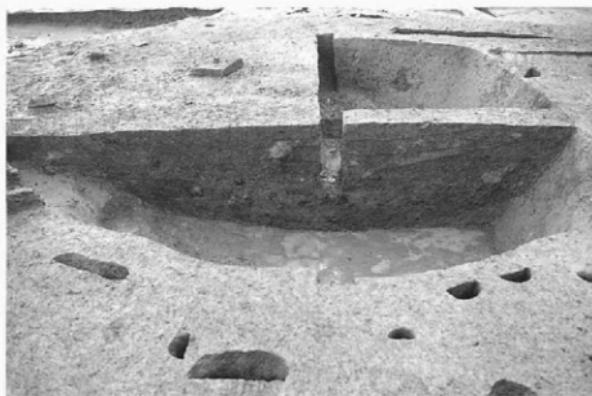
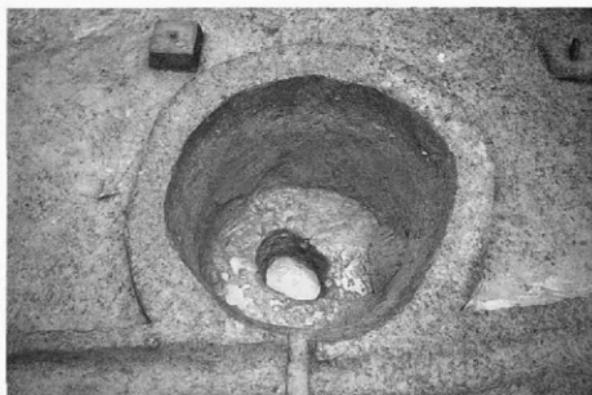
SK-06  
完掘状況（南から）



SK-07  
断面（南東から）



図版 12



SK-10  
断面（南から）



SK-10  
完掘状況（南から）



SK-11  
断面（北東から）



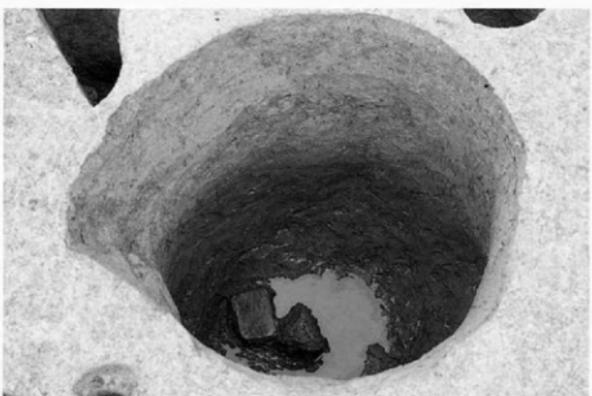
図版 14



SK-11  
完掘状況（南西から）



SK-12  
断面（北西から）

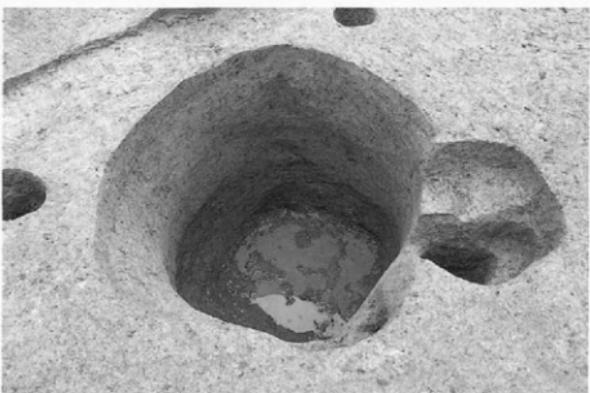


SK-12  
検出状況（西から）

SK-13  
断面（北西から）



SK-13  
完掘状況（北西から）



SK-16  
断面（北から）



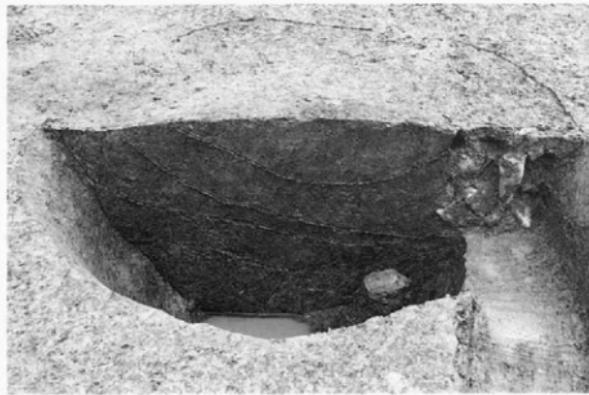
図版 16



SK-17  
断面（北から）



SK-18  
断面（北東から）

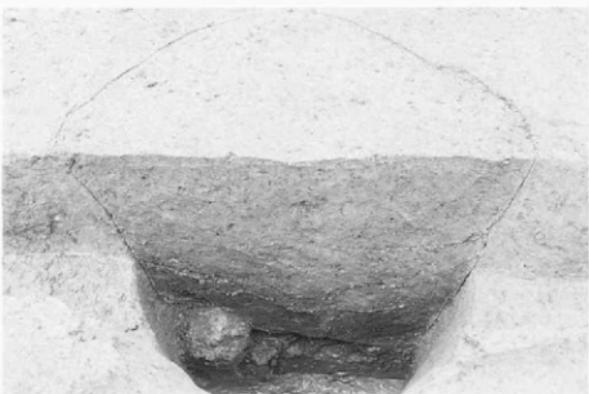


SK-19  
断面（東から）

SK-19  
検出状況（西から）



SK-21  
断面（南西から）



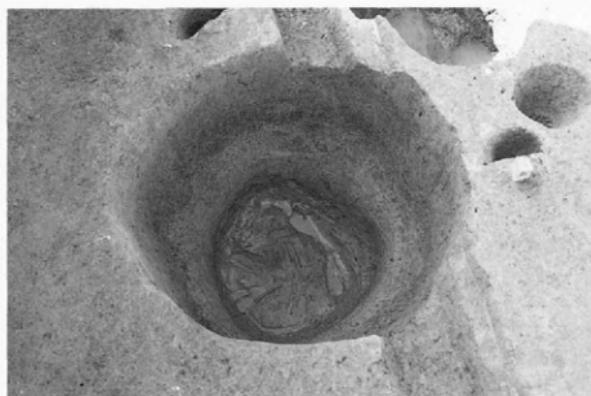
SK-21  
完掘状況（北西から）



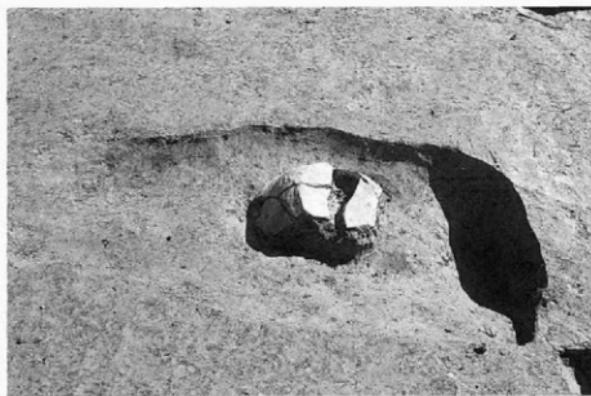
図版 18



SK-23  
断面（東から）



SK-23  
完掘状況（南東から）



SK-24  
検出状況（西から）

SK-25  
断面（南東から）



SK-25  
完掘状況（北東から）



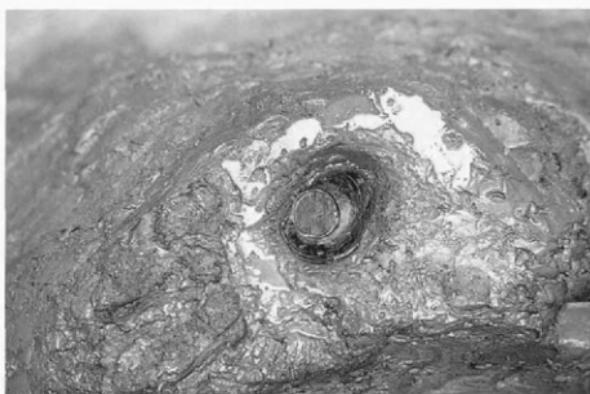
SK-26  
断面（南西から）



図版 20



SK-26  
完掘状況（南東から）



SK-26  
遺物出土状況（北西から）



SK-27  
断面（北東から）

SK—29  
完掘状況（北東から）



SK—30  
断面（北東から）



SK—30  
検出状況（南東から）



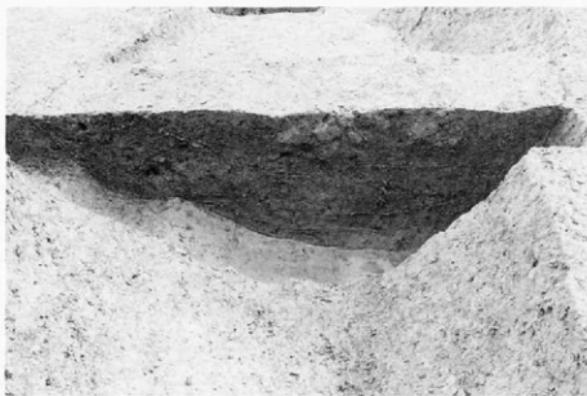
図版 22



SD-01  
断面（東から）

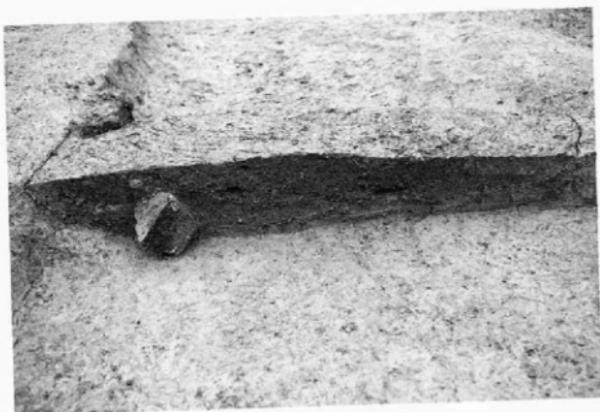


SD-03  
断面（南西から）



SD-06  
断面（西から）

SD-10  
断面（南から）



SD-15・16・17  
断面（南東から）



SD-21  
断面（南西から）



図版 24



SD-23  
断面（南西から）



SD-25  
断面（南東から）



SD-34  
断面①（北から）

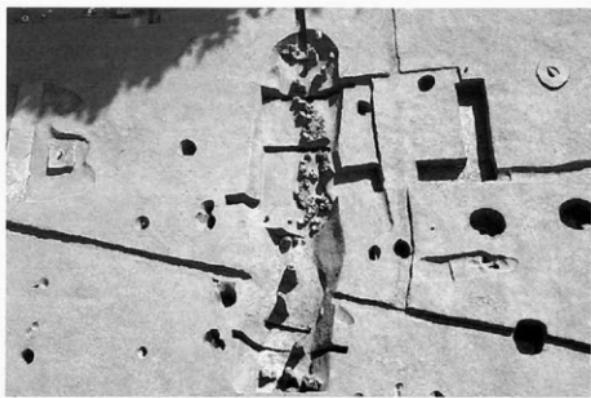
SD-34  
断面②(南から)



SD-34  
断面③(北から)



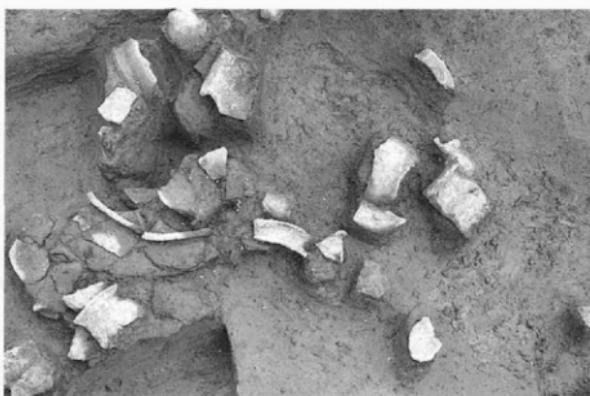
SD-34  
検出状況(北から)



図版 26



SD-34  
検出状況（北から）



SD-34  
遺物出土状況（南東から）

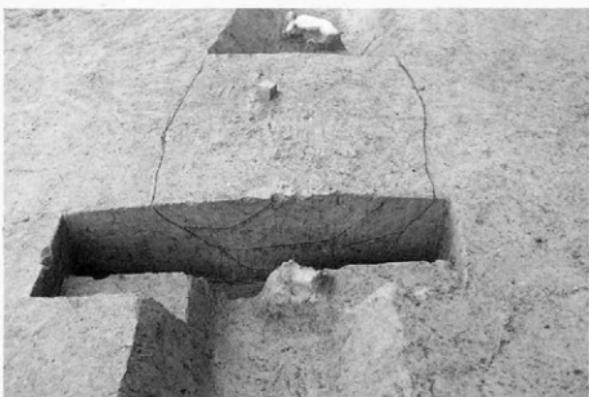


SD-34  
完掘状況（北から）

SD-35  
検出状況（西から）



SD-35  
断面①（西から）



図版 28



SD-35  
完掘状況（西から）

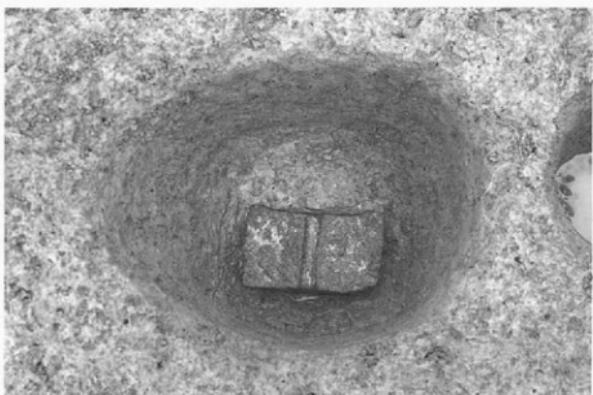


SD-35  
断面②（西から）

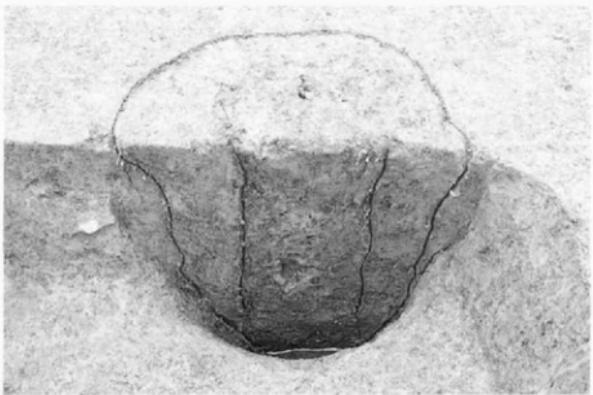
SD—35  
遺物出土状況（南から）



P—1031  
検出状況（北から）



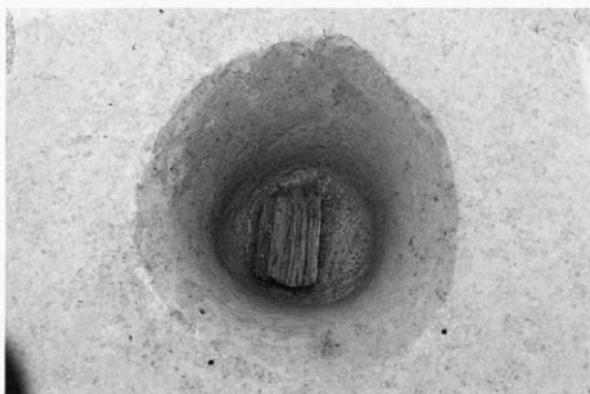
P—1397  
断面（南東から）



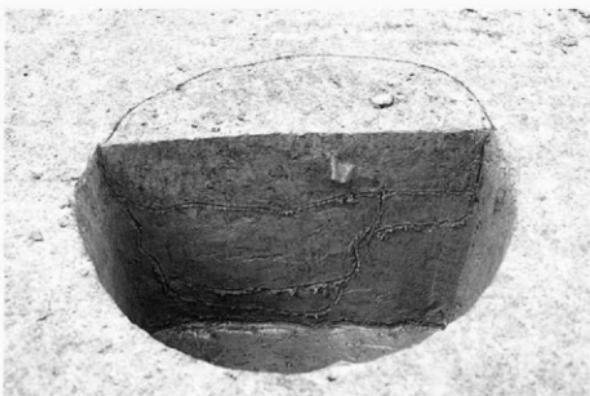
図版 30



P—1405  
検出状況（北東から）

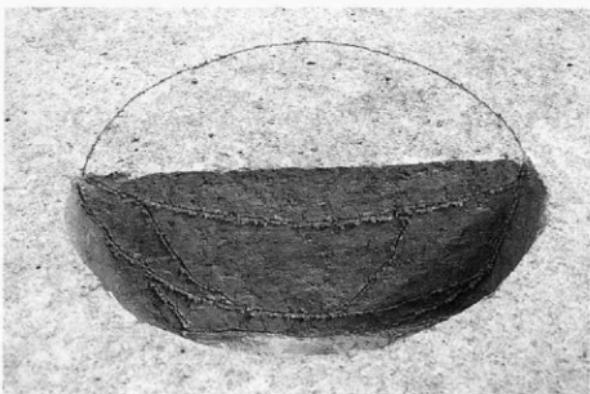


P—1555  
検出状況（南東から）



P—1557  
断面（東から）

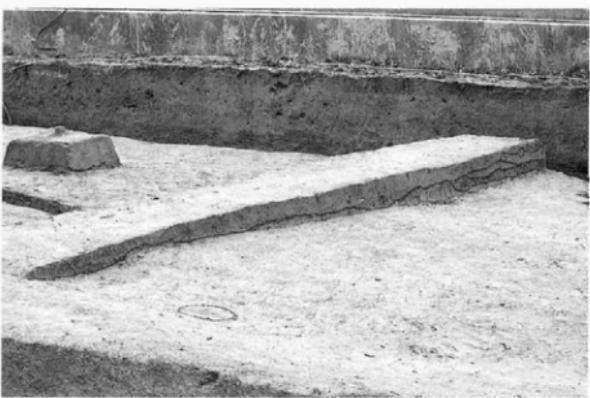
P—1558  
断面（北から）



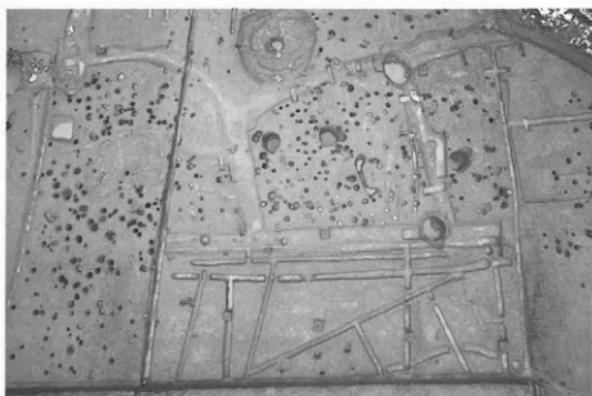
P—1634  
断面（北から）



整地層断面（南から）



図版 32



北半ピット群  
(北東上空から)



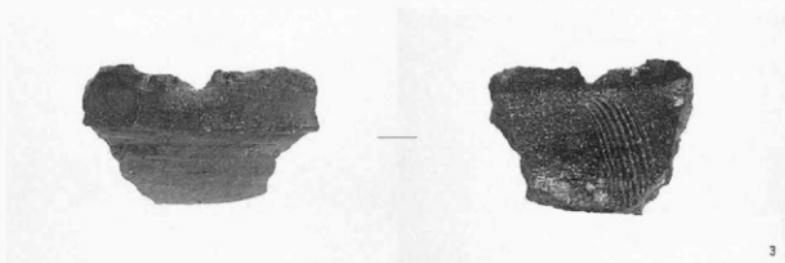
南半ピット群 (北から)



南半中央ベルト下  
遺物出土状況(北東から)



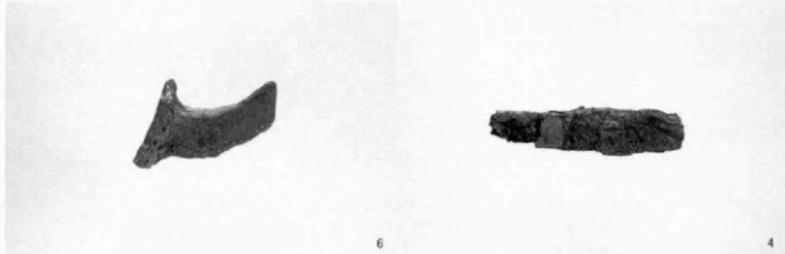
SK-01 出土遺物



SK-02 出土遺物 (3)



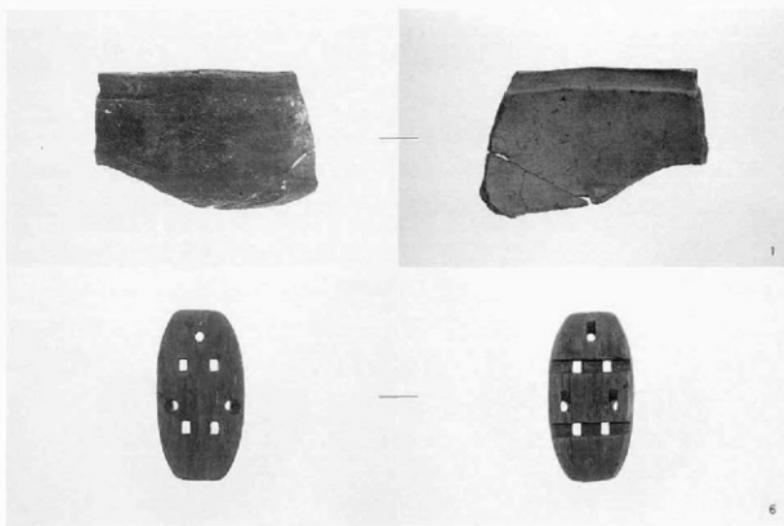
SK-06 出土遺物 (2)



SK-06 出土遺物 (3)

SK-08 出土遺物

図版 34



6



7

3

SK-09 出土遺物 (4)



5

SK-10 出土遺物 (1)



SK-10 出土遺物 (2)



SK-11 出土遺物



SK-12 出土遺物 (3)



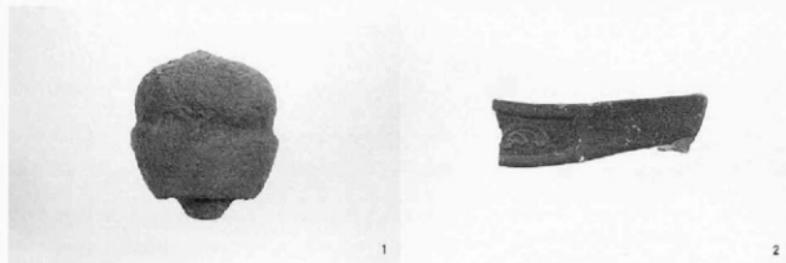
SK-14出土遺物



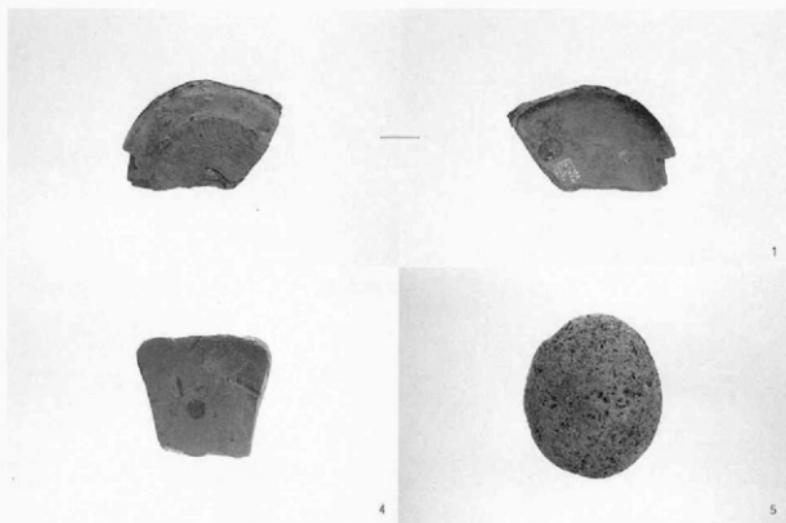
SK-17 出土遺物



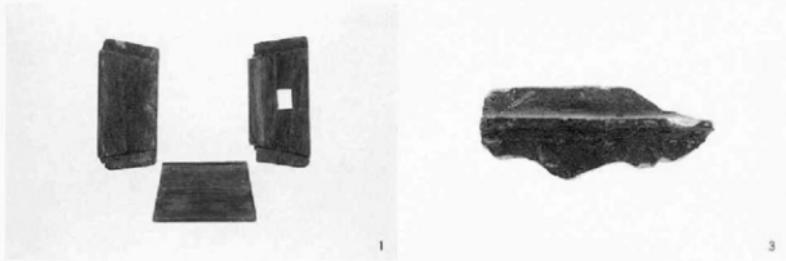
図版 36



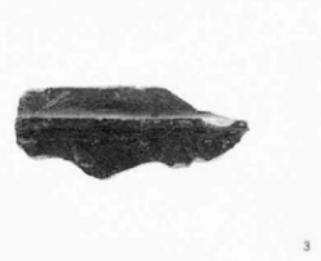
SK-18 出土遺物



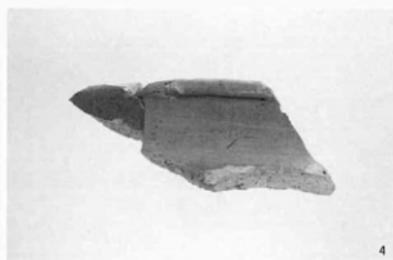
SK-26 出土遺物 (3)



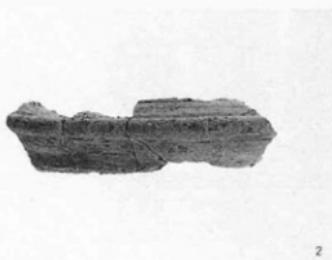
SK-29 出土遺物



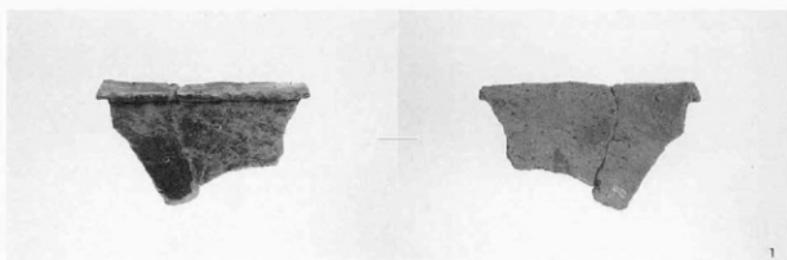
SK-30 出土遺物 (1)



SK-30 出土遺物 (2)



SK-31 出土遺物 (1)



SK-31 出土遺物 (2)



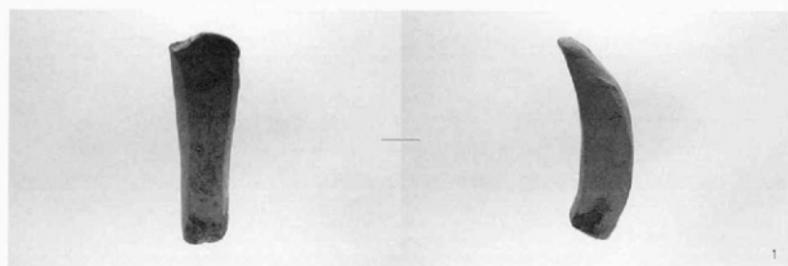
SK-32 出土遺物 (1)

SK-35 出土遺物 (1)

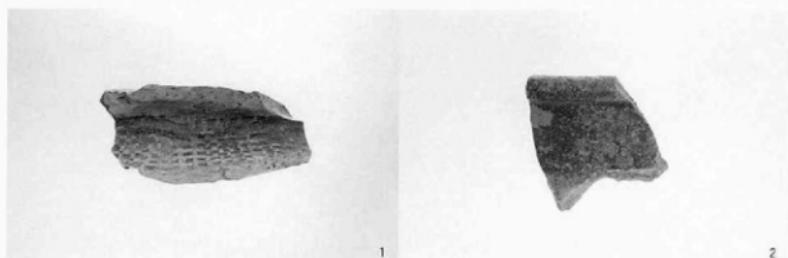


SD-03 出土遺物

図版 38

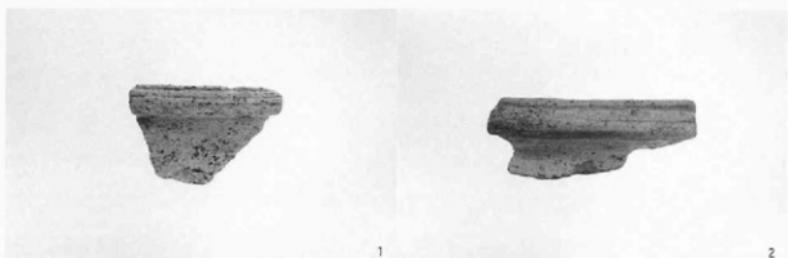


SD-07 出土遺物

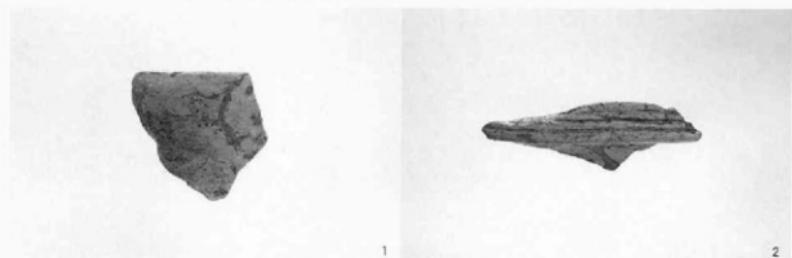


SD-08 出土遺物

SD-21 出土遺物



SD-32 出土遺物

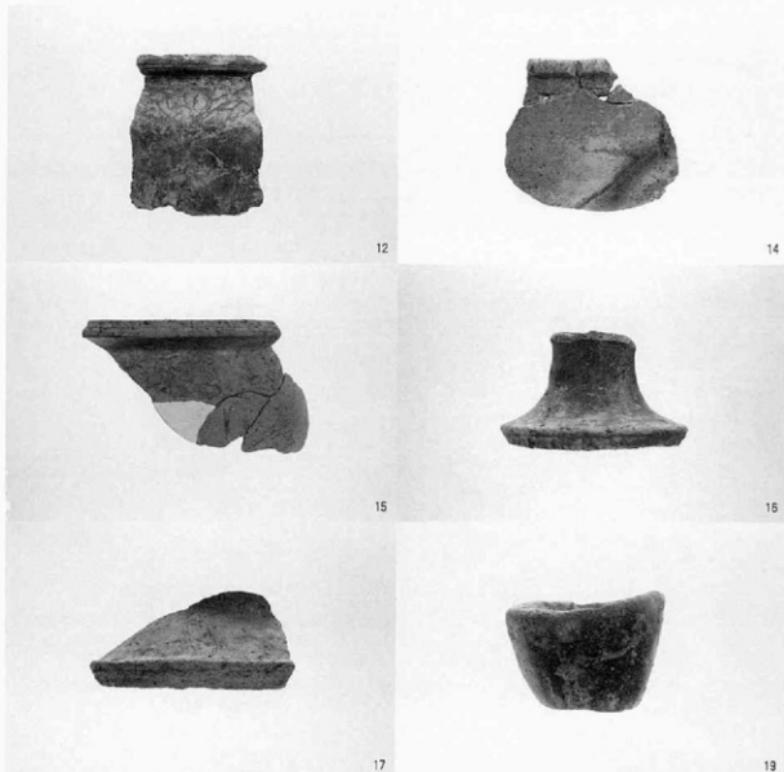


SD-34 出土遺物 (1)

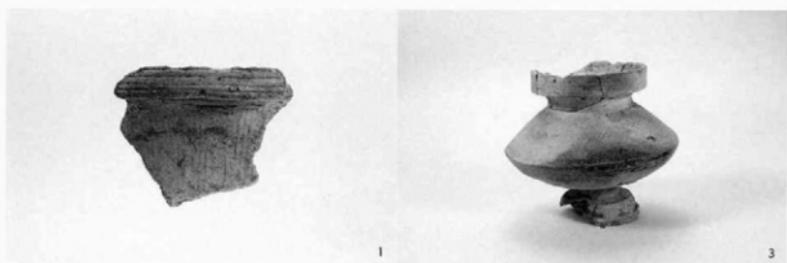


SD-34 出土遺物 (2)

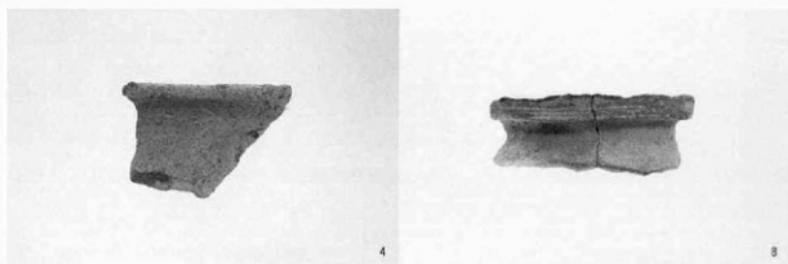
図版 40



SD-34 出土遺物 (3)



SD-35 出土遺物 (1)



4

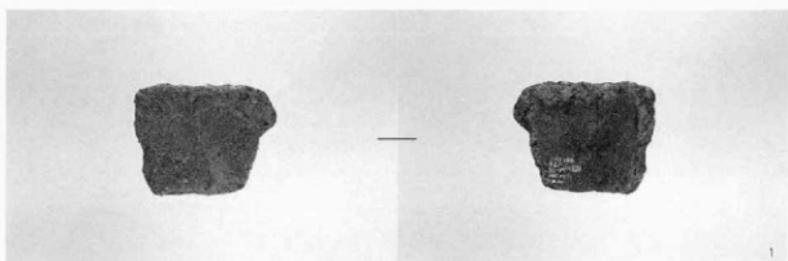
8



9

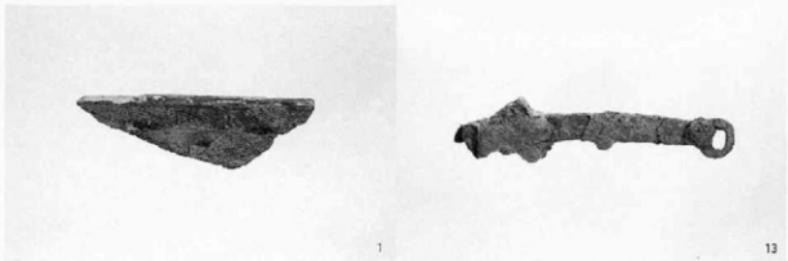
10

SD—35 出土遺物 (2)



1

SD—39 出土遺物



1

13

SD—54 出土遺物

P—018 出土遺物

図版 42



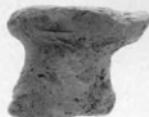
1

P—437 出土遺物



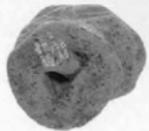
10

P—534 出土遺物



13

P—1078 出土遺物



6

P—796 出土遺物



3

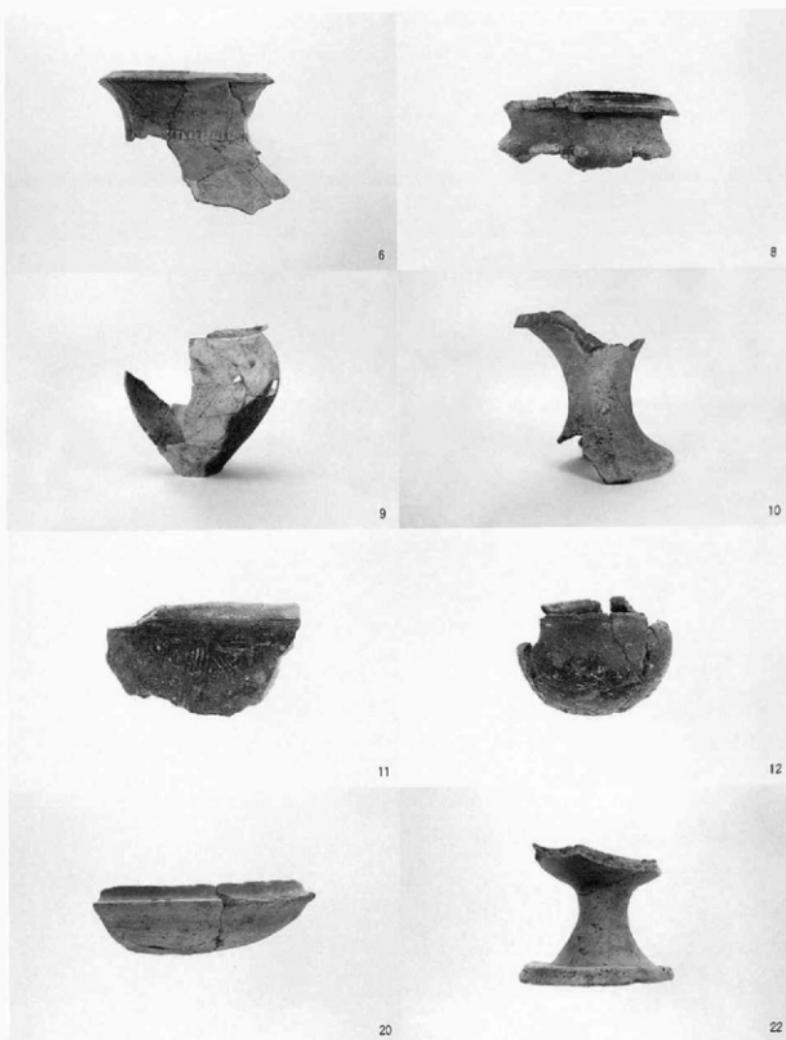
P—1269 出土遺物



P—906 柱根

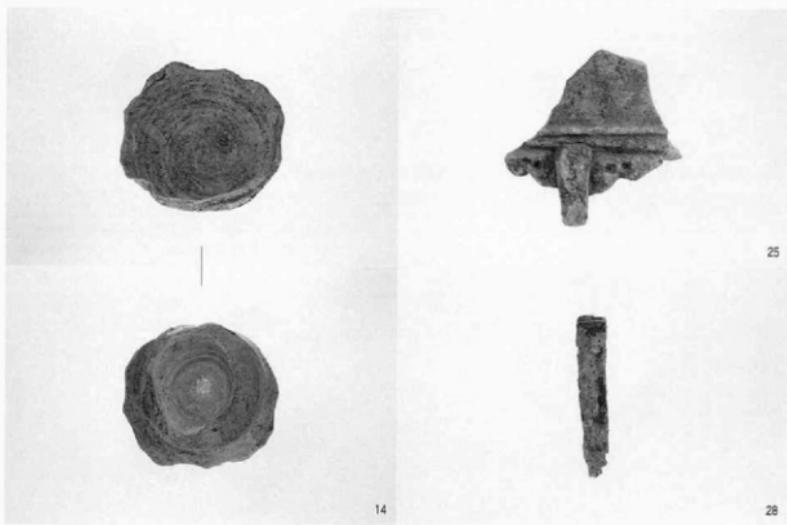


P—1405 柱根



遺構外出土遺物 (1)

図版 44



遺構外出土遺物 (2)

# 報告書抄録

ふりがな	もとだかえんのまえいせき							
書名	本高円ノ前遺跡							
副書名	中国横断自動車道 姫路鳥取線整備促進開通事業に係る埋蔵文化財の発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	藤本 隆之							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL(0857)23-2410							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因	
本高円ノ前遺跡	鳥取市 本高	31 201		35° 28' 31"	134° 12' 16"	2003.10.01 ~ 2004.03.30	3,236m <sup>2</sup> (中国横断 自動車道) 姫路鳥取線 整備促進 開通事業に 伴う調査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
本高円ノ前遺跡	集落	弥生時代 後期  平安時代 鎌倉時代 室町時代	土坑 溝状造構  掘立柱建物 土坑 溝状造構 柱穴、ビット	2基 3条  10棟 39基 60条 1,269基	土器 須恵器  土師質土器 瓦質土器 陶磁器 (白磁、青磁、天目等) 銅製品 (五鉢鉢、革瓶、錢貨) 木製品 (漆器、下駄等) 鉄製品	土坑内から密教法具 (五鉢鉢、革瓶)が出土		

---

---

## 本高円ノ前遺跡

—中國横断自動車道 姫路鳥取線整備促進関連事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成16年3月31日 印刷・発行

編集・発行 財團法人 鳥取市文化財団  
印刷所 勝美印刷株式会社

---

